
IS 短編コンテスト グラハム杯（仮）

短編企画者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 短編コンテスト グラハム杯（仮）

【Nコード】

N3453R

【作者名】

短編企画者

【あらすじ】

アニメ終了記念のIS インフィニット・ストラトス短編コンテスト

提供

作者名

てん様

作品名

インフィニット・ストラトス〜デュアルストーリー〜

作者

IS（黒流）様

作品

IS インフィニット・ストラトス 2つの月

IS インフィニット・ストラトス 漆黒の流星

作者

天道様

作品

IS インフィニット・ストラトス 絆を紡ぎ、運命を変える決闘者〜

作者

岸辺 翔様

作品

IS<インフィニット・ストラトス>序曲の終焉〜

作者

リーン様

作品

IS>インフィニット・ストラトスくくあの神による介入物語く

でお送りします。

ルール

趣旨

『現在ISの小説を書いている皆さまの交流』と『同じ条件で書きあった作品を見ての筆力の向上』

あと息抜きや

現在掲載中の作品の宣伝に使っていただいてもかまいません。

掲載場所

ココです

ルール

絶対条件と致しまして

IS>インフィニット・ストラトス<が原作であること

そして内容ですが

【春】部門と【自由】部門に分けたいと思います

【春】

季節の春に関することで小説を書いていただきます

『自由』

文字の通りです。どのような小説でも構いません

お一人様、1部門につき1つまで

最高2個まで投稿可能とさせていただきます

キャラの使用などに制限はございません

ISの小説であるなら、作者様自身が登場しようが、現在連載中の作品のキャラを出そうが

禁則事項に触れない限りは基本OKとします

禁則事項に関しても

18禁や盗作の疑いのあるモノなどの常識的なモノだけです

また掲載の際

【作者名】『題名』とさせていただきます

例えばこの作品ですと

【天道松】『IS>インフィニット・ストラトスくく黒い侍……なのか?』となる訳です

また作者名は匿名希望も可能です。

その場合は【匿名希望】とそのまま書いてください。

感想

感想を書く際は

必ず感想を送りたい作者、または作品名をご記入ください

参加方法

2つ方法があります

？ 自身で掲載する

私【天道松】か【短編企画者】に直接メッセージを送る。
またはコメントを残していただく

この場合は『名前と参加したい』と書いてください

そうしましたら、

掲載先のIDとPASSを教えますのでご自身で掲載してください

注意

コレに関しましては

絶対に自分の作品と感想以外はいじらないでください

？ 私に作品を送る

下記のメールアドレスに

部門と作品名、作品、自身の名前と掲載時の名前をご記入ください。
この場合掲載デザインは

「」の前後は1つ開けるなど

私の作品のデザインで私が投稿します。

感想を返す際にIDとPASSはメールで返送します

s n o w | d a r k | 0 6 0 8 @ y a h o o . c o . j p

優秀者

参加作者の皆さまには締め切り後

お一人様1票お持ちになってもらい、

掲載されている作品に投票していただきます

最も票が多かった作品を

最優秀賞として発表します。

商品などはありません。名誉？だけです

票の全容も集計役である私以外はわからないようにします。

自分が何票あったか知りたい場合のみ

その方に私が直接連絡します

締め切り

2011年3月3日～2011年4月10日23:59予定とします

作者投票開始日

後ほど詳しく作者様にお知らせします

読者投票については未定とします

題名見本 〈春〉 【天道松】 『春部門の開会式?』 (前書き)

これは【天道松】と書いていますが
主催者としての見本です

私の作品はまた別に掲載します

閉会の際に違う作者様に

これと同じようなことをしてもらおうと思っています。

題名見本 〈春〉 【天道松】 『春部門の開会式?』

グラハム「一夏。一言頼む」

一夏「俺かよ!？」

グラハム「私は企画者の小説の主人公に過ぎない。なら原作主人公の君に任せよう」

一夏「えつと……皆さん。沢山の作品投稿お待ちしております」

一夏「読者の方も感想をドンドン書いてください。感想の1つが勇気になります」

グラハム「実際に天道松は、いつも感想を楽しみに書いているからな」

一夏「これでいいだろ？」

グラハム「まあ及第点だな。どしどし募集待っているからな」

二人『よろしく!!--!』

題名見本 〈自由〉 【天道松】 『自由部門開会式?』 (前書き)

これは【天道松】と書いていますが
主催者としての見本です

私の作品はまた別に掲載します

閉会の際に違う作者様に

これと同じようなことをしてもらおうと思っています。

題名見本 〈自由〉 【天道松】 『自由部門開会式?』

一夏（以降オリーと書きます）「【そうだ……ハーレムを書こう！】の織斑一夏と」

オータム「アア、めんどくさいイ」

オリー「えっと。オータムでお送りします」

オータム「大体私らはアツチと違ってマイナーじゃねえかアア」

オリー「仕方がないだろ。開会の言葉を他の作者様に依頼するのを忘れたんだよ」

オータム「あの野郎の尻拭いかよオ」

オリー「閉会はちゃんと他作者様に依頼するらしいから……コレ読んで？」

オータム「【自由】と言う事できつと色々な作品が出てくると思いますがアア」

オリー「それを企画者も今から楽しみです。皆さん頑張っていきましょう」

オータム「ハイハイ終了おオ。解散」

オリ「えっと……皆さん頑張ってくださいね」

天道松「……人選ミスかな？コレ」

〈自由〉【IS（黒流）】『漆黒の流星〜IF〜』（前書き）

自分が初でしょうか？ アイデアやらをまとめたり、試作してみたりで時間取られました。本編優先でしたので。

天道松さん、こんなのでよろしいでしょうか？

では、どうぞ

《自由》【IS（黒流）】『漆黒の流星〜IF〜』

「こんにちは？ またはコンバンワ。」おはようございます」

悠「おま…だれだ？」

「だれって…作者」

悠「……」

「何で黙るのさ！」

悠「わかるわけないだろ！ なんでもそんな仮面つけてんだよ」

「え？ いいじゃん、ブシドー。以外と好きだよ」

悠「そこはどうでも良い。あまりにも似合っていないから外せ」

「ちえ、せつかく作ったのに」

悠「わざわざ作るな。そしてつけても似合わないことを自覚しろ」

「安心しろ、自覚はしてる」

悠「はいはい。どこのメルヘンていとくんの真似は良いから。それで今回は？」

「…あ、目的忘れてた」

悠「一回死ねば治るんじゃない？」

悠の蹴りを作者はバク転で回避した

「アブなかった」

悠「ちっ、あいかわらず運動部でもないくせに無駄に良い運動神経だな」

「よく言われるよ（リアで）」

悠「で、気を取り直して」

「えっと、まずはこの企画に参加させていただいたことに感謝しますm（――）m」

悠「俺からも感謝しますm（――）m」

「まず内容は、EFってところかな？」

悠「どういう？」

「完全に“もしも”だな」

悠「もしも？　たとえばぐってことか？」

「その通り」

「「では、本編にGO!」」

授業中。黒板の代わりとなっているモニターが、それまで表示していた授業内容を全て消失させ、赤文字が表示された

『緊急事態発生』

それだけ。だが、それと同時に放送が入る

『生徒の皆さんに緊急連絡です。表示されたとおり緊急事態が発生、教室から出ないようにしてください。職員の皆さんは、至急職員室へ。繰り返します——』

ここで今まで啞然としていたクラスが再起動した。

専用機持ちを除き、各々が

「えっ？」

「ウソッ」

「な、なにが？」

などと口からもらす。それは広がり、クラスが喧騒に包まれる

「ええい、騒ぐな！ 言われたとおりにしろ！ 私達が行っても騒ぐなよ。山田先生」

「は、はい！」

クラスを治めた千冬さんが、山田先生を連れて教室を出て行く。
行き先は職員室

千冬さんが出て行った後もクラスに喧騒は戻ってこない。ところどころで話し声は聞こえるが、うるさくは無い

そして俺の顔だが、恐らくかなり険しいものになっていると思う

「悠、何があつたか分かる？」

隣の席のシャルから話しかけられる。すぐにいつものメンバーであるこのクラスの専用機持ち（一夏等）が、俺の周りに集まってきた。シャルと同じことを聞きたいらしい

「ああ、分かってるさ…これを見る」

空中にモニターを投影する。それはレーダーで、ここ——ISS学園——を中心に表示されていてこの南…海上に大きい赤い点がある。もつとも小さな赤い点が集まって大きな点になっているのだが「見れば分かると思うが、赤いのは敵だ。総数にして…一〇〇〇は下らない」

「なつ、そんなことありえるのかよ!？」

「だ、大丈夫なのか!？」

声を上げたのは一夏と篤。代表候補生のメンバーは落ち着いて状況を把握しようと勤めている…もつとも、こちらもかなり焦っているようだ

「一夏、クラス代表対抗戦…あのときの無人機は憶えているな？」

「あ、ああ、憶えてる」

「恐らくこれはあれの下位互換…あれを三世代とすると一世代クラスだ。だがここまで数を揃えられるとな…」

「どうするんだ？」

「あちらに攻撃の意思があるなら迎撃するしかない。教師陣もどうなっているのか、じゃなくどうやって対抗するか話してるんだろ」

「それは、わたくしたち専用機持ちが対応させられるかも知れない……ということですね」

セシリアが話に入ってきた

「自分の意思でだな。無理やり引っ張り出しはしないと思う……さて、俺は行きますか」

「行ってくてどこにだ？」

そんなもの決まっているだろう。シャルの方を向くと肯首して答えてくれた

「外だよ外。ああ、お前らは勝手に飛び出すと織斑先生から指導されるから。いくぞシャル」

「わかった」

窓を開けて窓枠に足をかけ、飛び出す

落下途中でブラックミィティアを展開させて空に上がる。シャルもしっかりついてきてくれたようだ

『黒主！ 何をしている！』

千冬さんからの通信。こちらからも回線を開く

「何って、防衛行動ですよ。ライセンス権限を発動させてもらいます」

『無駄にあちらを刺激するな。どうにかして…』

「それは無理ですよ。あつちは自爆覚悟の特攻部隊のようですから」

外に出てきて敵ISをみると足が無く、代わりにブースターのよ
うなものがあって腕は長い。胸部には紫色をした円形クリスタルが
あり、オレンジ色の粒子を放出している。足が無い時点で分かると
は思うが無人機。それと擬似GNコアドライブ「T」の特徴として
人が乗る場合は通常のISコアが必要だが、それ以外の場合は単体
で使用可能…つまり無人機なら擬似GNコアドライブ「T」だけで
動力源とすることが出来る。

ちなみに青い粒子を出す擬似GNコアドライブは、俺達のオリジ
ナル同様にそれだけでコアとして使用できるが…まあ、これは蛇足
だな

「武装は胸部にバルカンが二基だけ。一体一体は弱いと思うけどこ
の数は…それにさっき悠が言ってた通り特攻してくると思う」

「特攻か…昔の日本軍上層部もえらいこと考え付いたもんだ」

特攻——一発の攻撃の代償は一人と機体一機。非効率的…ど
ころではないが、ミサイルなど無かった時代では高い攻撃力を有し

ていた方法…人の命は武器じゃない

「まあ、コレは人を乗せてないだけまともだけだな」

「それでどうするの？　いつあっちが動いてくるのかもわからない——」

「早速動き始めたな——ッ！　トランザムだと！？」

「ど、どうしてっ！？」

突如一〇〇〇機ほど存在する敵I.S.が赤みを帯びる。それによってもたらされたのは残像を残すほどの機動性。これを実現できる方法は今のところは一つ『トランザム』GNコアドライブを持つ機体ならば、システムさえあれば発動が出来る代物。シャルのワンオフ・アビリティを解析して構築したものだから、そのオリジナルであるシャルのトランザムの性能上昇には俺でも追いつくことは出来ない。…もつとも、ツインドライブシステムのおかげでそれは克服できているが

「面倒なことになってきたな。織斑先生に連絡入れてくれ。『迎撃を』ってな」

「了解」

シャルが連絡を入れている間にも赤い帯のようになった機体群が、刻一刻と近づいてくる

「わかりました。了解です——悠、言われたとおりにしたよ」

「サンキュー。もう来たみたいだな」

校舎の方を見ると、見覚えのある機体と無い機体：見覚えのある機体が多い

見覚えのあるというのはいつも通りの一夏などの専用機持ちメンバー。白を筆頭に赤や青、黒の機体が見える。訓練機も出てきていることから教師陣も出撃していると予想がつく。無いのは知らない専用機ということだ。他の学年にも専用機持ちは居るからな

俺はそのメンバーに指示を出した

「開戦まで1分無い。迎撃はそつちに任せる」
エンゲージ

「……了解！」「……」

覚悟の意思が汲み取れる声が返ってきたので安心だ。改めて赤い大群の方に眼を向ける

「さて、こっちも覚悟を決めようか」

「…うん」

「心配すんなよ。死んでもお前だけは守るさ……時間だ」

動き出した俺の後ろからシャルの声がかかった

「死なないでよ」

…この際シャルを守るためなら死んでも良いとは思っていたが、考えを改めなきゃいけなくなった。戻ってこないとな…ここに

返事代わりに右手を上げてから、俺はスラスタ―全開で敵に突っ込んで――

目が覚めた

「……夢……か。本当に笑えない夢だぞこりゃ」

ふと気づくといつもの、なんら変わらない自室だった

「というか、夢の中の俺はどうして突っ込んだんだ？ あれなら殲滅用の武装で一掃すればすぐに終わるのに……」

それには「まあ、夢だから」という理由をつけて考えを止めた。
考えるだけ無駄だ

そうして彼——黒主悠——は日常^{いじょう}に帰っていく。すぐに非日常が襲ってくることを知らずに……

〈自由〉【IS（黒流）】『漆黒の流星〜IF〜』（後書き）

夢落ちをIFと言って良いのか…良いんです。異論は認めます

自信が全くありません。

天道松さん、お誘いありがとうございましたm（ ）（ ）m

『漆黒の流星』本編の方もよろしく願います（宣伝）

〈春〉【天道】『春に咲く恋の桜』（前書き）

時間をかけてようやく書けました。

私のIS小説のホワイトデー小説の続きを想定して書きました。

では、どうぞ！

『春』 『天道』 『春に咲く恋の桜』

春。

始まりと変わり目の季節で、暖かく心地よい日々が流れる。

そして、春の代名詞である桜が満開のこの時期に、遊星と一夏達は楯無に呼ばれ、大きな桜の木の下でお花見をする事になった。

お花見のメンバーはチーム5D・S、一夏と五人娘、そして楯無の計13人の大人数である。

お弁当は遊星、アキ、一夏、箒、シャルロット、楯無が用意した（料理が苦手な人には有無を言わずに別の準備をさせた）。

楯無はジュースが入ったコップを持ち上げ、主催者としてみんなに一言を伝える。

「今日はこの綺麗に咲いた桜に感謝しつつ、程よい無礼講でお花見を楽しみましょう。それでは、乾杯！」

『乾杯！！！！』

全員はジュースを一気に飲み、さっそく料理に手をつける。

「さあ、一夏さん、どうぞ」

「一夏、食べなさい」

「一夏、はい」

「一夏、ほら、食え」

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラが我先にと料理を皿に載せて一夏に出す。

「お、落ち着けて、突然料理を渡されても困るって」

一夏はセシリア達を静めるために説得を始める。

「全く、相変わらずのハーレム野郎だな」

「あれはもう神が与えた天性の才能としか思えんな」

クロウとジャックは呆れながら料理を口にする。

すると、楯無がキランと目が光り、クロウを見る。

「ほう、君がそれを言うかな？ クロウ君」

「はい？ 何のこっちゃ？」

「最近……うちの本音ちゃんといい雰囲気らしいじゃない。幼なじみとして、生徒会長として、お姉さんはそこんところの詳しい話を聞きたいな？」

「ギクッ！？ あ、ははは！ 本音とはそんな関係じゃないぞ！」

「ジャック君、クロウ君の尋問を開始しなさい。後で報告書を書い

てくれたら高額の給料を出すわよ？」

「了解だ！ さあ、リア充クロウめ、覚悟しろ！ 本気になった俺から逃げられると思うな！！」

「楯無、後で覚えてろよおおおおおっ！！」

「はっはっは！ 報告書を期待して待っているわ！」

楯無は扇子で仰ぎながら移動すると、気になるものを見つける。

「……………」

箒はムスツとしながら、料理を黙々と食べている。

「箒ちゃん、どうかしたの？」

「……………何でもありません」

「そう言えば、一夏君に告白したらしいわね」

「まだ、返事はもらってませんけど……………」

楯無は指を顎に添え、空を見上げながら考える。

（ここは一つ、お姉さんが手を貸してあげますかな）

「まあまあ、箒ちゃん。これを飲んで元気を出してね」

楯無はコップに飲み物を注ぎ、箒に渡す。

「ほら、箒ちゃん。一気にグイッと！」

「は、はぁ……」

箒は言われるがままにコップの飲み物を一気に飲み干す。

「んっ!？」

飲み物の中身に異変を感じた箒は顔を歪ませる。

「楯無さん、これ、は……ふにゃ……?」

突然、箒の意識が大きく揺らいだ。

（ふっふっふ。これは楽しみね♪）

楯無は扇子で口元に浮かんだ悪の笑みを隠す。

楯無がちよつとした悪戯計画を実行しているの知らない遊星は、アキと龍亞と龍可と一緒に親子のように花見を楽しんでいる。

「うんまーい！ 遊星達が作った料理、スゴく美味しいよ！」

「龍亞、あんまり急いで食べるとのどに詰まるわよ」

龍亞と龍可はいつもと同じやり取りをする。

アキは自身の赤い髪を掻き分け、見事な桜を見上げる。

「綺麗ね、桜……こうやって楽しんで見るのは初めてかも」

遊星はそれに同意するように小さく頷く。

「ああ。思えば、こうやってのんびりと桜を見る事なんて本当に無かったからな」

「私達はいつも数奇な運命の中、戦ってきたから……」

アキは一瞬暗い顔をすると、遊星はアキを自分の肩へと抱き寄せる。

「遊星？」

「だが、その数奇な運命で俺達は出会えることができた。掛け替えない仲間達と、大切な人を……」

遊星らしい言葉に、アキはゆっくり眼を閉じた。

「そうね……確かに嫌な事だけじゃないわね」

「……アキ、一ついいか？」

「何？」

「アキは今、幸せか？」

遊星は今まで聞けなかった事をアキに尋ねる。

果たして自分はアキを幸せにしてやっているのか？

時折、遊星の脳裏にはそれが過ぎり、心が不安に締め付けられることがある。

不安な表情をする遊星に、アキはクスツと笑い、頬に優しいキスを落とす。

「アキ……？」

アキは優しい笑みを浮かべ、遊星の肩に自分の頭を置く。

「全く、何を言い出すのかと思えば……そんなの、当たり前じゃない。私はとても幸せよ。ここにいる大切な仲間達。そして……遊星、あなたが私の側にいてくれるから……」

「そうか……」

遊星は不安が晴れ、一息を吐く。

「そう言う遊星も幸せ？」

「ああ、アキと同じ答えだ。みんなが、アキが俺の側に居てくれるからな……」

「よかった……」

遊星とアキは互いの指を絡ませて手を繋ぎ、桜を見る。

ジーンッ……。

「日が経つに連れて、遊星とアキ姉ちゃんのラブラブ度が上がっているね」

「そうだね。見ている……こっちも恥ずかしいわね」

二人の話と行動を龍亞と龍可がじっくり見ているのを遊星とアキは驚く。

「「る、龍亞！？ 龍可！？」」

「二人共々、イチャイチャするのは勝手だけど、少しは周りを見なきゃダメだよ？」

「少しは私達に構って欲しいな……」

「「ゴメンナサイ……」」

遊星とアキは謝ると、龍可は何かを思いつく。

「ねえ、アキさん。膝の上に座ってもいい？」

「膝？」

「ちょっとした憧れだったの。私の両親はあまり家にいないから……」

「龍可……良いわよ、来て」

アキは龍可を手招きすると、龍亞が手を元気よく挙げる。

「あ、じゃあ俺も俺も！ 遊星の膝に座らせて！」

「ああ、良いぞ」

龍亞は遊星の膝に、龍可はアキの膝に座る。

龍亞と龍可はご満悦な表情を浮かべると、遊星とアキはそのまま後ろから二人を抱きしめる。

そして、アキはそっと呟く。

「幸せ……みんなと会えて、本当に良かった……」

アキの言葉に遊星、龍亞、龍可は笑みを浮かべ、今流れるこの時を心に深く刻んだ。

「あの〜遊星君。お取り込み中のところ悪いけど、ちょっぴりヤバい状況なのよね〜……」

楯無が苦笑いを浮かべながら遊星に話しかける。

「……楯無、今だけお前を怨んでいいか？」

せつかくの雰囲気をぶち壊された遊星が珍しく他人を怨む表情をすると、楯無は土下座して謝る。

「ごめんなさい……後で何でもお詫びをするから……」

「……それで、何があつたんだ？」

「あれを見て……」

遊星はそれを見た瞬間、アキ達と尋問中のジャック達を連れてこの場から離れる。

（あれは太刀打ち出来ない……一夏、申し訳ないが今だけお前を見捨てることにする。頑張れ）

遊星達は何故か逃げるように離れるのを見た一夏達は首を傾げた。

「一夏~~~~」

「「「「え???」」」」

聞き慣れた声で甘ったるい声音に一夏達は恐る恐る振り向いた。

一夏達は振り向いた事をとて後悔した。

そこには、顔が火照っていて、服をかなり着くずした、いつもの凛々しい姿とはかなりかけ離れた篠ノ之箒がいた。

「ほ、箒……か？」

一夏は目の前にいるのが自分の知っている幼なじみの箒かどうか本気で疑ってしまう。

「そうだよ」 一夏の事が大好きな篠ノ之箒ちゃんだよ」

（（（（キャラクターがかなり変わっていますけど!））））

全員落雷が落ちたような衝撃を受ける。

「ねえ、一夏あ」

箒は一夏の膝の上に座り、首に手を回す。

「ちょっ、箒さん!？」

「ず、ズルいわよ!」

「ダメダメ! 僕と代わってよ!」

「私の嫁に手を出すな!」

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラが文句の嵐を言つと、箒の表情が研ぎ澄まされた刃のように鋭くなる。

「黙れ」

箒の右手に空裂が現れ、セシリア達は凍り付くように固まる。

「「「はい!？」」「」」

「失せろ」

空裂の刃が一閃し、エネルギーと化した斬撃がセシリア達を問答無用で吹き飛ばす。

「「「きゃあああああああつ!」「」」」

「ほ、箒!？ 一体何が……」

一夏の目線の先には、楯無が何度も謝る姿があった。

手には、ジュースとは別の飲み物の缶があった。

それは、二十歳を越えた遊星達が飲むはずだった飲み物、つまり――
―お酒である。

（もしかしくなくても、箒さんは酔っぱらっていらっしやる!?!）

「一夏あゝ」

箒の吐く息から甘いお酒の匂いが広がり、確信する。

しかも、表情と症状を見るからに相当酔っぱらっている様子。

（箒ってアルコールに弱かったのか!?! ってか、楯無さん!!
あんた一体何をしてくれるんですかあああああああああ
あつ!?!?! マジでこれ、どうするの!?!）

孤立無援状態で、酔っ払いの箒に抱きつかれて逃げることができない。

箒は顔を一夏に近づけて話しかける。

「一夏、私の事……好きか?」

「えっ……?」

突然いつものような口調で話し、更には好きかどうかを聞いてくるので、一夏はかなり混乱する。

「まだ……お前からちゃんとした答えを貰っていない。今すぐ答えが欲しい……」

「箒……っ!？」

一夏は箒を見て言葉を失う。

何故なら、箒の瞳から涙がこぼれ落ちているからだ。

「お前が、本当に私のことを何とも思っていないなら……好きでもないなら、それでもいい。他の者に任せて、私は武士として潔くお前から離れる。だから、頼む。聞かせてくれ……一夏。お前の本当の気持ちを」

箒の覚悟を決めた切なる願いに、一夏は唾を呑み込む。

涙で潤んだ瞳で上目遣いに自分を見つめる箒。

一夏は今まで生きてきた記憶から、箒と過ごしたたくさんの思い出が鮮明に蘇る。

突然、一夏は目の前にいる少女をとて愛おしく思い始め、想いが沸き上がる。

「箒!!」

「え? きゃっ!？」

一夏は箒を優しく抱きしめ、箒の耳に囁いた。

「今、気づいた……俺は……箒の事が好きだ」

「一、夏……」

「だから、俺の恋人になってくれますか？」

箒はコクコクと頷いて笑みを浮かべる。

「はい……！」

二人はそのまま互いの顔を両手で添え、唇にキスをする。

ブワッ……ゾクッ！？

一夏は背後に四つの殺意を気づき、振り向いた瞬間、幸せから一気に不幸へと落とされた。

「一夏さん、箒さん。覚悟は出来ていますか？」

「よし、殺そう」

「一夏……ふふふっ……」

「そうか、これが浮気なのか……」

箒の斬撃から生還した四人がISを起動させて一夏と箒を狙う。

箒は一夏から離れると、紅椿を起動させ、雨月と空裂を構える。

「一夏、お前は私が命を懸けても護る！ だから……」

「箒？」

「一夏は私を護ってくれ！ そうすれば、必ず乗り切れる！」

「箒……ああ、わかった！」

一夏も白式を起動させて雪片式型を構える。

退避していた遊星達も非常にマズいと思い、ジャックは楯無を睨みつける。

「楯無！ 貴様が元凶なら責任を取ってアイツ等を止めてこい！！」

「IS学園生徒会長として責任を持って、行ってきます！！」

楯無は霧纏の淑女を起動させて暴走するセシリア達を止めるために介入する。

「……ジャック、俺達も行くか」

「何！？ 遊星、俺もか！？」

「早く花見を再開させるためだ。俺はシャルロットとラウラを止める。セシリアと鈴音はジャックが止めてくれ」

「ええい、仕方ない！ なら、とつと始めるぞ、遊星！」

「ああ！」

遊星とジャックも星竜と紅蓮王を起動させる。

「飛翔せよ！『スターダスト・ドラゴン』！！」

《全く、コイツ等といると飽きないな……》

「我が魂！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

《むしろ騒がしすぎるだろ！》

遊星とジャック、そしてスターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンも事態を収拾するために向かった。

その後、セシリア達の暴走を何とか止め、恋人同士となった一夏と箒は初々しい感じで接し、セシリア達は嫉妬心を膨らませた。

そして、次の日以降、一夏と箒を襲撃して、IS学園を舞台に殺伐とした一夏の争奪戦が始まるのだった……。

.

《春》【ぐぎゅる】『I S 新劇場版 外伝・二年目の春』(前書き)

今の話から少し経ったお話です

よろしくお願いします

《春》【ぐぎゅる】『I S 新劇場版 外伝・二年目の春』

I S 学園の中庭にある大きな桜の木

その木の幹の根元辺りにブルーシートを敷く影が二人

「アスカ、もうちょっときっちり敷こうよ」

「ええ、いいじゃないのよ、こんなもので」

軽く言い争いながらシートを敷いてるのは、式波・アスカ・ラング
レーとシャルロット・デュノア

シャルロットはフランス代表候補生の少女で口癖は僕

アスカはシンジと同じエヴァのパイロットでシンジと同様こちらの
世界に来た少女

「ダメ。絶対碇君に言われちゃうよ？」

「ふん、バカシンジに言われたってかまやしないわ」

と言いながらもシートをきっちり敷くアスカ
シャルロットはそんなアスカを可愛いなあ・・・なんて思いながら
作業している

「シャルロット、準備のほどはどうだ？」

「あ、ラウラにセシリア」

買い物袋を両手に提げた少女が二人。ラウラ・ボーデヴィツヒとセシリア・オルコット

ラウラはドイツ代表候補生で軍人さん

セシリアはイギリス代表候補生でお嬢様

「必要なものは買ってきましたわよ」

ラウラとセシリアが両手に持っていた袋をシートの上に置く。それは大量の飲み物とお菓子類

「だが、シンジが食事を作って持ってくるはずだ。これらはひつょうなのか？」

「うん、食事って言うってもそんなに大量に持ってくるわけじゃないから」

「そうか」

ラウラは納得したように頷く

「こっちは終わったわ、バカシンジがくるまで待つてましょ」

アスカはワン。ース。ンらしきゲーム機を取り出して遊び始めるとそこに青髪の少女とサングラスを掛けた髭面の中年の男がやってきた

「・・・こんにちは」

「あら、レイさん、・・・とそちらの方は？」

少女は、綾波レイ。アスカと同じでエヴァのパイロットだった少女。そしてもう一人は碇ゲンドウ。シンジの父親

「碇君のお父さん・・・」

「ほう、我が嫁の父親か」

ラウラはシンジに惚れており『嫁』と呼んでいる

「・・・碇君は嫁じゃない」

レイは少しふくれっ面で抗議する

「だいたい・・・嫁って何よ嫁って。婿じゃないの？」

アスカまで文句を言う始末

「む・・・知り合いに聞いたのだ、なかなかあれで日本に精通して
いてな・・・」

「・・・シンジはまだか？」

我慢できずにゲンドウが口を開いた

「あ、碇君ならもう暫くしたらくると思いますよ」

「そうか・・・それまで待たせてもらおうか」

靴を脱ぎシートの上に腰掛ける

「邪魔するぞ、諸君」

「こんにちは、みなさん」

織斑千冬と山田真耶の教師コンビの登場である

織斑千冬は元IS操縦者で昔は『ブリュンヒルデ』の称号を持っていた

山田真耶はもと代表候補生であり、普段はおつちょこちよいだがいざと言うときはしっかりものである

「おや、そちらの御仁は・・・」

「シンジの父親です・・・特別に入れてもらったのだが・・・良かったのだろうか？」

「本来はダメなんですが・・・今回はかまいませんか？織斑先生」

「かまわんだろう、花見の間だけになるがな」

千冬は軽く笑みを浮かべて頷く

「すまない・・・遅くなってしまった」

「しょうがないわよ、多めに作ったんだし」

「全くだ、俺は何もしてねーけど」

「一夏さんに鈴さんに箒さん、早くいらっしやいな」

織斑一夏と鳳鈴音と篠ノ之箒が一つずつ重箱を持ってやってきた

織斑一夏は「世界で二人だけのISを動かせる男子」と呼ばれているごく普通の男子……のはず

ファン・リンイン
鳳鈴音は中国の代表候補生でツインテールがよく似合う少女

篠ノ之箒は唯一どこにも所属してないIS『赤椿』の操縦者で凜とした雰囲気の特徴の少女

「む……嫁はどうした？」

「少ししたらくる、先に初めてていいって言ってたぞ」

「うむ、それでは花見を始めようか」

レイとシャルロットがみんなに飲み物を行き渡らせる。生徒組はジュースとお茶。大人組はお酒だ

「行き渡ったな……では、乾杯！」

「……かんぱーい！」

そんなこんなで始まったシンジ抜きの花見

「一夏さん、はい、あーんしてくださいまし」

「ひ、ひとりで食べるって、セシリア」

「そんな遠慮なさらずに」

「「一夏」」

「な、なんだ？シャル、箒」

「「はい、あーん」」

二人の顔は笑っていたが額には怒りマークがあつた

「ちょっと、わたくしが先に食べさせるのですからお二人は引っ込んでくださいまし」

「ふん、関係ない、早い者勝ちだ」

「そういうこと……だから一夏」

「「「はい、あーん！！！」」」

やけに気合の入った「はい、あーん」に一夏は項垂れながら苦笑いしていた

「ガキどもは騒がしいな」

「まあまあ・・・元気なのはいい証拠ですよ」

「うむ・・・たまにこうして酒を飲むのもいいものだ」

「ところで・・・碇さんはお仕事は？」

「・・・今は何も。元の世界では特務機関の司令をやっていたが・・・」

「ふ・・・ここでは何の約にも立たないですからな」

「うむ・・・」

「さあさあ・・・暗い話はなしにしてぱーッといきましょう!」

「遅くなっちゃったな・・・」

シンジは重箱を持って一人駆けていた。と、大きな桜の下で騒ぐ一団を見つけては足早に急ぐ

「バカシンジ!遅いわよ!全く」

「ゴメン、アスカ」

「さ、嫁も座って飲むがいい」

ラウラにジュースの入った紙コップを手渡される

「ありがとう、ラウラ」

「気にするな」

「ユイ」

「・・・司令・・・大丈夫ですか？」

レイがゲンドウの頭を撫でる。どうやらゲンドウは泣き上戸であった

「意外でしたね、織斑先生」

「うむ。なかなか楽しい人物だな碓の父親は」

「シンジ」

「何？ラウラ」

「おにぎりを食べさせてくれ」

珍しいラウラの頼みごと。若干頬が赤く染まっている

「ん・・・はい、あーん」

「あむ・・・むぐむぐ・・・む、これは、シャケだな」

「美味しい？」

「う、うむ・・・うまいぞ」

頬を染めて頷くラウラ

「ちょっと！バカシンジ！何してんのよ！」

「ア、アスカ！？ラウラが食べさせて欲しいって言っから」

「ったく……あたしにも食べさせなさい！」

「二番目の人……ずるい……碇君……私も」

「あ、綾波まで……」

こんな感じで夜が更けてもドンチャン騒ぎは続き……朝まで続いた

誰もいなくなった木の下でごみを片付けるシンジ。とそこにラウラがやってきた

「む、手伝おう」

「ありがとう、ラウラ」

シンジはラウラと分担しごみを片付けた

「一段落したね」

「うむ、綺麗になったな」

さっきまでの汚さはなくごみ一つなく綺麗になっていた

「・・・・・・・・シンジ」

「ん？」

「これからも・・・よろしく頼むぞ？」

「うん。守るって約束しちゃったしね」

「ふふ、頼もしい限りだ」

短い時間だったが、ラウラにとってこの時間は自分だけが知る至福の時間となった

《春》「るーしー」『とある専用機持ちの入学模擬戦』（前書き）

私が妄想したシーンや設定におけるものに、プロローグがあったらこんな感じになるだろうという物です。所詮妄想ですので、脳内プロットすらないです。まさに竜頭蛇尾。

《春》「るーしー」』とある専用機持ちの入学模擬戦』

IS学園の入学試験における最終選考に合格したものだけが受けることの出来る、同試験における最後の山場、IS実機を用いた模擬戦。

同学園内に存在するアリーナと比較すれば、猫の額程度の広さしかない屋内訓練場に2つの人影があった。

その一方は既にISを纏った試験官。彼女が装着している物は、デユノア社製第二世代の傑作、ラファール・リヴァイヴ。カーキグリーンのボディと安定した性能、豊富な後付武装が特徴の名機だ。

もう一方は、受験番号G135705の受験生である。ただ、未だISを装着していない。

この場に置いてIS未装着は奇妙な事態である。通常、受験生は学園保有の訓練機を――何枚もの書類にサインした上で――貸し出され、既に装着させて貰った状態で、この模擬戦に臨むからだ。と云うことは、この人物はただの受験生ではない。

「……………展開」

その一言は劇的な結果を生み出した。

翼の生えた西洋剣の形をしたペンダントが光を発し、パツシヴ・イナーシャル・キャンセラーが発動、宙に浮いた身体に、ISが纏われていく。先端部を赤く縁取りされた白い脚部が下腿を覆い尽くし、小型のスラスターが配置されたテトラポット状の腰部ユニットが形成された。続いて胸部を覆った装甲からは、V字状のクラブカルアンテナが尖塔の様に伸びている。三つの爪で固定・保護された円錐状のパーツが背中に搭載され、蒼をあしらった肩部装甲と胴体部の装甲に一体化し完全に固定された。装着された白い腕部は手部分を

含む間接部が暗灰色で、前腕中央にコネクタが設けられていた。そう、この受験生は専用機持ち。わざわざ訓練機を借りる必要が無かったのである。

展開が終了し訓練場の床に降り立ったISは、一言で言うならば、機械的なフルプレート。シールドバリアーと絶対防御で守られたISは、通常は腹部などの胴体がほぼ剥き出しだが、このISは胸部を堅牢に保護され、腹部や大腿部も動きの邪魔にならない範囲で赤い装甲で守っている重装甲だ。

「GNDライブ、リポーズ解除。プライオリティ変更、アイハヴコントロール」

コマンドが入力されると、背中の円錐状のパーツからエメラルドグリーン粒子が放出され、全身に淡い光を帯びながら、静かに浮遊する。それを見た相対する試験官も、機体を浮かせ最終確認を取る。

「準備はいいですか？」

「いつでも……」

極力露出を減らす設計思想なのか、白いフルフェイスヘルメットで頭部が保護され、パイロットの表情は窺い知れない。緊張や自信或いは初めてISを操る高揚と云った感情と相対することに、ある種の楽しさを覚える山田真耶としては、この相手はやや不気味に映る。

「行きます！」

そんな負の感情を追い払うように、真耶はラファール・リヴァイヴを突撃させた。

同様に重装のISも加速、量子変換で近接格闘装備を右手に高速展開する際、パイロットの闘志に呼応するように、クラビカルアンテナ間の胸元にあるクリスタル素材のパーツが光を放ち、アルファベットの文字列が浮かび上がる。

『GUNDAM』

それが、このISの名前だった。

《春》「るーしー」『とある専用機持ちの入学模擬戦』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

ここで一寸した設定をば、書かせて頂きます。登場したIS「ガンダム」ですが、所謂全身装甲フルスキンではないです。胸部にガンダムフェイスのアイカメラより上部分がある感じで、鎖骨の下辺りに半透明の文字が浮かぶアレがあります。頭はガンダムヘッドではなく、アンテナのついた普通のヘルメットです。

本文中では、あえてパイロットの容姿等を描写せず、またガンダムの機体名も明かしていません。私の中ではパイロットもガンダムも決まっていますが、読者様の想像力とインスピレーションの刺激になれば幸いと考えて、この様な形になりました。

私の中の自惚れ屋は、ガンダム00のクロスでは、多くの設定においてこれをプロローグに出来る汎用性があると自負しています。そう言う訳で、ここから無限の物語が紡がれる可能性を夢見たネタ提供の側面もあつたりします。拙作ではありますがこれを参考にしたと思う奇特な方がいらっしゃればご自由にどうぞ。そして、もしそんな作品が執筆されるなら、一読者として是非に読んでみたいので、ご一報頂ければ幸いです。

また今後「私がこれをそのまま、或いは一部改訂の上で用いる可能性はある」ので、念のため本来のIDを本文中で受験番号として使っています。

〈春〉【虚空】『2年目の春を前に〈新しき始まり〉』（前書き）

こんにちは、IS インフィニット・ストラトス 輝きの翼の『虚空』です。

今企画参加にあたり、自身のIS作品の未来軸にあたる作品としました。

作品テーマ

私は〈春〉のテーマを考えた際、『新しい始まり』をイメージさせてもらい、製作させていただきました。
どうぞお楽しみを

クリエイター 虚空より

《春》【虚空】『2年目の春を前に《新しき始まり》』

3月中旬

IS学園

第二アリーナ

Side 翔

トーナメントの最終日であり、最終戦であるこの日。

自身のISを纏った俺は、カタパルトから飛び出した。

歓声に沸き立つアリーナ。

そのほとんどが女子であるが、外来やVIP用の席にはスカウト目的であるう企業の人間らしき人物の姿も見受けられる。

ここまでは、いつものトーナメント戦のような入り方だが、その中で一際、俺達を見つめてくる一団がある。

その一団をよく見ると殆どが女子ではあるが、IS学園の制服ではない別の制服であったり、中には私服姿でいる。

それぞれの眼差しには不安や尊敬、憧れのようなものが入り交じっている。

（かなり来てんな

今回の相手である白式・雪羅を纏った一夏がカタパルトから射出され、俺の傍らに並び立つとその一団を見てプライベート・チャンネル

ルを流してきた。

俺は、それに応じるため自分もプライベート・チャンネルを開いた。

（ああ、一番忙しい時期でのこれは厳しいが……いいプランでもある

（まあそうだけどさ。楯無さんが立てたプランに千冬姉が乗ってくれたのは大きかったよな？

（そうだな

今回の１年生最後の行事、学年別トーナメント。

昨年の６月と７月に途中中止してしまった学年別トーナメントを煽りで注目が高いこのトーナメントは１年生の１年間の成長具合を見る事が主な目的である。

だが、今回はそれだけでなく生徒会長 更識楯無の提案で新年度から入学してくる新１年生を招待しており、間近でＩＳバトルを観てもらふ事となっている。

その理由は………

（千冬先生もそうだが……この１年色々とあり過ぎて学園側の信用が危ういだろ？

（そうだな……俺や翔がＩＳが使える事から始まって、みんなが『怪物』達に捕食され掛けたり、翔が『魔法使い』だったり、別世界に行つたしな

（こちらとしてもＩＳ技術の『拡散』が異様だった事には驚いた。それに一夏、お前が書の『主』となった事がこちらの最大の驚きだ

（ま、まあな．．．．同時に俺も自身の秘密を知っちまったからな．．．．今でも驚いているよ。あつ、驚いたと言えば．．．．シヤルが『実家』に攫われて結婚させられそうになった時の翔の怖さは驚いたな

翔達が当事者となった数々の事件により、各国の動向、さらには一般家庭より入学してくる女子生徒の親の不安感が露骨なものとなつてしまい、IS学園は多少なりとも辛い立場に立たされてしまったのである。

その状況打破を含め、楯無は、入学してくる新1年生とその一部の『友達』に対して今トーナメント戦の観戦を承認する事を提案した。透明さを見せるための処置でもあるが．．．．最終日にはとあるイベントが用意されていた。

（．．．．．忘れる

（忘れられないな、あの後．．．．

余計な話に話が転化しかねなかったため、ある条件の下に密約を交わしている『伏兵達』に話を振った。

（．．．『マテリアル』ズ、一夏と箒はその後、どうなったんだ？
（なッ！？

《マスターと篠ノ乃さんですか？

《ああ、一夏とね！

《ふん、下僕にしては……

（オイ！お前ら何バラそうとしてる！

《何故です？事実関係を明かすのはいけないのですか？

（あつ、いやそういう意味じゃ……

（そろそろ始まる……引き締める

Side Out

Side 一夏

翔の一声で俺は、白式の『中にいる3人の少女達』に呼び掛けた。

《話は、あとにする。……今回は悪いけど手を貸さないでくれよ？

《了解。……マスター、頑張ってください

《うん、わかったよ！やつちやえ！！

《……ここまで来て負けたら承知せぬがな

3人の少女達の激励のようなものを受けた俺は、苦笑しながらも相手を
手を見る。

その相手とは……

「まさかこんな形で千冬姉と戦うなんてな」

「ああ、そうだな。……客よせパンダにされた気分だがな」

俺がつぶやく先には……第1回モンド・グロツソ優勝者であり、『ブリュンヒルデ』の異名を持つ……学園最凶の教師であり、俺の姉『織村千冬』がどこから持ってきたのか現役時代のIS『暮

桜』を引つ提げ、この場にいた。

「まあまあ、織村先生。いいじゃありませんか、皆さんも喜んでますし」

千冬姉の相方、山田先生が相性がいいイスラファール・リヴァイヴを纏って、抑えようとする。

ただ通常のリヴァイヴとは違い、背中のスラスターが追加されたり、両腰にもフィンアーマーのようなものが追加されている。

どうやら本気モードのカスタム仕様らしい。

「ふん。……叩きのめせる相手がいる分まだましか」

そう呟く千冬姉の眼は、完全に相手を狩る眼をしている。

その眼に俺は、生唾を飲み込んだ。

……この最終戦でもあるイベント………今尚最強の名を持つ織村千冬とその弟であり、世界初の男でISを使える男……俺、織村一夏と戦う事だ。

このプランが持ち上がった時、俺は一瞬、恐怖を抱いてしまった。

何故なら千冬姉の強さは、家族である自分がよく知っている事であり……そして何より……千冬姉に守られていた意味を改めて知ったからだ。

そんな恐怖を看破してくれたのは、翔や篤達が『存在する意義』に迷っていた自分に対して……『光』を示した事が強い。

その『光』を俺は……この戦いで千冬姉に示したい……俺が俺である事を得られた事を……守っていてくれていた千冬姉に家族として……

翔と山田先生は、ルール上の数合わせかもしれないが付き合ってもらった。

翔は、俺が何したいのかわかっているらしく……タッグを組む際、こんな言葉を超越してすぐに了承してくれた。

何かを得たなら……伝えてやれ、それが出来るのが『人』だ

何かを得たなら……か、確かにそうかもしれない。

この一年近くで俺は、出会い、学び、失い、そしてたくさんものを『得た』……だから

俺は、雪片式型だけ展開すると構えた。

千冬姉もそれに応じるかのように白式の雪片式型の『オリジナル』である『雪片』を展開し、俺と同じように構えた。

歓声に湧き立つ『決闘場』……

同門の流派、そして何より一種の師弟関係である俺と千冬姉……

・その勝負は、すでに始まっていた。

開始のカウントがゼロとなった瞬間、俺と千冬姉は最大加速で飛び出して零落白夜の輝きを発振させながら剣を振るった。

零落白夜と零落白夜の輝きが重なり合う。

重なり合った瞬間、強い反発が生まれ、俺は押し負けそうになるがそこを強引に押さえ込む。

「成長したな一夏」

「千冬姉こそ、相変わらず強えよ」

つばぜり合いのように俺達は一步も退かずに言葉を交わしあつた。

「……どうやらもう私は要らないみたいだな」

「要らなくはねえよ……千冬姉は、俺の家族……それ以下は絶対ねえ」

1度目のつばぜり合いから離れた千冬姉は何かを感じ取ったかのようには言葉を発し、俺はそれに対して言葉を返す。

「言うものだな……大切にしたいと思つた奴は出来たか？」

「ああ、それならたくさん出来たさ」

二度目のぶつかり合い、これにも思いをこめて打ち込む。

得たものすべてを伝えるために。

「たくさんって……なら確認するが、あの娘達の好意にはい

い加減、気付いてるな」

「ああ。てか……3人は振っちゃった……」

思いぶつけられた挙げ句、それで自分がたった1人の『女』を思っていた事にようやく気付かされた。

結果、他の『3人』を振ってしまった。(……その直後は、思い出したくもない地獄を体験してしまった)

「このバカが、お前が早く振っていればアイツらの傷はさぞ小さかったろうに」

「……反省しております」

雪片に力を掛けて弾き返しながら俺は、つぶやきを漏らす。

「反省して済むものか……大事にしてやれよ、選ぴとった小娘を」

「ああわかつてるよ」

俺は、刃を交わしながらちらりと観客席に眼を走らせた。

その中に期待と不安を絡ませた視線でこちらを見る1人を見た。

いつもは強気な表情が今では、不安で曇らせている。

それに気が付いた俺は、一回だけ大丈夫だと言わんばかりに笑ってやる。

受けとめた『あいつ』は表情を赤く染める。

恋をすると人は変わるといふのは、お互いにらしい。

それを見たのか、千冬姉はつぶやきを漏らした。

「ラブラブなのはいいが……今度、私の相手をして貰うからな」

「千冬姉……. どんだけ試練与えようとしてんだよ」

姉の鬼畜さに俺は、ヒヤリとしたものが流れた。

「手塩に掛けすぎた『弟』をやるんだそのくらいやって当たり前だ……. それに『結婚式』はまだかと『アイツ』が煩くて適わん……. だから」

千冬姉が雪片を大きく振るって俺を弾き返す。

「私に勝つまではやらんつもりだ」

あの千冬姉……. いつの時代の『お父さん』ですか…….

千冬姉の発言に冷や汗を通り過ぎた。

流石に『あいつ』が死にかける姿を見たくない、そこで…….

「……. 千冬姉、俺が勝ったらチャラにしてくれねえか？」

「何故だ」

「ええと……. 俺が決めた相手なんだ。なら俺が勝たなきゃ示し

「がつかねえだろ？」

「阿呆らしい……がそれに『のつた』」

いったん離れた千冬姉は、雪片を構え直しながらさらに言葉を重ねる。

「……だが、そうなるなら『手』を抜くつもりはない。……
……さあ、かかってこい」

言葉を重ねた千冬姉の表情は、眼をまるで目の前に獲物を置かれたトラのように輝かせながらさらに恐ろしいものになっている。

ヤバさ100%つか……

（ですが楽しそうですね、『主』

脳裏に新しく響いた言葉に俺は、自然に笑みを浮かべている事に気付いた。

「当たり前だろ」

俺も雪片を構え直しながら言葉を続けた。

なんたつて……

「以外に早く越えられるかもしれないんだ、千冬姉をなら……
全力を出すのが礼儀だろ」

呟きを漏らして再び睨み合う俺と千冬姉……

そして……

「今日こそ勝つてやるぜ、千冬姉!!」

「やってみろ!一夏!!」

激突する俺達、零落白夜の輝きを煌めかせながら螺旋軌道を刻み、上昇していく。

まるで無限の空を示すかのように……

Side Out

Side 翔

「……完全に眼中に在りませんね、俺達……」

「ははは……ちょぴり寂しいですね」

俺と山田先生は、眩きを漏らしながらも一応、一夏達に負けず劣らずに剣撃を交えながら戦っていた。

先生がライフルを放つと俺は、スラスターをバラバラに噴射、明らかにバランスを崩したような機動を取りながらも2本の『流星/雷』を撃ち込む。

だが、山田先生はそれらを銃口の角度を見て、射線を読んで回避していく。

さらには、ライフルを放ちながら突撃を仕掛けてきた。

自分から体勢を崩したままなので通常なら対応しきれない。

が……

俺は、スターダストの両膝部に搭載された『隠し腕』で掴み『流星ノ疾風』を鞘ごと振り回す。

すると鞘先からレーザーを発振させながら円状に回し出す。

光のサークルが目の前に楯のように現れた。

それらにより、ライフルの弾丸を防ぐ。

弾丸を防がながらも突撃をやめない山田先生に対して俺は、体当たりをするかのように光の楯を前面に押し出して突っ込んだ。

この行動に山田先生は、少しだけ驚いた表情をしたがそれだけで、振り下ろされるレーザーの円のタイミングを見計らってぎりぎり回避してこちらにグレネードを投げようとしてくる。

それを俺は、流星ノ雷でグレネードを展開しかけた手を叩き落とした。

「くっ」

一撃を与えないまま俺の下を駆け抜けて、距離を置く山田先生。

「最初に戦った時よりも『キレ』が出てますね」

「当たり前ですよ。1年近くいろんな事がありましたから」

自然と笑みを漏らしながら俺は、得物を放つ。

そんな攻撃も山田先生は回避しながら両手にライフルを呼び出してこちらに攻撃してくる。

「そうですね。あつ、だけど変わったのは櫻井君も同じですよ。表情に感情を載せるようになりましたからね」

「……皆のおかげですよ」

動きながらも俺は、この1年近くを思い出す。

いろんな事があった。

転入してから一夏や箒、シャル、様々な人にあっているんな事を体験して、分かち合い……。そして俺の秘密を受け入れてくれた。

同時に俺は、俺の『意志』で本当に大切に思えるものを見つける事ができた……。もう心で迷う事は無い。

だから……

「クスッ、それはよかったですね」

山田先生が俺の返答に少しだけ笑うとナイフを呼び出し、格闘戦へと戦いが変化させる。

「山田先生ですよ」

「えっ？」

俺が投げた言葉に山田先生のメガネが僅かにずり落ちる。

「……あの人からの『婚約』受けたんでしょ？」

「はうい！！！」

『なにいいい！？』

続いた言葉に山田先生の顔は真っ赤になった。

なんか通信が紛れたのは一先ず置いておこう。

さすがにこのまま相手をするのはしのびなつたので、一端離れた。

「だ、だ、だ、誰に聞いたんですか！？」

「テストチームとあと……うちの父さんからですね。……」

テストチームは阿鼻叫喚、父さん達は嬉しがってましたから」

「は、ははうううう！！！」

情報源を素直に吐くと山田先生は、さらに真っ赤になった。

『や、や、や、山田先生！いいいい！！！』

「いつ、さ、^{さかき}榊原先生！？」

どうやら先ほどのオープン・チャンネルがアリーナの管制室に届いたらしく、本日の主任管制担当の30歳『独身』榊原先生の喚きが通信を占有した。

『なぜ教えてくれなかったんですか！？これで私と織村先生だけ独り身じゃないですか！！！！』

「えっ、あうい・・・」

山田先生が顔を真っ赤にしながら応えようとするがうまく伝わらない。

そこで俺が間に入った。

「・・・意外に山田先生の『お相手』は早かったですよ？」

「はい！？」

「さ、櫻井君。なにを！？」

山田先生が止めに入るが、もう遅い。

既に俺は、口を動かしている。

「会って、1年近く。それでいて『恋人の過程』をほとんどすっ飛ばして『婚約』に行ったんですから」

「櫻井君！！！！！！！！！！」

「・・・・・・・・グハア」

通信先から何かがつぶれたような音が聞こえそうな声が響いた後、崩れ落ちる音がした。

その直後、管制室にいた女子達の黄色い声が榊原先生に代わって通信を占拠してしまう。

「・・・・・・・・ふう」

俺は、煩くなったオープン・チャンネルを閉鎖、別のチャンネル数

を開く。

『……翔、お前』

『櫻井……お前は変わったと思ってたが……やり過ぎだ』

別のチャンネルを開いた瞬間、刃を振るう手をとめないまま話してくる一夏達の通信が流れた。

2人にも一応、教えていたためあんまり驚いていなかった。

「……話の流れでたまたまだ。……それに山田先生もいい加減、『婚約指輪』ぐらい気軽に身に付けさせてやらないと可哀想でしたし」

『だからといって、お前……いろいろとすつとばし過ぎだろ……』

俺の返答に千冬先生が呆れ果てた声を出していた。

ちなみに俺がそう思ったのも、こないだその『お相手』にあった時既に婚約指輪をしていたのに山田先生は、学園の女子から興味を持たれなくなつたのか婚約指輪をしていなかった事からだ。

『ところで山田先生は、どうすんだよ？あんなにしちまつて』
「……すまないと感じている」

一夏からの通信を返しながら見る先には……

「ホエエエエ／＼／／／」

顔だけでなく耳や首まで真っ赤にした山田先生が立ち止まったまま
でいる。

千冬先生じゃないが……やり過ぎた……

まだ、試合中なので俺は、何とか呼び戻そうと通信を送った。

「……………山田先生」

「はういー!!」

変な叫びと同時に山田先生は、現実にかムバックしてくれた。

その様子に胸を撫で下ろした俺は、言葉を続けた。

「しっかりして下さい。まだ試合中なんですから」

「さ、さ、櫻井君のせいなんですよ!?!」

「……………面目ございません」

「もう!容赦はしませんよ!」

(ですが、ありがとうございました。……………これでようやく

両手にショットガンを新たに呼び出して先ほどよりも猛攻を浴びせ
ながらプライベート・チャンネルを流してくるのは彼女の本質だろ
うか?

俺は、両手に流星ノ疾風を持ち、レーザーマシンガンで応戦しながら
こちらにもプライベート・チャンネルを流した。

(いいえ……『カズヤ』さんには、俺もカウンセリングで世話にな
ってましたから……これぐらいは

（そうだったんですか

（ええ。あつ、あとカズヤさん、二年後まで待つてくれっていつていましたけど……）

（それは……私から頼んだんです

（？何故ですか？

際どいところで右手のショットガンを投げ捨てて、ナイフを振りかざしてくる。

それを左手の流星／疾風から鞘を分離させて応戦する。

ぶつかり会う刃から火花が散りゆく。

（そのまま、結婚しちゃってもいいって言ってくれたんですが……

・この1年、いろんな事に巻き込まれちゃいましたから……櫻井君や織村君達が卒業するまでフリーで動けるようにしときたいんです……お節介すぎますね私……

（いいえ……カズヤさんからは、なんと返答を？

山田先生の決意は認めたものの……自分達がいるためにすぐ手に入る幸せを奪ってしまったような気分陥った俺は、余計な話まで話を流してしまった。

が、それを聞いてか山田先生は、少しだけ笑って答えてくれた。

（カズヤさんから……『わかった』と言ってくれました。実を言うとかズヤさんもカズヤさんで、どちらに身を置こうか決めかねていたそうですから……色んな意味で……）……そうですか

俺は、山田先生も恐らく聞かされているだろうカズヤさんが引きず

っている事を知っているから責めたりはしない……寧ろ、考
えて『失った最愛の者』のために次のスタートを切ってほしいとこ
の時強く思った。

（それじゃあ、話はお終いにして……終わりにしましょう。
……皆さんに説明しなきゃいけませんから……）
……了解

そう言った山田先生の動きがさらに速いものとなる。

俺は、遅れをとらないようにさらに加速していく。

強者に挑むものとして……そして……自分なりの祝福を送る
ために。

……いつか、自分もそうされる立場になるとしても……

Side Out

アリーナ 観客席

Side ???

目の前をIS達が高速で飛びかう。

「千冬様、負けないで!!」

「一夏さん!ファイト!!」

少しだけ歓声が湧くが、まわりの女子が声を出す間もなくIS達を
見つめ続けている。

今回の対戦は、本日だけ現役復帰してISを操る織村千冬がいるそ

うだから余計、注目度が高かった。

だが……『IS嫌い』の『男』の俺にとってはどうでもいい事だ。

何故、『IS嫌い』かって？

それは……一番大好きな頃の父から『空』を奪ったからだ。

父は、戦闘機乗りであつたが……ISの登場によつて『お役』を奪われた挙げ句、戦闘機の有意義性を示すために挑んだ模擬戦で散々叩きのめされて空軍を去ってしまったのだ。

（結果はボロ負けで、墜落したと聞いているから叩きのめされたに違いない）

今現在では民間航空会社とバイトに近い形で何かの研究機関で働いているが……あの頃の姿を忘れない俺はしだいに嫌いになつていった。

ISが無ければ……思っただけで激情にかられそうになる。

そんな俺がこんな場所にいるのは……『適正テスト』に合格したからだ。

この1年で男でISが使える人間が何人が見つかった事から、政府がISの適正テストを男子でも一部の中学で実施した。

適正テストと言っても、実機のISに触れるだけといった実に簡単なものだ。

順番は、最初から拒否していた事もあり、最後であった。

逃げ出そうとも考えていたが、逃げ出そうとした矢先に幼なじみである女子に捕まってテストを受けてしまった。

その結果・・・起動を成功させてしまった。

何故だかわからない・・・男子連中からは驚きの声が上がって、男子を笑いに來ていた女子達も流石にこれには言葉を失っていた。

それからは・・・トントン拍子に話が進んでIS学園への強制入学が半ば決まってしまったのである。

入学せずに1年浪人、しようかと考えたが・・・
一番、ISに苦汁を舐めさせられたはずの父が笑いながら入学してみろって言った。

理由は・・・

たまには変わった経験もしてみるのも、人生だ。
行ってみたらどうだ？

・・・と

ますます嫌いになったが・・・結局、一緒に入学する事になった幼なじみの付き添いという形で4月から入学する生徒を対象にしたこのイベントに参加したのだ。

「うわあゝ、見てみて瀏ちゃん!!」

「いちいち騒ぐなよアイ、みつともなさ過ぎだ」

俺、不知火瀏夜は幼なじみである浅利愛流、愛称アイに呆れた声を返した。

「だってだって!こんな間近でIS同士の勝負が見られるんだし!」

そうアイは、自身の特徴である茶髪で一本だけ跳ねているアホ毛を揺らしながら嬉しそな顔をしている。

「そうかい、そうかい・・・嫌っている奴にとっては地獄だがな」

俺は、ダークブラウンの髪を弄りながら少しだけ皮肉を入れて答えた。

「もう瀏ちゃんってば・・・」

隣にポテリと座り直したアイが俺の心境を理解した上で困った顔をした。

「まだ気乗りしないの?入学もほぼ決まってるのに」

「当たり前だ。だいたい・・・俺のIS嫌いは知ってるだろ?」

「もう・・・瀏ちゃん以外にも男の子はいるよ?」

そうつぶやくアイの視線の跡を追うように視線を走らせるとたぶん俺と同じように起動が出来てしまった男らしい人物が二、三人いる。

……俺と同じで哀れだな。

……俺もそうだが、入学してから女尊男卑社会の洗礼でコケにされて、つまらない罪を浴びせられんだろうな。

その姿を見た俺は、自然にそう思ったその時……目の前が陰った。

視線を前に戻すとモースグリーンのISと白銀色のISがかなりのスピードでアリーナの淵に沿うように飛び続けていた。

剣撃を交えた格闘戦を行う2機は、一步も譲らない。

やがて一周してきた時、白銀のISは、片方の剣でナイフを弾いてもう片方の剣の形を瞬時に変えたかと思うとモースグリーンのISの片翼を切り裂いた。

その時、俺は白銀のISの搭乗者を見て驚いた。

その一撃を食らわせたISの搭乗者は『男』だったのだ。

「女のISと『男のIS』が戦ってる！？織村一夏か？」

俺は、つい世界初で男でISを扱える男の名を口走った。

「えっ、瀏ちゃん。対戦表見てないの？」

その口走った言葉に反応したアイが俺に言葉を投げた。

「ああ……どうせ女同士の戦いだろっと思ってな」

「はあ、瀏ちゃん……今やってる試合はね、IS学園に在学中の『4人』の男の子の内、2人が試合をやってただよ」

「『4人』の男？じゃあ、今戦ってるのは何年生なんだ？」

「ええつと……あつ、あつた来年度から2年生に上がる1年1組の織村一夏さんと櫻井翔さんだよ」

渡されていたパンフレットを見たアイの言葉を聞いた俺は、応じる。

「そうなのか……まあ、デモンストレーションだろ……そう簡単に勝てるはず……」

「あつ、今2人が戦っているのって織村千冬さんとIS学園の『教師』さんみたいだよ……しかも千冬様のコメント欄には『殲滅するのみ』ってあるけど……」

「はあ！？じゃあ何か、あの2人、本気の教師達とやりあってるのか？」

「た、たぶん」

俺は、驚愕しながらIS達を追った。

白銀のISは、モースグリーンのISに追い打ちをかけようとするが、その前に回避されて弾幕まかれた。

だが、弾幕を加速で振り切ると白銀のISは、斬り掛かっていく。

一方、白色のISと桜色のISは、刃から同じ白い輝きを放ちながら刃を打ち合い、高速で交わってゆく。

そちらの方は、既に一つの芸術の域に達しているのだから、美しい舞のようにも見えた。

その2つの高速戦の中で俺は、ある事に気が付いた。

それは……戦っている彼らの表情が『楽しんで』いるものだったからだ。

何故、楽しんでいるんだ!?

全力を出している教師達、2人をたかが高1が、あんなにもって!?!?

俺は、最後まで理解出来ないまま試合を見続けた。

やがて……

「キャッ!?!」

「よし、つ……」

「惜しかったな、お前達!?!」

「しまっ!」

「なっ!」

「「うわが!?!」」

『試合終了。勝者……』

夜

IS学園

食堂

Side 一夏

「「織村君、櫻井君。優勝おめでとう!」」

クラッカーの紙屑を浴びながら俺と翔は、トーナメント優勝の祝福された。

「おう！と・・・そんだけじゃないか？」

「ああ、『副会長』。宣言をお願いする」

隣に座る翔が薄く笑いながら次に移るように促した。

「ああ。ではこれより・・・来年度、入学の１年生との懇談パーティーをはじめ。新入生の諸君、楽しんでくれよ！！！」

「・・・はい！！！！」

俺が宣言すると一ヶ所にまとまっていた新入生達は固まっていた気持ちが楽になったのか散つていき、所々で元気よく人に会っていく。

「オルコット先輩！凄い撃ち方でしたよ！」

「あら・・・先輩だなんてそんな・・・」

「照れんなよ。気持ち良く受け取ってやれ・・・でなきゃ俺がそれを受け取るうか？」

「うう！！イジワルですわ／＼」

「そう、怒んなくて」

セシリアが早速、新入生に慕われ、照れているところに彼女のパートナーが軽くおちよくった。

「鈴お姉さま！！貴女に惚れてしまいました！！」

「そうなの、あははは」

鈴も照れくさそうに眼を泳がしている。

「シャルさん、俺と付き合って・・・バグッ！？」

「・・・手を出すな。・・・手を出したら悪夢を見せてやる」

「か、カケル／＼」

シャルに変な虫が集ろうとしたのを見てか、翔が本気のアイアンクローを食らわせて引き剥がしている。

「ラウラ先輩！！師として崇めても宜しいでしょうか！？」

「私が師だと？・・・よいのか？」

「はい！試合で憧れてしまいました！！！！どうか・・・」

「・・・私の指導は甘くないぞ」

「師匠おお！！」

「いきなり抱きつくな！！」

女の子の弟子が出来たラウラは、照れ隠しだろうか、恥ずかしそうに頬を染めながら弟子を抱き締め返している。

とその一方で・・・

「やまやま、いつの間に！？」

「おめでとうございます！！」

「相手はどんな人？」

「あつ、えつと・・・」

片隅では、婚約が判明した山田先生がクラスの女子から祝福を受けている。

その左手の薬指には指輪のような輝きが俺のところからでも確認できた。

それを少しだけ微笑んでみてから回りを見渡すと和やかな空気が流れだしていることがわかった。

ふう、よかったよかつ・・・

「い、一夏さん！」

「ん？」

俺が後ろを振り返るとそこには、赤毛の髪がみえた。

「おつ、蘭。久しぶり！」

「はっ、はい。一夏さんも！」

去年からIS学園を目指していた五反田蘭が俺の前にいた。

「ここにいるって事は・・・」

「はい！試験通りました！」

「おつ、良かったじゃん！おめでとう！！これからよろしくな」後輩

「はい。『先輩』！」

俺は、無性に喜んで蘭の頭を乱雑に撫でてやった。

撫でられた蘭は、恥ずかしそうに頬を染める。

「えっ、えっと・・・あと聞きたいんですが」

「？何だ？急に改まって」

彼女の態度の変化に俺は、首を傾げてしまう。

「えっと・・・一夏さんて付き合っている・・・人は・・・」

「一夏」

蘭の言葉がすべて紡がれる前に声がかけられた。

その声の主はわかっている。

「箒」

俺の幼なじみがその特徴であるポニーテールを揺らしながら近づいてきた。

「ここにいたのか」

「ああ、そっちは？」

「……新人生にもみくちやにされていた」

その言葉に改めて顔を見ると少しだけげっそりしていた。

「そりゃ、御愁傷様」

「お互いにだ……ほら、飲み物を貰ってきてやったぞ」

「おっ、サンキュー」

俺は、箒にねぎらいの言葉を言いながら箒から飲み物を受け取った瞬間……

「ご、ご沙汰です！篠ノ乃さん！」

「？君は……ああ、夏祭りの。名前は……蘭」

「はい。そうです！」

「この場にいるということは……」

「はい、来年度から一夏さん達の後輩になります。よろしくお願いします」

「そうか……ならよろしくな」

「はい」

箒達は、互いに手を差し出すと握手をした。

だが・・・手を離れた瞬間から・・・箒が『笑顔』のまま、俺の方を見た。

「一夏・・・」

「・・・はっ、はい」

微かにどす黒いものを感じた俺は、冷や汗を掻き出す。

「あとで・・・『オハナシ』を聞かせ・・・」

「何よあんた！！」

箒の言葉を遮って何処からか言い争う声が聞こえてきた。

「何って、お前がグチグチと嫌味ったらしく言ってたんだろっが」

「グチグチって、あんたら男子が不釣り合いなのよ！」

「・・・そんな口、ISを持ってから言うんだな」

「何ですってえ！」

「やめなよ。瀏ちゃん」

「止めんな。アイ」

どうやら新しく見つかった新入生の男子と新入生の女子とが何か揉めたみたいだ。

想定された事態だったので、俺はあまり驚かずにシャルという翔にプライベート・チャンネルで呼び掛ける。

（どうする？

）・・・うるさいと空気が悪くなる。プラン『オハナシ』

（了解・・・話し聞いてからにしろよ？

）わかってる。・・・どっかの『白い魔王』のようにしない
（ならいいが、俺もすぐに行く

俺は、プライベート・チャンネルを切ると箒に声をかけた。

「わりいんだけどさ箒・・・」

「・・・わかってる、手伝う」

「へっ？」

「いつもすまねえな」

「気にするな。お前と『付き合って』、このくらいは軽いうちだ」

「えっ、ええ・・・」

「なら行くか」

「うむ」

俺は、いつものように箒の手を取ると引っ張りだす。

引っ張られた箒は、少し頬を染めたが自然についてきてくれる。

こつという顔を見ると可愛いと頭の片隅で思ってしまうのは、『恋人』
になったからかなのかと・・・少しだけ考えてしまった。

気付かなかった時よりも、綺麗になったようなと何を考えてんだ！
！！

同時に立ち去ったところからピシリと碎け散った音がしたが・・・
・何の音だったんだろうか？
と考える前にお勤めだな

そう考えているうちに騒ぎの場所にたどり着いた。

Side Out

Side 翔

「ふう」

俺は、辺りを見渡しながら軽く息を付いた。

「お疲れさま、カケル」

「ああ、ありがとう。シャル」

俺は、シャルから渡されていた炭酸系の飲み物を受け取った。

「乾杯するか？」

「うん、カケルにとっては残念乾杯になっちゃうけど？」

「気にするな。アレはキツ過ぎた」

「クスッ」

シャルが小さく笑ったところで俺も小さく笑って乾杯した。

「ふう」

「でも、惜しかったね」

お互いに一口飲むとシャルから話しだした。

「ああ、山田先生を戦闘不能にしたのはよかったんだが……」

「そのあとに織村先生が、決めちゃったからね」

「……悪夢だ」

試合の方を簡単にまとめると、俺が山田先生を落とした直後、千冬先生が一夏を吹き飛ばした。

ちょうどその時、一夏と俺は、直線上に並んでしまっていた。

それを千冬先生が見逃す事無く、イグニッション・ブーストを起動。直線上に駆け抜けながら余す事なく零落白夜で切られ、絶対防御が発動、その結果、シールドエネルギー残量が0となって負けてしまったのだ。

一夏は、謝ってきたが・・・謝らないといけないのは、いつの間にか近くで戦っていた俺の方だ。

近くに居なければ勝てたものを不意にして・・・

そう考えるだけで気分が落ちる。

「はぁ・・・」

「クスッ」

「なにが可笑しい？」

「いいや別に、ただカケルも変わったなあと思って」

「・・・ああ、そうだな」

その言葉に自然と笑みが出る俺。

こうできるようになったのもみんなのおかげだ。

そう思いながらも席に体を預けているとシャルが肩に寄り掛かってきた。

「シャル？」

「・・・カケル、一ついいかな？」

僅かに顔をあげてくるシャルの顔に一瞬だけドキリとしてしまった。

「・・・何だ？」

特技として身についてしまったポーカーフエイスを久々に発揮しながら俺は、シャルの問いかけを待った。

「・・・僕は・・・カケルに何度も助けてもらった」

「ああ」

「・・・そして僕の存在を認めてくれた」

「・・・それは俺も同じ・・・」

「まだあるから最後まで聞いて・・・そ、それでね。か、か、カケル・・・僕は、カケルが『好き』なんだよ」

「・・・とづくに知ってるさ」

そこまでなら俺も同じだ。

「・・・最初は、決める事をやらないシャルに手を差し伸べるため、気に掛けていた。」

だが、色んなもののために『無茶』をして傷ついた時、泣かれてしまった。

その頃から何か別の感情が表れ出した。

やがて、俺の秘密が明かされた時、泣かれながら抱き締めてくれた。
……心から……

だから、攫われて結婚させられそうになった時、かつてないほど怒りが沸き上がり、『解体戦』にまでしてしまったのである。

それから、公認の仲になったものの……

今までの事を思い出しながらシャルの言葉の続きを待った。

「だから……だから、『証』が欲しいんだ。僕は……物とかじやなくて……『気持ち的な意味』で」

「シャル……」
「つう／＼／／／」

シャルの言葉は、真っ赤になりながらだがしっかりと伝わった。

気持ち的な意味とは……今の段階で出来る事だろう……
……だと祈りたい。

別の意味に捉えられてしまいかもしれない中、俺はシャルが望んでいるものを理解した。

今まで邪魔や他人がいる……そして、自分が一歩引いていたからしていなかった事……

なら俺は、してやらなくてはならない。

真に思いを伝えるために……

俺は、静かにシャルの肩を掴んだ。

シャルは、少しだけ驚いたような顔をしたが……直ぐに落ち着いたようで、受け入れるため目をつぶった。

俺は、僅かに胸の高まりを聞きながら彼女の顔に近づく。

《キャアああ！マスターいよいよですね

《邪魔してはいけませんよ。姉様

今日ばかりは、アストレイア『達』からの冷やかしを受け流して近づいた。

……さらにいくつかカメラや楽しんでいる視線も感じたが、それすら無視した。

息が掛かり合い、もう少し……

「何よあんだ!!」

その空気を見事に看破して何処からか言い争う声が聞こえてきた。

「な、何？」

シャルが体を強ばらして離れてしまった。

「何って、お前がグチグチと嫌味ったらしく言ってたんだろっが」

「グチグチって、あんたら男子が不釣り合いなのよ！」

「・・・そんな口、ISを持ってから言っただな」

「何ですってえ！」

「やめなよ。瀏ちゃん」

「止めんな。アイ」

アイツら・・・

邪魔されたからかもしれないが・・・今回はかりは、昔に戻ろうとした。

「か、か、カケル。眼、眼を戻して！」

眼が金色に変わったからヤバいと感じたのか、シャルはあわてて止めに入る。

「心配するな・・・1分で『殲滅』する」

「『殲滅』はダメ！」

つぶやきを漏らした俺は、まわりからため息やあちゃーと言った風に残念と言葉が投げ付けられた事にさらに怒りを加速させた。

Side Out

Side シャル

カケル、悔しいのはわかるけどさ『戻って来て！』

僕は、カケルを抑えようとするが・・・今回はかりは、許しきれないのか『金色』に眼を輝かせて恐ろしい事になっている。

恐すぎる！

もう止められないと思ったその時……

「……ああ、わかった」

「へっ？」

何か聞いたのか、カケルはすぐにいつものように戻った。

僕は、何が何だかわからなかったため、首を傾げた。

「プライベート・チャンネルで一夏と止めに入る事になった」

ああ成る程

僕は理解した。

「殲滅はしないが……場合によっては、話を聞く」

「うん、わかった」

話を聞いて……内容自体大体わかるんだけどね

僕らは立ち上がって、歩いていこうとする……と

「……と、その前に」

「えっ、むっ……」

先に立ち上がっていたカケルが僕の顎に手をやり、そのまま……

『唇同士』を重ねられた。

「「「あああ！」」」

「わっお」

「ニコニコ」

「・・・終わったな」

その光景にまわりから歓喜が上がり、同時に・・・悲鳴が上がった。

か、カケル！

僕は、そのまま固まってしまい動けなかった。

少ししてカケルの唇が離れるとカケルは、耳元に口を近付けて囁く。

「・・・これが『証』だ。君に対しての・・・」

カケル・・・

「ほら、行くぞ。シャル」

恥ずかしさのあまり頭を下げているためカケルの顔が見ることが出来ないが、差し伸べられた手を取ると僕は、一緒に歩きだした。

ううう／＼／＼／＼カケルのバカ！！！！不意打ちなんて！！

あとでポカポカしてやろうかと思いつながら僕も僕も嬉しい気持ちで胸が満たされた。

確かな絆を感じられて……すべてが満たされた時、僕は、新たな一歩へと踏み出し始めた。

Side Out

Side 瀏夜

俺は、適当にバイキングで料理を取ってから席に戻った。

回りでは懇談会が行われて、騒がしいが俺は食いはじめる。

「……さすが国立、材料も一級品だ」

「まあ、瀏ちゃん臍曲り過ぎだよ」

隣の席に戻ってきたアイが、俺の皮肉に愚痴をこぼした。

「いちいち、反応なくていい。……ところでお前はいいのか？」

「ふえ、何が？」

「何がって、何人か憧れたヤツが出来たんだろ？」

隣で騒ぎながら見ていたアイを思い出し、何で俺と一緒にいるのかわからないため聞いた。

「えっえつと……一緒に居たかったからじゃいけない？」

可愛い上目遣いでアイは、こちらを見る。

ウツグ！……負けた

何度目かの『ダメなの？』攻撃にまけた俺は、白旗を振った。

「……勝手にしろ」

「♪ありがとね」

「……しかし、ゲームなんかじゃ羨ましい環境だが……
……実際には地獄だな」

俺は、とびっきりの笑顔で笑ってくるアイを無視して回りを改めて見て、呟く。

見渡す限り、女子、女子、女子ばかり……IS学園は、元々『女性しか扱えないIS』の運用者育成のために作られた学園と聞いたが……男子が4人しかいないとなるとかなりシビアだ。

……聞いて極楽、見て地獄……まさにその空間に投げ込まれた事になる。

「はぁ……本気でやめ……」

「あんたら男子は、私らに『コケ』にされてればいいんじゃない？」

「ん？」

真後ろのボックス席から何やらムカつく言葉が出たような。

「……えっ？」

「だから、例えばISが扱えれば私らと同等になれると思うわけ？」

ほらまただ……

俺には関係ないが、気になったため後ろを向いてみることにした。

様子から見るとそこにいたのは、全員が俺と同じ新入生だ。

1人で座っていた男子が2人ぐらいの女子に囲まれている。

「ど、どう言う意味です？」

バカ、弱いとこ見せたら……

「言葉の通りよ。いくらISが使えても結局は、それだけ！！偉くも何ともないのよ」

「……偉くも何ともないって……どんな」

ちつ、女尊男卑の弊害か。

俺がそう思うのも女尊男卑の社会仕組みが作られて早十年、その間、社会を担っていた男達は『IS』が使えない……。ただそれだけで権利を奪われ続け、今では女性が偉いと言う形になっている。

だが、だからと言って完全に落ちぶれたわけではなく、当然の『権利』としてそれを振りかざしてはならない。

しかし、すべての人間が同じ方向を観るわけではないように中には、振りかざす奴、従う奴がいる。

俺にとっても一番嫌いなタイプだ。

そうイラツキながらも俺は、話に耳を澄ました。

「つまりはね、あんたら男子は私らに『使われ』、『食い潰され』

『浪費され』ればいいのよ」

「なぜ浪費？」

「黙りなさい、あんた。所詮『ゴミ』なんだから」

ブチリ

ここまでの暴言を言われてなんも反応を示さない男子の方もそうだが、女子の言い方も言い方だ……。人を『ゴミ』のように扱う『チキン野郎』がいる……。そんな奴らばかりが父を地に墮としたISを使うな……。上等だ。

「……………」

「何も言い返せないようね……。いいざ……………」

「ホント、『女』がISを使えるなんて馬鹿馬鹿しく思ってたが、本当にバカばかりだな!!」

「!？」

「何よあんた!」

「りゅ、りゅ、瀏ちゃん」

隣のアイが俺の発言に驚いているが、止まる事はもう出来ない。

俺は、席から立ち上がると女子らと向き合った。

「バカらしく、見知った事を振りかざし続けて何偉そうに喚きつづけてんだ？はっ、近年の日本が落ちぶれたのもお前らみたいなのがいるからだな」

「何よあんた!!」

俺の挑発に見事に引っ掛かる女子。

「何って、お前がグチグチと嫌味ったらしく言ってたんだろっが」

「グチグチって、あんたら男子が不釣り合いなのよ!」

「・・・そんな口、ISを持ってから言っただな」

「何ですってえ!」

ISがなければただの人間である事は変わらない、そんな事すら考えていないならこいつは、アホだ。

「やめなよ。瀏ちゃん」

「止めんな。アイ」

アイが止めに入ろうとするが、俺はまだまだ終わらない。

と言うより今まで溜まっていた鬱憤が一気に吐き出されていたからだ。

「だってそうだろう? ISがなければお前らだってただの人間・・・いや、『豚』以下だな」

「あんた、舐めすぎ。舞!」

「ええ、ここで殺してやるわ!」

・
2人の女子のうち、片方が右手を掲げて何かをしようとして・・・

「・・・そこまでだ」

「えっ・・・イッタタタい!!!」

出来なかった。

何故なら黒髪で赤い瞳をした男がその掲げられた右手を掴んで、後

ろに締めあげたからだ。

よくよくその男を見るとIS学園の制服に似た制服を着ている。

「あ、あんたは？」

「おい、新人生」

ガシッ

俺がその男に問いかけようとする前に首に絡めるように後ろから抱きつかれた。

誰かと思いい隣を見ると見知らぬ男が眉間にしわを寄せてこちらを見ていた。

「啖呵きんのはかつこいいけどさ、『専用機』持ちに展開させるま
でいったら、お前今ごろ頭撃ち抜かれてたぞ？」

「『専用機』持ち？」

聞き慣れない単語に俺は、ただ首を傾げた。

「ああ、とそろそろ向こうも止めねえとな。おい。翔」
「……………」

俺にまわり付いた男が未だに後ろに締めあげている男、翔に声をかけると呼ばれて男は、無言で頷いて締めあげていた腕を離してやつた。

「ツウ！」

強く締めあげていたからか、何かをしようとしていた女子が崩れ去

った。

「ま、舞！な、何すんのよあんだ！？」

崩れ去った女子に駆け寄りながらもそうした男を睨む女子。

「何する？こっちの台詞だ。『専用機』持ちが下らない言い争いでISを持ち出ほうがどうかしている……もつとも前例はあるが」

男が小さく言った最後の方を聞いた一部のIS学園側の女子が苦い顔をした。

何でだろうと俺は、頭の片隅で考えだしたが、今は前だけを見た。

「何よ。男が偉そうに、あんたが最初の織村一夏？」

「いいや違うさ、俺が織村一夏だ。でそっちが、2人目の櫻井翔」

こいつが？

俺に抱き付いてきていた俺が織村一夏……なんと言つかあんまり覇気を感じられない男だなと思ったが……

「途中からだ、お前ら散々な事を言ってくれたみたいだな？」

急に目が鋭いものとなり、女子達を見た。

「だったら何よ？」

「入学したら俺のところに来い……『その腐ってたれ流れそくな根性』叩きのめしてやるよ」

若干、笑みを見せながら言う言葉には凄味が滲み出てきている。

な、何だよこいつは……

最初にニユースで見た時には俺でも十分倒せるただの歳上と考えていたが……この1年で何かが合ったらしく、なんと言ったらいいかわからないが強さを感じた。

「舐めた口を」

「いや、一夏。俺がやる」

織村が宣言してすぐに櫻井と言った男が口を開くが……

「別にいいさ。こんな『ひよこ』、相手にするぐらい俺だけでいい」
「ひ、ひよこですって!？」

「このくそっ男が」

「フツ、ヒヨコか。確かにそうだな……喧しいヒヨコ二匹ぐらい造作もないか」

櫻井もそう言いながら眼の方が怪しい輝きを放っている。

アレは、殺意を絡ませた視線だ。

だが、そんな事にも気付かない女子は……

「ひよこですって!?!？」

怒りのボンテージをさらに上げた。

てっ、ちよつと待てよ!!

すっかり蚊帳の外に置かれた俺は、叫びを挙げた。

「まっ、待ってくれ！」

「どうした？」

「・・・・・・下がっている。新入生」

俺の叫びに2人の男が反応する

「新入生、新入生とうるせえ！俺のには不知火瀏夜って言う名がある！」

「不知火・・・・・・」

櫻井が何か思ったことがあるのか、俺の性を気にしたが今は深く考えなかった。

「で、話だ。俺が買った問題だ、なら俺がやる！」

「お前が？」

未だに殺意に満ちた眼で俺を見た櫻井が問い掛けるように呟く。

ピシリピシ・・・・・・

その俺に向けられた殺意で背筋が凍り出す音を聞いたが気合いで溶かして答えた。

「あ、ああ！」

「・・・・一応聞くけどよ。お前、何時間、ISを使った事がある？」

俺が返事を返した時、俺から離れた織村がそう問い掛けてきた。

「な、なんだよ急に？」

質問の意味がわからずに首を傾げる俺。

Side Out

Side 一夏

なんかデジャブリそうな流れになってきたなあ……

話の流れ的に『俺がクラス代表決定戦』でやったみたいな流れになつてきたため、俺は、聞かずともわかることだが一応聞いてみた。

「な、なんだよ急に？」

「いいから答えてみる」

いきなり問い掛けられた事から瀏夜は眼を白黒させるが、俺はそれを無視して問い掛けを続けさせた。

と……

「……適正テストと入試の時を入れて1時間弱ぐらいです」

「アイ！」

彼の傍らから出てきた女の子が彼の代わりに答えてくれた。

「君は？」

「し、失礼しました。お、織村先輩。私は、りゅ……不知火君と同じ中学の浅利愛流と言います」

俺に緊張しているのか、愛流と名乗った女の子はぎこちなく答えてくれた。

「アイ、余計なことを」

「う、ごめん」

瀏夜に睨まれた愛流は、少し小さくなった。

ああ、そうか

2人の関係がそれだけでわかった。

それだけで関係が見える俺も成長したということか

そう頭の片隅でかんがえていると……。「はあ、1時間弱でやりやうわけ？ かったわね」

「なんだと」

鼻で笑った様な言い方で女子が言った言葉に瀏夜が怒りを顕にする。

落ち着け、理由はすぐに……

「だってそうでしょ、ISの強さはね。どれだけ扱ったかが勝……」

「あら、どんなに扱っていても不意を突かれれば負けますわよ？」

そうさえぎったのはセシリアだ。

ナイス援護！

俺は、心の中で親指をたてた。

その言葉に新入生達が眼を点にする。

（あとはお任せますわ

）ああ

同時にセシリアからのプライベート・チャンネルを返すと俺は、口を開いた。

「そうだぞ。俺も本格的にISを動かしたのは入試のあと試合・・・しかもぶっつけ本番。だから稼働時間だけで勝負が決まるわけじゃない」

「ちよつと待て、誰がISでやるって・・・」

瀏夜がISではない勝負を言い掛けるが・・・

「ああ、そうだな。それにIS自体、人の形をしている・・・その点から見れば体の動き方1つでもかなり変わってくる」

翔がそうさえぎって、プライベート・チャンネルを流してきた。

（時間を稼ぐ、そいつにISで勝負に応じるように説得しろ・・・
・もう直接ケリ付けないかぎり治まりそうにない
（・・・了解

翔がみんなの気を引くために持論を展開している中ではつきりとデジャブを感じながら俺は、瀏夜の肩を掴んで耳元で囁く。

「・・・・・・・・もう事態は、ISでやり合うところまで来ちまってる。諦める」

「だが・・・・・・・・」

「俺だってそうだったんだ・・・・・・・・それともISを使いたくない理由でもあるのか？」

「それは・・・・・・・・」

瀏夜は、俺の言葉に眼を泳がし始めた。

何かあるのだろうか？

俺がその様子に首を傾げていると・・・・・・・・

「・・・・・・・・わかりました」

翔の持論を聞いていた対戦するであろう女子が頷いた。

「その方とは、入学してからISで決着をつけるわ」

「・・・・・・・・ヤルしかないのかよ。クソッ」

それを聞いた瀏夜が小さく愚痴をこぼすが・・・・・・・・次の言葉には、頭を抱えた。

「で、お前にハンデは付けるか？」

「はっ？ハンデ」

新入生の殆どが瀏夜の言葉に眼を点にした。

そんな光景に首を傾げながら瀏夜は、再び口を開いた。

「？・・・・・・・・俺は、女相手に本気でやりあう気はサラサラない」

「ぶっ、アハハハ!!」

やっぱりかよ

その言葉が紡がれた瞬間、新入生達が笑いだした。

完全に再現された事に俺は、穴を掘って逃げたい気分になった。

だが……

「……女尊男卑であれ、これだけは外せねえよ」

瀏夜が言い切った言葉に新入生達が眼を点にした。

あっ、わかったうえでなの

俺は、彼が愚かでない事に気が付いた。

「だけどねえ、あんた。男と女が戦争したら3日は持たないって」

呆れ果てた顔で女子が、『昔の一般論』を口にしたが……この時点で気付くべきだった……修羅の存在に……

「……それはもう昔だ。小娘共」

「へっ？」

ドス!ドス!

「いたあ!」

「アギヤ!」

お見事です千冬・・・

「お前達もだ」

ドス！ドス！ドス！

「・・・！」

「ツウ！」

「アゲツ・・・」

「まったく、お前達がいながら・・・さつさと『つぶせばいいもの』を」

刀ならぬ出席簿・・・いや今回は食堂らしくトレイで俺達の頭を叩いた学園最凶の教師、織村千冬は、不機嫌さ丸出しで、出現した。

わざわざご苦労様です。

「・・・織村先生、流石に潰すのは・・・」

「・・・煩くてかなわなかったからな、これくらいが妥当だ。

おい、誰がこの2人を医務室に連れてってやれ」

「あつ、はい！」

翔が、地面に倒れた・・・受け慣れていない新入生達を見ながら
そう言うが・・・千冬姉は、連れていかれる女子2人を見送り
ながら不機嫌さをより深めて口にした。

「キヤアア！本物の千冬様よ！！！」

「私も一撃受けてみたい！」

千冬姉の参戦に一気に色めきたつ。

「ああ、鬱陶しい……。織村、櫻井。そっちは任せる。その『クソガキ』から詳しい経緯を聞いてやれ」

「あ、ああ……。」

「……。了解」

千冬姉がそれらの女子を連れていくのを見送りながら、俺達は多分、幼なじみであろう愛流が必死に呼び掛けている気絶した瀏夜をとりあえず引き起こして移動する。

Side Out

Side 瀏夜

ツツ！つめてえ！！

俺は、頭の冷たいものに乗っけられ、その冷たさに意識を取り戻した。

「あつ、瀏ちゃん。目を覚ました」

それをやったのは、氷を包んだハンカチを持ったアイだった。

「アイ？……。あいつらは……。ツウ！」

頭部が異常に痛い、誰かに殴られたようだ。

「ツツ！う！いったい何が……」

食堂のボックス席みたいだが……

「あつ、えつと……」

「織村先生の攻撃を食らわされたんだ、お前は」

とアイの代わりに答えた奴がいた。

痛みで下げていた頭をあげるとそこには、2人目の男 櫻井翔がいた。

「初めてじゃあ、仕方ねえよ。あれは」

1人目、織村一夏も少し笑いながらそこにいた。

よく見ると他にも目付きがきつい女やツインテール、眼帯付き等、IS学園の制服を着た女子がいる。

「……あんたらは？」

「りゅ、瀏ちゃん。先輩に向かって口悪すぎだよ」

「……失礼しました」

俺は、アイの言葉に不満ながらも言い直すが……

「別にいい。まずは自己紹介からだ。俺は、櫻井翔だ」

「いきなり突っ放すかねえ……と俺は、織村一夏。よろしくな」

「はっ、はあ……」

俺は、冷たく止められた櫻井と明るく名を告げた織村にただ啞然とした。

「もう、瀏ちゃん。せっかく、先輩方が言ってくれたんだがら……
……あつ、私は浅利愛流……アイって呼んでください」

「…………おい」

俺は、アイの順応さに驚いて思わず待ったをかけたが…………

「よろしく」

「おう、よろしく。あつ、そうだ。皆もいいよな」

織村がアイに返事を返した後、同席していた女子達に声をかけた。

「いいもわるいも、元々引き込むつもりなのだろ？ まったく…………
篠ノ乃箒だ」

ポニーテールの女子が名を告げる。

「セシリア・オルコット、よろしくですわ。不知火さん、アイさん」

長い金髪の女子が上品そうな口調で言う。

「『専用機』持ちに喧嘩売るなんていい根性してるわね。私は、凰
鈴音。鈴て呼んでちょうだい」

ツインテールの女子が元気発露して言った。

「僕は、シャルロット・デュノア。よろしくね」

人受けのよさそうな女子が名を言った。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ…………よろしくな」

眼帯を付けた軍人ばい女子が名前を明かしてくれた。

全員が自己紹介を終えたところでアイが笑顔で口を開いた。

「よろしく願います♪先輩方♪」

と自分の自己紹介が未だである事に気が付いた俺は、口を開いた。

「お、俺は……」

「知っている。不知火瀏夜。さっき名乗っていたじゃないか」
「あっ」

そうであつた。

「しかし……一年前と同じ展開になるとは……」

「そうですね……」
「一年前？」

「あの、一年前に何か合つたんですか？」

アイが箒達の言葉に首を傾げた。

「あつ、ああ……実はな」

織村が口を開き、訳を教えてくれた。

「……どうやら、一年前にも織村とオルコットが同じ事になつたらしく戦つたらしい。」

「へえ、そんな事があつたんだ」

「その頃から嫁は……まったく」

聞く機会が無かつたのであろうか、デュノア達も納得した。

「いやあ……台詞まで似てたのは驚いたが……」

「……………」

「アハハハ」

……………マジかよ

俺は、同じ節を踏むんじゃないかと今から不安になった。

そう考えていると織村が問い掛けてきた。

「ところで瀏夜。ISで戦う気がないっていったが何でなんだ？」

「うっ、それですか……………」

俺は、答えずらい質問に口を閉じた。

何で答えなきゃなんねんだ……………

俺が織村に対してそう考えた時である。

「……不知火は、IS嫌いなんだ。親父さんがISとの模擬戦時に墜落してな」

「えっ？」

一同の視線が櫻井に集まった。

「そうなの？」

「ああ」

って！

「何でお前が知ってる！」

机を叩いて立ち上がった俺は、櫻井をにらみつける。

「りゅ、瀏ちゃん。落ち着いて！でも何で櫻井先輩が知っているんですか？私も瀏ちゃんから聞いて知ったのに？」

アイが俺を押さえながら櫻井に首を傾げた。

確かにアイには、話した……だが、その他の連中には言っていない事を何故？

その答えを櫻井が言った。

「確認するが、不知火。お前は、不知火終夜の息子しゅうやだな？」

「！！？父の名？何で知ってたんだ？」

父の名が出てきた俺はますますもって解らなくなってきた。

すると櫻井は、俺に座るように指示を出した後、ゆっくりと話した。

「不知火終夜……いや、不知火さんは二年前、父さんがIS開発に引き入れたアドバイザーだ」

「IS開発って？……じゃあ、父はISを作ってたのか、散々苦汁を飲ませられたのに？」

父がIS開発？冗談だろ！

俺は、そう思っただけで怒りが燃えだした。

なんだって、そんな事を……

「俺は企業から試作機テストのために転入して来たんだが、うちの開発チームのコンセプトは『IS登場以前の通常兵器との融合』だ」

「はっ？」

「へっ？」

俺とアイは、いきなり何でこんな話をされるのかわからずに首を傾げた。

「つまり、IS自体まだまだ技術的に開発段階だから既存の技術に応用して開発を進めると言う事なんだが……ようは、新しい店よりも古い馴染みの店のほうが怖くないって事だ」

「……！あつ、はい。理屈はわかりました。けど、なんでおじさんが入ったんですか？」

「そうよ。なんでその……何に乗っていたかわからないけど、パイロットであつた人を」

アイと鈴が翔に問い掛けた。

理由は、決まっている。

父は、IS登場以前の戦技競技大会にも参加した凄腕だつた。レッドフラッグ

しかも機体の性能限界を知るために様々な知識を持ち合わせている。

そうなれば、声が掛かるのは……

「戦闘機乗り（ファイター）としても優秀だっただけじゃない。」

彼』はISの脆さを知っているからだ」
えっ？

ISの脆さを？

「カケル、それって？」

シャルロットが問い掛ける。

「墜落したって話には続きがある。あの時……」

ISが世に出てから数カ月後、空を愛するパイロット達の威信を掛けた……IS対戦闘機の模擬戦が行われた。

ISの登場した『白騎士事件』は、確かに世界の戦争の仕方すら変えてしまった。

だが、『はいそう』ですかと彼らは頷くわけなく戦った……滅びゆく存在であろうと……

ISとの戦いは、IS1機に対して瀏夜の父も含めた腕利きが乗る戦闘機4機であったが……わずか2分で2機に減らされた。

残った2機も時間の問題であろうと考えられたが……この時、事件が起きた。

2機の内、1機がエンジントラブルを起こした。

原因は、ISの機動力に追い付くため、リミッターを外したアフターバーナーを連続使用した事によるエンジンの異常加熱であった。
生き残っていた瀏夜の父は、すぐにその機に対して脱出を指示してベイルアウト

パイロットを脱出させた……だが、パイロットがいなくなった機体はあろう事にISに直撃しそうになったのだ。

瀏夜の父は、ISのパイロットに対して回避を命じたが……彼は、見てしまったのだ『彼女』の顔が恐怖に歪んだ事を……

「怖がった？」

「ああそうだ」

何故怖がる必要がある、だってISは……

「IS導入初期は、空軍に所属していた女性パイロットが転科したパイロットを務めていたが……ISへの安全性が懐疑的だった」

「懐疑的だった？ いったい何故ですの？」

「そうよ。ISの安全性は高いはずよ？」

「どう言う意味なのカケル？」

櫻井の言葉にオルコット、鈴、シャルロットが疑問を投げ掛けた。

「それは……」

「ISが従来の兵器とは違い過ぎた事が原因なのだろ」

「ラウラ？」

ラウラの言葉に視線が彼女に集中した。

「ISは、確かに今までの兵器とは違う次元の火力、機動力、防御力を我々に示した。だが、搭乗者が『むき出し』になる構造や我々の世代では余り気にならないが今までパイロットの生命維持に必要だった対Gスーツやマスク等の装備を含めたパイロットスーツがいきなり『特殊繊維』で作られたISスーツ一枚になった事でも運用

当初は資料が渡されていても生存性が懷疑的になった。さらに初期のISへの訓練内容自体もIS学園のカルキュラムのようなものではなく、飛行パワードスーツだった事から空軍主体の『墜落』しない事を前提とした訓練だったとよく聞く。恐らくその事故の原因なのだろう」

ラウラがそれらを一気に言っていると櫻井以外、一同は呆然となってしまうた。

「……カケル」

「……なんだ？」

「……何か間違っていたか？」

「……いや、俺より詳しく話してくれたから助かる」

「……そうか、よかった／＼」

櫻井に誉められた(？)ラウラは頬を染めた。

「けど、説明が下手な歴史よりも凄かったな。やっぱり軍にいるからか？」

「えっ！ラウラ先輩って軍人なんですか？」

アイが織村の発言に驚いた。

「ああ、そうだ。そもそも私は、軍がISを導入した初期からISを使っている」

「……おいおい、そうなると約6歳からISを使ってたのかよ話しかからしてヤバさを知った俺は、僅かに冷や汗をかいてしまう。」

「へえ．．．．．じゃあ、ラウラ先輩のところでは、どんな訓練をしていたんです？」

そんな俺をよそにワクワク気分でアイは、ラウラに聞いた。

「そうだな．．．．．我がドイツでは、IS導入の段階では飛行と言うよりも余りパワーを消費しない『地上』での運用に重点を置いていた。その為、砲撃や格闘戦を中心に行っていた」

「へえ、そうなんですか？」

「．．．．．って、そんな事より話の続きを」

アイがそのまま興味を持つと変な方向に行きそうであつたため、俺は、櫻井に話を進めるように促した。

「ああ。ラウラが言ったようにIS導入期の頃は、どんなに訓練しようとも砲撃やミサイル相手には、恐怖してしまうパイロットが多かった．．．．．その時も同じだったんだろう。さらにISを扱わない側の人間からISの安全性が未知数なものだった、だから．．．．．」

そう言いながら櫻井は、両手を指の間を明けないようにくつつけた状態で片手を垂直に、片方を水平にして俺達の前に出した。

そして．．．．．

「『こうした』」

水平にした方を垂直にした方にぶつけた。

それが意味する事は、俺は、分かってしまった．．．．．つまりは．

・・・

「・・・・・・・・ISのパイロットを守るためにか」

第の言葉に櫻井が頷いた。

「ああ。自機で体当たりし、軌道を変えて不知火さんは脱出した。ISのパイロットも無事だったが・・・・・・・・この模擬戦の結果は、IS側の圧勝で処理されて、倒せたはずのタイミングで倒せなかった事で『上』に嫌がらせを受けはじめたらしい。・・・・・・・・最終的に家族にも手が伸びそうになった・・・・・・・・そこでやめて転職した。そして2年前に俺が所属する開発チームに時折来てもらって、空戦時の機体バランスの指摘やアイディアを貰っている」

「・・・・・・・・そうだったんですか」

アイが櫻井に言葉を返しながら俺をいたわるような眼で見つめてきたが・・・・・・・・俺は、応じる気力がなかった・・・・・・・・何故なら今までISのせいで父の空を奪われたと考えていた、だがそれが『人助け』を優先させた事で受けた嫌がらせを受けたと言う真実を知った。

なら、俺に何で教えてくれなかったんだ？

その答えを求めるため、俺は櫻井を見るが・・・・・・・・

「・・・・・・・・何故君に教えなかったかはわからない・・・・・・・・が今、不知火さんが望んでいる事はわかる気がする。・・・・・・・・たぶん、IS学園への入学に何も言わないのもISを嫌うのもいいが、ISを『知って』から嫌いになれって事じゃないか？」

ISを『知って？』

どう言う意味だ？

俺は、混乱が抜け切らない頭で必死に考えようとするが……
まったく考えがまとまらない。

と……

「えっ、えっつまりこう言う事ですか。ISを意味嫌うのをやめて、ISに触れてから『好きにしゃがれえ』と」

アイが、最後の方を俺の言い方を真似たのか、らしくない言い方をした。

それを聞いた一同は、さすがに眼を丸した。

「あっ、えっあ……うっう／／／」

自分がいった言葉にアイは、赤くなっていく。

それを見た皆が笑った……俺でさえも……

「わ、笑わないでくださいよ」

「ああ、わりい、わりい。だが、たぶんそれが正解なんだと思うぜ」

「はい？」

「えっ？」

織村の言葉に俺達は、同時に間抜けな声を出してしまった。

移動中

モノレール車内

俺とアイは、織村……もとおい一夏達との話し合いを終え、滞

在先であるホテルに戻るためにモノレールに揺られていた。

隣に座るアイは、はしゃぎ過ぎたのであろうか眠りこけて俺の肩に寄り掛かっていた。

やれやれ．．．．．

俺は、それを一瞥すると窓の外を見ながら、一夏達との話し合いを思い出していた。

．．．．．

「それが父の望みなのか？」

「わからないが．．．．．知っておいても悪い事ばかりじゃないと思っぜ」

「何故です？」

「IS自体、こうして俺達を繋げてくれたし．．．．．それに俺や翔に『輝き』を示してくれた」

「『輝き』？」

「ああ、俺の場合は、『大切なものを守る』ための力を示してくれた」

「．．．．．俺は、ISに『繋がり．．．世界の大きさを、人の暖かさ』を伝える事を貫く剣を貰った」

「あんたらがそう言うなら．．．．．俺も何かを掴む事になるのか、ISに『わだかまり』をもった俺にも？」

「わからねえけど、たぶんそうなるんじゃないか？」

「た、たぶんで．．．．．そんな大雑把な」

「．．．．．一夏の言い方も悪いが．．．．．瀏夜、それを望んでいるなら『願い続ける』、どうありたいか」

．．．．．

「『願い続ける』、どうありたいか、か……」

真実を知っても奪われたもののほうが大きかったため俺のIS嫌い
はすぐに治らないだろうと考えながら……翔が口にした言葉を
もう一度口にした。

確かに今まで父に理由を聞かず、ただ、昔の勇ましい姿を忘れらな
い……いや、自分が目指そうとしていた場所から居なくなっ
てしまった事が許せなくて嫌ってしまっていた。

自分が目指そうとしていたもの……それは……戦闘機で
空を舞う事だった。

だが、今は捻くれたせいでもう一度目指すことができないないと
幼き日に思い浮べた目標すらまともに見る事ができない。

……どうすりゃ……

「うう……ん、瀏ちゃん……」

いきなり隣のアイが俺の名を言ったため、隣を見た。
だが、眠りこけているから寝言なのだろう

やれやれ……

その眠りこけているアイを見た、一瞬、頭に言葉が響く。

……ISは脆い

絶対的な強さを持つISを使う側の人間にもそう言わせた……

なら戦いようによつては、それをカバーする事ができるのではないのか……。戦いにさらされる事になるだろう少女達の命を守る戦いにも繋がるのではないか……

俺の中で何かが填まる音がしたのを確かに聞きながら俺は、携帯を取り出して父に電話した。

Side Out

Side アイ

瀏ちゃんの肩に寄り掛かって寝ていた私は、話し声で目が覚めたが、寝たふりをしていた。

「父さん、俺だ。ああ、今帰り……。って、女引っ掛けて来たかって？うなけないだろうが……。うん。うん。あと父さん……。櫻井翔に会った……。ああ、事件の真相を聞いたよ……。うん。……。確かに怖い人だったな。……。で、父さん……。俺は、IS学園に行く」

えっ？

少しだけ驚いたが、話の続きを聞いた。

「……。って、女を釣るためじゃねえよ！……。ああ……。櫻井……。いや翔先輩から父さんが今やってている事を聞いたからかな？……。まだIS嫌いは治ってないけど、ISとISではない戦闘機が共に飛ぶ空を見てみたいんだよ。……。こんな学園作って女だけに怖い思いさせないためにもな」

……。瀏ちゃん

薄目を開けて隣を見ると瀏ちゃんは、意地悪くない笑みを浮かべている……まるで空へ羽ばたき出す『鳥』のように……

Side Out

《時の流れ、それは失うもの

「おもしろい子いた？」

「はい」

「……何人か」

懇談会が終わった夜。

月光が屋上を照らし、いつもの『10人』の姿を照らしだす。

「いきなり喧嘩なんて、本音に聞いたとおりね」

「……楯無さん」

「……更識会長」

その発言に一夏とセシリアは、もうやめてくれといわんばかりだ

「その……楯無先輩やめていただきたい」

「あら箒ちゃん、『夫』のお茶目なところからかわれて妬いてる妬いてるう」

「なっ／＼／＼」

その言葉に箒が真っ赤になり全員が笑った。

《失っていく事、残酷なまでに灯火すら奪いゆく

「フッフ、しかし私らもう2年かぁ・・・後輩には教えたくないわね、ISを使いまくって恋のバトルしてたなんて」
「・・・・・・同感だ。弟子にも示しがつかん」

鈴とラウラがこの1年を思い出して自然に暗い気分には陥った。

「まあまあ、青春の1ページと思えばこれくらい楽よ?」

そんな2人を見た楯無は、いつものように笑みを浮かべている。

「いや、1ページじゃ納まらないんじゃない?」
「確かに・・・・・・色々な事があって・・・・・・そして苦しんだ事もたくさんあった」

シャルの言葉を引き継いだ翔がそう締めると10人は、それぞれ複雑な顔となるが・・・・・・

《だが、同時に・・・・・・

「それでも・・・・・・」

「一夏?」

「それでも俺達は、沢山の新しい事や・・・・・・」

「愛しいパートナー」

「えっと、大切な人達との絆かな?」

「・・・・・・そして、護りたい存在を見つける事が出来た」

「ああ」

男性陣、4人の言葉に女性陣は穏やかな顔になる。

それを見つめていた楯無の肩にも手が掛けられて温もりを伝えてい

た．．．．愛しいの温もりを．．．．

それらを見ていたのは月の光だけであつた。

《時は、様々な邂逅を運び．．．

4月

IS学園

どんな悪戯だよ！男が俺1人だなんて！

「．．．．えっと次は．．不知火君よろしい？」

「あつ、はい！」

瀏夜は、学年で男が数人いたはずなのに何故かクラスでは1人だけで割り振られた事に心中で恨み言を吐いていると担任が自己紹介を促した。

チイツ！こうなったら自棄だ！

俺は、立ち上がると口を開いた。

「不知火瀏夜です．．．．よろしくお願いします」

終身監視のごとく、まわりからの女子の眼がさらに説明を求めてくる。

た、助けてくれ、アイ！先輩方！

《その邂逅は、複雑にからみあい

二年生になって新しいクラスわけになった。

クラス編成上、1クラスに専用機持ちを集中させることは流石に出来ないため、『10人』いる専用機持ちを約2人ずつにわけて各クラスに分ける事となった。

「ねえねえ聞いた、2組には櫻井君とデユノアさん、水城さんがいるみたいよ」

「うえ、あのタッグだけでもかなり強いのに」

クラスの名を知らない女子が騒いでいる。

「……今度の学年代表、かなり手強そうだな？」

「らしいな」

「だが」

「ああそうだな」

また同じクラスになった篤と俺は、口をそろえて……紡ぐ。

「「楽しめるな」」

《新たに輝くものを示し……

「なっ！……」

「？どうしたのかケル？」変な声を出した俺にシャルが問い掛けてきた。

「……部屋割りを見たら……」

「……部屋割り？……えっ！／／／」

シャルも顔を真っ赤にして部屋割りの表を見た。

そこには・・・・・・・・

室 織村 一夏

篠ノ乃 箒

・
・
・

室 櫻井 翔

シャルロット・デュノア

・
・
・
・

「だ、誰が・・・・・・・・」

「またかよ!!」

シャルが口にする前に隣のクラスから一夏の声が響いてきた。

どうやら一夏も気付いたらしい。

だが何故・・・・・・・・

「・・・・・・・・!」

「カケル?」

今朝、楯無に登校する直前に俺と一夏に手渡された生徒会に通知される部屋割り表だったのだが・・・・・・・・よくよく見ると俺と一夏の部分にだけ『生徒会長権限』の印が押されていた。

つまりは……

「……楯無さん、酷過ぎだ」

楯無さんが猫のような尻尾を忙しく振って喜んでいる姿が目には浮かんだ。

「……カケルとなら『次』のステージに進んでいいよ」
「ハア!？」

「……まだまだ混乱は続きそうだ。」

《そしてまた色々な色を示し……》

『いいか、瀏夜。その『白夜貳型』は、一夏の白貳と俺のスターダストのデータをもとに開発された『白夜』に旧デュノア社の技術を盛り込んだ量産試作機だ。今年度入学した男達に運用を任されているから壊すなよ?』

「わかっていますよ、にっしても少しごっついすっね、これ」

そう俺が着こんだ白いISに対しての感想を言った。

回されるまで先輩方と訓練していたからわかるが、この白夜貳型は、一夏先輩のと翔先輩のISをもとにしているものの、所々訓練機打鉄に近い印象をもっている。

肩に真横を向いたスラスターに背部に翼状のスラスターがある。

さらに下半身は、足回りの防御を意識していないものの両腰には大型ウェポンラックが設けられていて武装を予め収納できるようにな

っている。

『そういうなって……さっ、さっさと入学前の問題片付けてこい』

「ああ」

今回の目的を改めて言われた俺は、頷きつつもカタパルトに乗った。

「カタパルト接続」

『瀏ちゃん、頑張って勝ってね!』

「ああ!」

幼なじみからの激励を受け、俺はカタパルトから射出……新
たな空へ翼を広げた。

《その輝きを強きものにして……絆を広めてゆく……先
を行く者から続く者へもまたしかり……》

END

《春》【岸边 翔】『序曲の終焉』 序曲の始まり（前書き）

どうもこんにちは。

『IS＜インフィニット・ストラトス＞序曲の終焉』の岸边翔です。

この話は『序曲の終焉』本編と原作の過去の話となります。

以下、本編を知らない方のための簡単なオリキャラ紹介。

・大原・H・O・隼人

本編のオリ主。仕事では『シルバーウルフ銀狼』というコードネームを名乗っている。地球上最大の総合警備会社Outer・Heaven・nadaの社長であり、同じく地球上最大の民間軍事会社OHNの総帥。天候を自由に操るなど、様々なチート能力を持つ。身長196センチ。

・イヴ

隼人が数年前に保護した17歳の女性。トランス変身能力を持つが本編で使われることはない。身長156センチ。

投稿部門は《春》となっていますが、人によっては『春じゃないだろ』と思う方もいるかもしれません。ご了承ください。
では、お楽しみください。

《春》【岸边 翔】『序曲の終焉』 序曲の始り』

「……………懐かしいものだな」

「ぬ…………。ホントに懐かしい物を引きずり出してきたな」

「引き出しの整理をしていたら、たまたまだ」

私が職員室の引き出しを整理していると、懐かしい物を見つけた。
なんの変哲も無い、普通のアルバム。

だが中身は、掛け替えの無い思い出——銀狼との出会いと、共に
過ごした時間が記録されていた。

今となっては同僚だが、昔は違う。

たった1人の、里親だった。

私が銀狼と出会ったのは、今から10年以上前の話だ。

まだ私が14歳——中学1年の夏休みの時に、私と一夏は親に捨てられた。

行く当てがあるわけがなく、少しの荷物と少しの金だけを持って、
一夏と共に豪雨を免れようと森の中で雨宿りしていたときのことだ。

『 たっ助けてくれえっ！ 』

『 誰か！ 誰かあっ！ ！ 』

『 やっ、やめっ—— ああああああああ！ ！ 』

『 ひぐうあ！ ！ うがっ……！ やめてくれ！ 金なら払う！ 有り金全部渡すからよおっ！ ！ 』

命乞いをする声と、それに続く断末魔。

だからといって私は声に振り向くわけでもなく、一夏の隣で両足を抱き、うずくまるようにして座っていた。

当時、幼稚園の年長だった一夏は泣き疲れてしまったのか、寝てしまっている。

もしも今の声が殺人者だったとしてここに犯人が来ても、私は抵抗もせずに殺されるだろう。それぐらい、心身共に衰弱している。

ガサッ……

すぐ近くで聞こえた音に反応して私がゆっくりと振り向くと、そこには黒い何かがいた。

黒い何か——というのは、間違いだろう。2メートル近い、人型の何か。黒い袖には紅い血が滴っていて、ぽたぽたと地面に紅い雫を落としている。

ふと顔を上げて見ると、そいつの——男の口にはタバコが銜えられ、右目には黒い眼帯が付けられていた。

「……………」

「……………」

お互いに口を開かない。

男は私を見つめ、私は男を見つめる。ただそれだけが、長く続いた。男が5本目のタバコを吸い終わると、唐突にしゃがみ込み、私の目の前で見つめてきた。

「……………」

「……………」

再びの沈黙。

男は雨に晒されているにもかかわらず、なんら気にした様子も見せずに雨に打たれている。

恐らく皮製であろうロングコートの中に水が入ろうと、白く膝まである髪が雨と泥でぐちゃぐちゃになろうと、全く動かない。

そうして10分ほど沈黙を過ごしていると、男はロングコートの中に革手袋に包まれた手をつ込み、メモ帳のような物とマジックペンを渡してきた。

メモ帳には『名前』・『年齢』・『使用言語』という3つの単語が書かれていた。

男の視線が何を言っているのか、これが何を意味して、何をさせようとしているのか、私には大體理解できた。

私は自分の名前である『織斑千冬^{おりむらちふゆ}』と、弟の名前である『織斑一夏^{いちか}』を『名前』と書かれた下に書き、『年齢』の下に『14』と『5』、『使用言語』の下に『日本語』と書いた。

男はそれを受け取ると、目を閉じて数秒考え始めた。

「……………」

「……………」

男は私の頭をくしゃくしゃと撫でると、急に立ち上がるなり背を向けて歩き始めた。

（ああ、また見捨てられるのか）

そんな事を考えていると、男は足を止めて1度だけ振り向き……………

…数秒して、再び歩き始めた。

——— ついて来るか否かはお前が決める

私には、そう言っているように見えてならなかった。

一夏をおんぶし、荷物を肩に提げて後を追いかけると、男は私が来たのを確認して私の肩から荷物を取った。

「……………」

「……………」ありがとうございます……………」

「……………」

やっぱり、男は答えない。

ただただ豪雨の中を歩き続け、男のコートについていた返り血であるう紅い液体が全て落ちた頃だ。丁度信号が赤になり、誰もいない商店街の交差点の中で私たちは止まった。男は大量の雨粒を落とし続ける空を見上げ、何かをぼそぼそ……………と呟いた。

その口の動きは、私が何度も親の口から聞いた言葉だった。
鬱陶しい？^{うつとう}

ただそう呟いただけで、雨粒を落としていた梅雨の雨雲が消え、雲一つ無い快晴となった。

まるで魔法か何かのように、一瞬にして。

「……………ここに来るまでで怪我は」

「いえ……………ありません」

「……………そうか。だが、それだけでも幸運だ……………」

男の声は低く、人を寄せ付けないようなものだった。けれどそんな中に、優しさのようなものが感じられた。

男と共に歩き続けていると、2階建ての一軒家の前にたどり着いた。決して大きくも無く小さくも無い、何処にでも見られるような家。

男はこちらを見向きもせず家の鍵を開け、中へと消えてしまった。だが、玄関が閉じた後も、鍵が閉められる音はしない。

入っていいのかわからず玄関先で迷っていると、突然ドアが開き、中からバスタオルを持った男が出てきた。

「風邪をひかれたら困る。早く中に入れ」

「すみません……………」

男は私の頭にタオルをかけるなり、肩を引っ張って風呂場に行くで

あろう洗面所に通した。

いつのまにか男の隣にいた白髪はくはつの女性に一夏は抱きかかえられており、男はどこかに消えてしまった。

「ごめんね。隼人ハヤトは——えと、彼はちょっと不器用だから」

「そんな……ことは」

「不器用なの。着替えは私を出しておくから、お風呂入っていいよ。制服は彼が乾かしてくれるから」

「……………すみません」

「いいのいいの。お風呂から出たらドライヤーの場所とか教えるから、気軽に声かけてね」

「は、はい」

私は紺色のセーラー服を脱ぎ、ブラウスを脱いでいく。

その途中で聞いた話によると、男——女性曰く『隼人』——は大まかに言う所の人助けを仕事にしているらしい。といっても、警察やチャリティーではないようだ。

ただ、気になることがある。

私が男と出会ったのは、明らかにあの殺人現場だ。なのに人助けを仕事に？ 全く意味がわからない。

『シャンプーとかは上の棚にある奴が私のだから、それを使ってね

」

「あつ、はい」

あの人の仕事については謎だけど、1つだけわかることがある。

それは、今のところ私の敵じゃない、ってこと。

この世界、理由も聞かずに道端に捨てられた人を家に誘う人なんてそうそういない。私や一夏が何か特別な存在であればまた話も違うが、今のところそういうわけではない。何処にでもいる中学1年と幼稚園児だ。

私はさつさと髪と体を洗い、女性に渡されたバスタオルで体を拭く。今更ながら見直すと、女性は16・7歳で身長は155くらいだが、それとはかけ離れた胸を持っていた。正直、何を食べればあなるのか同じ女子として気になるところでもある。借り物の服に着替え、ドライヤーで髪を乾かす。

「じゃ、こつちね。彼が待ってるから」

「はい」

髪が乾いたと同時に女性に案内され、リビングへ行く。そこに、先程の男がいた。

男は私を見つけるなり立ち上がり、キッチンへ消えてしまう。私が女性に案内された通りソファに座ると、女性は抱きかかえていた一夏を私の隣に座らせた。

男がキッチンから出てくると、私の座るソファの目の前にあるテーブルに湯飲みとカップを置き、テーブルを挟んで向かい側にあるソ

ファに座った。女性は男の隣に座っている。

「茶は温めにしてある。……………まあ、とりあえずだ」

男がコートの中から数枚の書類を取り出し、何枚か目を通すとゴミ箱に投げ捨てた。

「ここにいるならいい。勝手にしろ」

「隼人、ちゃんと言わないとダメだって。私のときみたいに」

「ぬ……………。詳しい話は面倒だ、大まかに説明する。俺はお前らを保護するが、警察に突^{ボリ}き出したり保護施設に隔離しようというわけではない。お前ら2人が成人するまで面倒を見てやる」

「それって……………養子縁組をする、ってことですか…………？」

「そうしたければしてやるが、それまでは養育保護者——戸籍上関係の無い未成年を保護・養育する者——でしかない。決めるのはお前だ。俺が関与することではない」

男はぶっきらぼうなのか、そう言ってコーヒーを飲み始めた。というか、この人の話によると、つまりここに居させてくれる……………ということなんだろうか。

「……………あの」

「……………なんだ」

「あそこに居た理由とか、訊かないんですか……………」

「……………訊いたところで意味は無い。それに……………訊けばそれだけ、お前らの思い出したくないであろう過去を、引きずり出してしまつだらうからな」

「ごめんね。ちょっと口下手だから。……………あ、学費とか生活費のことは気にしないでいいよ。それに、服だとか必要な物があれば、彼に言ってくれば大丈夫。こう見えても良い人だから」

「？こう見えても？は余計だ」

「事実だよ」

「ぬ……………。そうなのか」

「よく見ると格好良いけど初見だとねえ」

「五月蠅い。……………それよりも」

「は、はい」

男がカップを置き、少し身を乗り出して座りなおす。
女性の目も温厚なものから、真剣なそれへと変わっていた。

「ここに残るか否か。俺はお前の意思を聞きたい」

「私たちとしては放っておけないから、居てくれると助かるんだけどね」

「……………私は……………」

「うん、なあに？」

「……………」

本当に、ここにいてもいいんだろうか。

今日出会ったばかりで何も知らない人の家に、迷惑をかけていいんだろうか。

「俺に迷惑がかかるからと考えているのであれば、今すぐ思考を止めろ。こいつも元はお前らと同じようなものだ。今更1人増えようが2人増えようが、大した事ではない」

「……………私は……………」

「……………」

「……………」

「……………」

続きが出ない。

何を言っているのか、わからない。
人を殺していた人の厚意に甘えるべきなのか、わからない。

「……………い」

「ん？」

「ハッキリ言え」

「……………ここに……………いさせてください」

うつむきながらそう言っていると、男は『やっと言ったか』という風にため息をつき、私の頭を撫でてきた。

褒めるように、詫びるように、誤魔化すように。
ただその手は、革手袋に包まれているはずなのに……………暖かった。

「紹介が遅れたな。俺の名は隼人^{ハヤト}、大原・H・O・隼人だ。仕事では銀狼^{シルバールフ}を名乗っている」

「私はイヴ。イヴじゃないから気をつけてね」

「あ……………はい。織斑千冬です。こっちは、弟の織斑一夏です」

「うん、よろしくね。千冬ちゃんに一夏くん」

「は、はい！」

「そう力を入れんでいい、五月蠅い。——それと……だ」

自己紹介されたときよりも低い、反発を許さない声。
それは、警告にも聞こえた。

「な、なんでしょか」

「この家に居る以上、多少なりとも家事は手伝ってもらうぞ。食器運びでもゴミ出しでもいい。己ができることをやってくれればな。あと、2階の部屋が1つ空いているから、自由に使って構わない。必要な物があれば言え。極力そろえよう」

「それじゃ、案内するね」

「あつ、はい」

女性——イヴさんに引つ張られ、廊下にあった階段を上がる。

案内された部屋は2階の一番左で、こんな個室を貰っていいのだろうかとためらってしまうほどに広かった。

元々部屋には机・椅子・タンス・テーブル・ベッドが用意されていて、今のところこれといって必要な物はなさそうだ。

「ごめんね、隼人ったら口が悪くて」

「いえ、拾ってもらった身ですし……」

「それは気にしないでいいの。気にすると、逆に隼人が困るから。それに、さっき言ってた『家事を手伝え』っていうのも、将来私たちが社会に出ても困らないようにって、考えてくれたのことだから」

「そう……なんですか？」

「ああ見えて優しいんだよ、隼人は。ただ、その優しさに境界線が無いのがちょっとくやしかなあ」

「……………優しい、ですか。確かにそうみたいです」

「んふふ。惚れちゃった？ ダメだよ！。隼人は私のだから」

「未来永劫そういう予定はありません」

「そっか。でも隼人に惚れるのも時間の問題だよん」

イヴさんはさつさと部屋の説明をし終わると、「最後につ」と言つて人差し指を自身の口に添えた。

言葉は軽い口調だったが、それには確かな思いと恐怖が混ざっていた。

「ここの隣の部屋——左から2番目の部屋——は絶対に関ヶやダメだよ。普段は鍵が掛かってるけど、鍵が開いてたからって中を見たらダメ。たぶん……千冬ちゃんはこの中に出ることになるから」

「怒られる、ということでしょうか」

「ううん、怒られないよ。私が見たときも、何も言わなかった。でも……千冬ちゃんが、自分からこの家を出て行くと思う」

「……………そう、ですか」

私には、どういう意味なのかが全くわからなかった。

私が見たらここを出たくなる？　こんなに暖かそうで、静かな家なの？

本当に、この人たちは理解できない。

「心を強く持っていれば、そうはならんだろうがな」

「あつ、隼人。女の子の部屋にノック無しではいるのはマナー違反だよ」

「以後善処する。制服は乾かしておいた。そこらにかけておけ」

「す、すみません」

いつのまにか現れた男——隼人さんからハンガーに掛けられた制服を受け取り、窓の上にあるカーテン用のレールに引っ掛ける。すると、隼人さんが「晩飯の準備ができた。降りて来い」と言い残して消えてしまったので、私とイヴさんは後を追いかけた。

こうして私と一夏は、新たな人生を歩み始めた。

隼人さんは私の質問には、基本的に全て答えてくれた。

仕事は何をしているのかと訊けば、「総合警備会社で働いている」と答えてくれた。

普段ずっと家に居るので、勤務時間は？ と訊けば、「その日によってまちまちだ」と答えてくれた。

まあ、時々5日ほど家を空けたりしてはいたが。それでも、朝昼晩全ての御飯を作り置きしてくれるか、イヴさんが作ってくれた。

それに毎晩、全員の安否確認の電話までしてきた。心配のしすぎだと思う。

一夏が小学生になり、私が中学2年になって隼人さんの負担も増えたはずだが、それでも文句の1つも言わなかった。

いつも無表情で無愛想で、なのに優しくて……不思議な気持ちだった。

私が一度、友達と一緒にショッピングへ行きたいと言った時も、「まあ、そういう歳か……」とだけ言って、必要な分をくれた。毎月小遣いは貰っていたが、初めて前借したその時に言われたのはたったひと言だった。

——？己の行動に後悔しないようにな？

（ああ……この人は私の未来も考えてくれているんだな）

私が、隼人さんに絶対の信頼をおいたのは、そのときだった。

同時に、私が隼人さんに写真を撮ろうと誘ったのも、その頃だった。

「記録を？」

「はい。今まではイヴさんと一緒にとっていたんですが、隼さん
もどうかと思って」

「いや、すまないが断らせてもらう。後世^{あと}に残ってしまう記録は苦
手だ」

「良いと思うけどな。写真なんて初めてでしょ？」

「あんな、もし写真を見られたら……」

「あ、いえ、無理にとは」

「……………ええい、諦めるしかないのか。さっさと取るぞ」

元々私が写真を——記録を残し始めたのは、隼人さんに拾われた
直後だった。

私が大人になった後でも、今まで傍に誰が居てくれたのを忘れない
ように。銀狼さんとイヴさんとの思い出を忘れないように。恩を
忘れぬように。私と一夏が隼人さんに拾われた夏から10ヶ月経つ
た今でも、月に2度のペースで記録を残していた。

それから、私と一夏とイヴさんの3人以外に、もう3人増えた。
一夏の友人であり、その姉——篠^{しの}ノ之^の簀^{すい}と篠^{しの}ノ之^の束^{たばね}。それと、養^ち
父である隼人さんの3人だ。ただ、隼人さんは写真の隅にいて、視

線を反らしていたが。

理由はわからないが、一夏が学校で問題を起こしたときも、隼人さんはなんら気にした様子も見せずに謝りに行った。

一夏は喧嘩をしたようで、怪我をしたという子供の親に何を言われようとも、隼人さんは顔色1つ——本当に、眉1つ動かさずに、無表情で謝っていた。

そして、一夏が小学4年生——私が19歳のときに、問題が起きた。私の友人である篠ノ之束がISという物を開発し、私に日本を守れと言ってきた。そう、後の『白騎士事件』のことだ。

私は仕方なく、されど義務のように感じ、IS『白騎士』で約3万発のミサイルの脅威と戦った。

だが、そのとき見てはならぬものを見た。——ミサイルを撃ち落さんとしている軍人の中に、隼人さんがいたのだ。

ミサイルの3分の2は軍の人が迎撃したが、残りは間に合わなかった。

私は音速で飛び、ミサイルを切り、召還した荷電粒子砲で撃ち落そうとした。そこに現れたのだ。隼人さんが。

真っ黒い機械のような鎧で全身を隠し、1丁の銃を持った隼人さんが。

残っていたミサイルの半分以上を隼人さんらしき人物が撃ち落とし、私を攻撃してきた。？お前は何をしている？？——そう言うてくるかのように。

私は逃げた。

ただ、怖かった。

それでも、逃げられなかった。

強力な1撃を食らい、装甲が無くなり、ぼろぼろの状態で逃げた。誰もいない家に戻った私は、すぐに自分の部屋へと行こうとした。

階段を駆け上がり、ドアノブに手を掛けたときだ。

(……………あの部屋が、開いている……………?)

イヴさんに注意された部屋のドアが、僅かに開いていた。

私は興味を引かれ、何かに取り付かれたようにしてその部屋に入った。

部屋は暗く、電気を付けなければ何も見えなかった。電気を付けてみると、そこにあったのは

「……………これ……………は……………?」

黒く光る、人工の殺意。

一瞬で人を殺してしまう、殺戮用の物であり、日本では本来所持の
できないもの。

銃

その、山だった。

血の付いたナイフや、箱から溢れる銃弾の数々。

「なんで……………まさか、本当に……………」

私は信じたくなかった。

私と一夏を拾ってくれた人が、本当にあの時、人を殺していた犯人
だということを。

足がすくみ、腰が抜け、ただただ恐怖に飲み込まれていたときだっ
た。

「……………なにをしている」

「——っ！」

振り返ったそこには、あの人がいた。

5年前から何一つ変わらない顔で、全くの無表情を貫いていたあの人が。

「いつ、嫌だ！ 殺さないでくれ！」

私は這い蹲るようにして部屋へ逃げた。

背中を壁に着け、IS用の刀——雪片を展開し、その切っ先をあの人に……隼人さんに向けた。

「……………ああ、この部屋を見たのか」

「貴方はどうして私と一夏を拾った！ 教えろ——！」

がちがちと震える体を抑えながら、私は始めて隼人さんに向かって言葉を荒くした。

敬語さえ忘れ、ただ殺されたくないという恐怖だけがあった。

「私たちを成長させてから殺すためか！ それとも殺しの道具に使うためか——！」

「……………まあ、そういう反応をされないとは思わなかったが……」

「くっ、来るな！ 来たら殺す！ 脅迫じゃない！ 脅迫なんかじゃないからな！！」

「……………そうか」

隼人さんはため息をつき、私が瞬きをした瞬間——私の頸動脈に、ナイフを当てていた。
3メートル以上離れていたというのに、一瞬で雪片をよけ、ナイフを抜いて近づかれていた。

私は隼人さんに、かなりの武術を教わっている。バリ・トゥード、カポエラ、マーシャルアーツ、エスクリマ、etc……。その全てを無視して、隼人さんは私の目の前に居た。

「近寄るなああああ！！」

「ぬっ——見てはならんッ」

私が咄嗟に雪片を横に薙ぐと、ある物が宙を飛んだ。ぼとつ、と鈍い音を響かせたそれは、隼人さんの左手のようにも見えた。
同時に隼人さんが私を抱き、胸に押し付けてきた。

「俺がお前らを拾ったのは殺すためでも利用するためでもない。俺もお前らと同じ親の居ない存在だ。確かに仕事を隠していたのは俺

「が悪い……だがな、自我を見失うな」

「放せ！ 放してくれ！」

「大人しくしろ織斑千冬ッ！！」

「——っ！？」

動けなかった。

隼人さんの声を聞いた途端に、全身が硬直した。

この人の言うとおりにしなければならぬような、絶対的強制力。それを、この人は持っていた。

「……俺は確かに人殺しだ。だが俺はお前らを殺そうとも、お前らを利用しようとしているわけでもない。ただ幸せになつてほしただけだ……」

「じゃあ……なんで私たちを拾って……」

「俺は——俺の仕事は、生きている子供全てに未来をあす与えることだ。紛争で悲しみ、犯罪で悲しみ……親を失くして悲しむ、子供に……」

でも、この人の言葉は強制力だけじゃなかった。確かな温もりと、優しさも持っていた。

「お前は、OHNという組織を知っているな……？」

「……はい。束から、あそこは化け物集団だ、と」

「フツ。良い例えだ」

「まさか、そこで働いて……」

「ああ。OHNの長——総帥だ。お前にあの部屋を見せなかったのは、お前がこちらの世界に来て欲しくなかったからだ。争いを知らず、平和に暮らしてほしかった」

「……………」

なんてことしてしまったんだろうか。

この人は——隼人さんは、私のことを思ってくれていたのに。未来を考えていてくれたのに。それだというのに……

……………だというのに！

私は、その思いを踏みにじってしまった。

「……………すみま、せん……………」

「謝る必要は無い。隠す俺が悪いのだ」

隼人さんは私から離れると、床から灰色の塊を拾い、コートの中に隠した。

——手

だった。

紛れも無い、隼人さんの左手。
それが、はっきりと見えた。

「どうした、なにか付いているか」

「……………て」

「て？」

「……………その……………ひだ……………ては」

「……………ッ……………。左手がどうした。ほれ」

そう言つて隼人さんが腕を見せてくる。

そこには確かに左手があつて、私は驚きのあまり飛びついた。
左手だ。いつものように革手袋に包まれた、左側の手。

「……………幻覚を見るほど疲れているのだろう。今日はもう寝ると
いい」

「え、あつ——」

私は軽々と抱き上げられ、ベッドに寝かされた。
——いつもこうだ。

私が少し調子が悪かったりすると、過度に心配してしまう。

イヴさん曰く「隼人は心配性だから」ということらしいが、何故医師免許を持っている人間が心配性なのだろうか。普通に診れば良い話だと――……………そういえば。

私はふと、自分の胸を見た。隼人さんに拾われた5年前は何も無かった場所に、今ではこれでもかという膨らみがある。イヴさんと同じくらいだろう。

そのせい、なんだろうか。

「風邪だけはひいてくれるなよ」

「は、はい……………」

隼人さんが静かにドアを閉めて出て行くと、ドンッ！ と何処かの壁を叩く音が聞こえた。

それに続いて、ぶつぶつと聞こえるかすかな声。

『クソッ……………。俺は、千冬を巻き込まないと決めたはず……………！』

『こつなっちまったモンは仕方ねエ。諦める』

『ッ……………！俺は、これほどまでに無力なのか……………！』

盗み聞きする気は無かった。

だから、この会話は――誰と話していたのかはわからないが――聞かなかったことにしようと、心の中で誓った。

それからしばらくして、ISが競技として定着した頃だ。

私はモンド・グロッソで優勝し、それを観客席で見ていた隼人さんは「頑張ったな」と、ぶっきらぼうに褒めてくれた。

家に帰り、私はあることを決行した。

元々、モンド・グロッソで優勝したらと決めていたことだ。

私は賞金の100万を、全て隼人さんに渡そうと思っていた。簡単な理由だ。今まで一銭も払っていないのに、ずっと育ててくれた。そのお礼にと。

私は彼が帰ってくるのを待った。一夏は隼人さんに料理や家事を教わっていたので、イヴさんと共に晩御飯を作っている。

数分して隼人さんが帰ってくると同時に晩御飯の準備もでき、食事となった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

特にこれといって、『食事中話してはいけない』や『テレビを見てはいけない』というルールがあるわけではないのだが、隼人さんは私たちが拾われた当初に1度だけ『口に飯が入っているときに喋るな』という至極真つ当な常識だけを口にし、それ以来何故か食事中に会話はあまり無い。

理由といえば……………まあ、異様な雰囲気をかもし出している隼人

さんという存在なのだが。

兎に角終止無言で食事が終わり、一夏とイヴさんがテレビを見ていて、隼人さんが無表情のまま黄色い町^{タウ。ページ}の電話帳なみに分厚い小説を読み、私とその対面側に座っていた。

「そういえば、イヴ姉さんは学校で何してるの？」

「ん？ 私？」

「うん。学校のこと聞いたこと無いから」

「んふふ」。なんだろねー」

「じゃあ、今いくつ？」

「むむつ。女性に歳を聞くとはやるなあ」

確かに、私もイヴさんのことは聞いたことが無い。

隼人さんに拾われたときから一緒に居るが、成長する様子も無ければ歳を取っているようにも見えない。まるで、隼人さんとイヴさんは時間が止まっているみたいに。

「しいて言うなら、『ある時』が来るまでは永遠の17歳ってところかな」

「そ、そうなんですか？」

「だから隼人も、『ある時』が来るまでは永遠の27歳だね」

「俺の場合は理由が違う」

「同じようなものだよ。結局は」

「……………まあ、そうだな」

隼人さんは視線を動かさずに、淡々と答えた。

2人の言っている『ある時』というのは見当も付かないが、隼人さんに話しかけるなら今しかないだろう。そうでなければ間が持たない。

「あの、隼人さん」

「……………なんだ」

「少し、お話が」

「……………それは、ここで平気か」

「はい。大丈夫です」

「……………そうか」

隼人さんは本を閉じ、それで？ と切り出した。
一夏とイヴさんも特に気にしている様子は無く、お笑い番組を見て

いる。

「……今まで、私と一夏を育ててくれて、本当にありがとうございました」

「……………それは構わんといっただろう。本題は」

「はい……。その、少しばかりですが、お礼を」

封筒に入っている賞金の100万をテーブルに置くと、右手に持ってそれがなんなのかを確認し——深い、ため息をついた。

（やつぱり、5年以上も世話になっていて100万では足りなかっただろうか……）

私は不安だった。

足りん、などと言われたら、恐らく私は無理にでも仕事を増やしてしまうだろう。

それぐらいこの人には恩を感じているし、その恩を返したい気持ちがある。

「……………千冬」

「はっ、はいっ」

「……………お前、右と左、どちらを選ぶ」

「え？ あっ……………右……………です」

「……そうか」

「あの、それが――」

それがなにか？

そう言おうとした私の言葉は、隼人さんの言葉で遮られた。

「馬鹿かお前は」

「……………へ？」

ぽすっ。

隼人さんはそう言うと同時に、右手に持っていた封筒を私の頭の上に置いた。

正直、意味がわからなかった。

何がしたかったのかもわからなければ、何故言われたのかもわからなかった。

「次にこういうことをしてみる。殺すぞ」

「――っ!？」

ドッと、私は冷や汗をかいた。

たった一言、軽い調子で言われたその言葉に反応して、汗が大量に出た。

体にまわり付くインナーが、非常に気持ち悪い。

「俺はお前らに恩を売ったつもりは無い。故にこういったものを返してもらおうとも思っていない。つーか返すな邪魔だ」

「で……………ですが……………」

「それともなにか。お前は俺に恩を返したいのか」

「そ、それはそうですけど……………」

「まあそれはいい。恩を返すのは常識だ。だが逆に、お前はこれを今失って平気なのか」

「……………いえ……………」

「なら渡すな。第一そうでなくとも俺は受け取らん。自分で管理しろ」

「ですがっ!」

「……………聞こえなかったか? ならもう1度だけ言おう。?自分で管理しろ?青二才」

私は、それ以上言い返すことができなかった。

ただ単純に、言葉が見当たらなかった。ただ単純に、隼人さんという存在自体が、これ以上無く怖かった。

今まで何があるかと怒らず、ただただ自分の責任にし続けていた隼

人さんが、今は——明確な怒りを持って言葉を発していた。
その異様な空気を感じ取ったのか、一夏とイヴさんがこちらを見て
いる。

私は平然を装い、咳払いをした。

「隼人、もう少し言い方があると思うけど」

「黙っている。俺はこいつと話している」

「……っ。わかった」

「ちっ、千冬姉！ 義父^{とう}さん！ 喧嘩はやめて！」

「フッ……喧嘩か。そうだな。この話はやめにしよう。」
——

千冬

「……はい」

「今後、この話はするな」

「………はい」

「それと一夏」

「えっ？ あ、うん」

「喧嘩はしていない。ただ少し、考えがすれ違っただけだ」

「そ、そうなの？ ならいいんだけど……」

「…………馬鹿な弟が私の心配をするな」

「……はい」

私は苦し紛れにそう言い、隼さんに軽くお辞儀してから部屋へ逃げた。

あれ以上隼さんの前に居るのが、たまらなく辛かった。
息苦しくて、怖くて、今にも殺されそうで。

もしも一夏やイヴさんの仲裁がなければ、恐らくその場の空気に耐えきれずに吐いていただろう。

それぐらい、重厚で濃密な、嫌な空気だった。

「……………ごめんね。隼人って、意地っ張りだから」

「い……………いえ……………」

「……………はい、お水。飲んで少し落ち着いたほうがいいよ」

「すみません。いただきます……………」

部屋に入ってきたイヴさんからコップを受け取り、中に入っていた水を一気に飲み干す。

私は椅子に倒れるように座り、イヴさんがベッドに腰掛ける。

「隼人はね、慈善事業で子供を保護してるわけじゃないの」

「OHNの、理念と聞きました……」

「まあ、それも間違いではないんだけど……。私も拾い子なのは、知ってるよね」

「はい。10歳のときに拾われたと」

「うん。実を言つとね、隼人も私たちと同じ、天涯孤独の身だったの」

「それも、聞きました」

「あ、結構知ってるんだね。じゃあ、隼人がどんな存在か、知ってる？」

「存在、ですか？」

どんな存在かと聞かれても、私と一夏にとって里親だ。

仕事ではOHNの社長——総帥をやっていると云っていたが。

「簡潔に言つと、親を亡くした——あるいは親に捨てられた子供ほぼ全員の親なんだよ、隼人は」

「ほぼ全員って、冗談は「冗談じゃないよ」………え？」

「隼人は自分みたいに悲しむ人を見たくないからって、OHNを作ったの。それと同じ。寂しい思いをさせないために、隼人は徹底的に子供を保護してるの」

「そんな、資金的にも足りるはずが」

「……どうして、隼人は社長なのにひっそりと暮らしてるか、知ってる？」

「そんなの強盗とかを避けて——っ！」

ここまで言っつて、私は理解した。

この家は決して大きくも無く、小さくも無い。食事が貧しいわけでもない。でも、職業柄を考えると明らかに不釣り合いなのだ。それは多分、隼人さんは殆どのお金を、そっちに使っているからなんだろう。

「今地球上にある97%の保護施設は、全部OHNで賄われてるの。他にもワクチンや地雷除去、発展途上国への医学支援や技術支援。全部、隼人がやってるんだよ」

「……………じゃあ、なんで私を受け取らないで」

「将来何が起こるかわからないからだよ。その仕事上OHNが倒産する確立は高い。そうしたら、せめて千冬ちゃんたちだけでも生きていけるようにって、そういう計らい」

「そんな自己犠牲をしなくたって！」

「——隼人はなんでもかんでも自分を犠牲にしちゃうんだよ！私だってやめさせたい！もっと自分のために生きて欲しいって思ってる！ だけどさ！ …………… 隼人は、できないんだよ。自分だけが悲しめばいい、自分だけが傷付けばいい。それしか……考えられないんだよ、隼人は」

イヴさんの声は、凄く悲しそうだった。

そうだ。なにも、私だけが恩を返したいと思っっているわけじゃない。イヴさんだって、本当は恩返しをしたいはずなんだ。

だというのに、私はなにを……………

「……………まあ、でも、そんな隼人が好きなんだけどね、私は。だからこそ傍に居て、守りたいのかな」

自己犠牲主義で、この世の人とは思えないほど強く、秘密が多くて、ぶっきらぼうで、不器用で、みんなに優しく、みんなに厳しい。

そんな事を考えていると、ふと昔の事を思い出した。

それは、今のようないヴさんと話していたとき—— 私たちがこの家に来た日のことだ。

？隼人に惚れるのも時間の問題だよ？

——ああ、これは確かに——

惚れてしまいそうだ

「……………い」

「……………う」

「……………い、千冬……………おい！」

「うえっ!？」

「やっと起きたか……………。職務中の居眠りも大概にしろ」

「え？ あ、ああ……………」

私が珍妙な奇声を上げて起きると、私の目の前には隼人さん——
いや、銀狼^{ハヤト}がいた。
どうやら、私は居眠りをしてしまっていたらしい。

「ほら。今日の弁当だ」

「……………すまない。私としたことが」

「いや、構わんが……………。あまり根は詰めるなよ」

「わかっている。というか、お前は私のなんだ？ 一々世話を焼いて……………」

「言つてやろうか、この場所で、この声量で」

「ん？——っ！？」

ふと銀狼シルバールフの言葉に違和感を感じて辺りを見回してみると、ここは職員室で、私と銀狼は周りの職員にジト目で見られていた。

私は急に恥ずかしくなり、誤魔化すようにして咳払いをする。

もし私と銀狼の関係を言われてしまえば、変な目で見られるに違いない。銀狼は27歳という事になっているので、この場で「養父と養子だ」などと言われれば冗談として流されるか否かだ。どちらにせよ私は醜態しゅうたいを晒すことになる。

「まあそうだな。俺と千冬は——」

「いつ、言つな！ 言つなあああああ！！」

「ゴフッ！？」

銀狼の鳩尾に拳を叩き込み、肩で息をする。
危なかった。もう少しで大変なことに。

「……………あ、あの〜」

「ん？ ああ、山田先生。どうした」

「もしかして、恋人どうっ!？」

山田真耶の鳩尾にも拳を叩き込み、気絶させる。

キッ! と周りを睨むと、全員目を反らして仕事に戻った。

「まったく……。少しは手加減を覚える馬鹿が。おい真耶、生きてるか、おい」

「ら……。らいひょふれす……。……」

「駄目だコイツ。ああクソッ、千冬」

「なんだ」

「代わりに1組で起きている一夏争奪戦争を止めてこい。俺はこいつを第1保健室に運ぶ」

「仕方が無いな」

「お前のせいだろうが……。……」

「ふん。お前と私の仲だろう?」

「……。……誤解を招く言葉だが、その通りだ」

クッククク、と微かに笑う銀狼の隣で、私もふふふと微笑した。
私は昼食を食うのを諦め、職員室を後にした。

だが私とて、銀狼に感謝している。

あいつがいたお陰で、今の私と一夏が居るのだからな。
礼を言う、銀狼^{ハヤト}。

——いや、義父^{とっ}さん。

「……………千冬」

「なんだ？ お前から話しかけるとは珍しいな」

「明日は非番だったろう。一夏たちを呼んで、花見でもどうだ」

「花見……花見か。そうだな。場所はあるのか」

「IS学園で充分だ。起きたら真耶にも伝えておこう」

「そうだな。では、頼んだぞ」

「任せておけ」

私は上機嫌で階段を上り、2階にある1年1組へ向かった。

いつも気遣われている礼に、なにか料理でも作ってやろう。一夏にわけを話すのは癪に障るが、それでも親孝行をしてやりたいと思う。

誰だって、好きな相手に手料理を食わせてやりたいものだろう？

《自由》【リイン】『短編だからって、ネタに走ると思ったたら大間違いだ！』

どうも皆さま、こんにちは

“IS>インフィニット・ストラトスくゝあの神による介入物語”
”を執筆しております、リインと申します

テーマは《自由》という事で、私が書いている作品の要素を凝縮したような形で、本編上の事も踏まえて書いてみました

あと、シリアスな展開が好きで、本編上でもシリアス面が多いので、今回はバトルをメインとした内容となっています

独自解釈や設定が多く、なおかつ稚拙な文章表現で大変読みにくいモノになっているかと思えます

どうか、温かい目で見て頂ければと思いますので、どうぞごゆっくりご覧ください

主要登場人物

《グレイ・ステイン》

今作の主人公。世界で二人目のISが使える男で、19歳だがIS学園に通っている。元は“ソレスタル・カンパニー”という企業に所属していた

その実態は、1京年という年月を生きた“神様”であり、学園生活

を楽しみたいという理由で、ISの世界へと足を踏み入れる。情報
操作を行って戸籍や履歴を捏造し、IS学園に通っている。戦闘狂
な所がある

本当は“神をも超越した存在”だが、今は神を名乗っている
専用ISは、第3、9世代型の“ソレスタル”。未だに第一形態

《織斑一夏》

原作の主人公。今作では、 그레이の親友という間柄となっている。
あと、箒やセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラの五人娘にフ
ラグを建てている

更に、ある異端な力の使い手という設定になっている
専用ISは、第四世代相当、“白式・雪羅”

《篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳・鈴音、シャルロット・デ
ユノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ》

原作でのヒロイン達。本編では、ほぼ空気の扱いです
今回、彼女たちもある意味活躍させます

《布仏本音》

原作ではサブとモブの中間のような立ち位置のキャラクター。今作
でのメインヒロインとなっています

《自由》【リイーン】『短編だからって、ネタに走ると思ったら大間違いだ！』

——そして神は言った……………こういった祭典の時に限って、本気を出してみたり、いつもと違った事をやってみたりする……………そして、それが行き過ぎた結果、首を絞めることになったり、すごく大変な目を見たり……………死ぬ思いをしてしまったたり、と……………

……………

これは、とある物語的一幕。強い日差しが眩しくなった七月の下旬、学校を通う者にとっては、夏休みの期間といえる日々の、ある日の事……………

IS学園

そこは人工的に作られた島の上に立つ、日本国が設立・運営をする、世界で唯一のISの操縦者育成学校である。その敷地は、学園とは言い難い程広大であり、また一つの島全体が学園なので、おそらく世界最大の広さを持っているであろう

「ギイイイインッ！！」「ガキイイイインッ！！！」

「グッ……………うわァッ！！？」

「おいー夏ッ！！ 腰の力が抜けてきているぞッ！！！！ しっかり

力を入れて受けるッ！！！！」

「ッ……お、おうッ！！！」

「ガキイイインツ！！ ガキンガキンツ！！ ガキイイイイイイイイイイインツ！！！！！！！！！！」

その敷地内には、広大が故に、景観を配慮しての樹林が広がっている。そこでは、木漏れ日で読書をする人もいれば、日向ぼっこをしたりする人もいたりする……まあ、噂だけど

「どうした！！ふんばりが足りんツ！！！」

「ガキンガキンガキンツ!!!」

「グウウウウ……ッ！！！！！」

「ガキイイイイイイイイイイイイッ！……！！！！！！」

.....で、その樹林では、普段ならあり得ない音.....金属同
士が叩き合っているような音が響きわたっている。その発信源には、
“世界で二人しかない、女性にしか扱えない兵器‘IS>インフ
イニット・ストラトス<’を使用出来る男子”、“織斑一夏”と、
“もう一人の、ISが使える男”、“グレイ・ステイン”がいた……

ちなみにだが、二人とも動きやすいジャージ姿だ

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！！！！」

「ガキイイイイイイイイイイイイイイイイイインッ
!!!!!!」

「ぐああッ！！！！？」

そしてその二人は……
“ 剣を交えていた ”

「う……………」

「クルクルクル、トス」

「ふむ……………7分32秒。まあ、合格ラインかな」

ええ、皆様、どうもこんにちは。織斑一夏です。ISが使える男子です……………」

「はあ、疲れたあ……………」

「うゝむ。最初のころに比べ、上達してはいるみたいだなあ」

「そうなのか？……………あんまり、実感が湧かないんだけどなあ」

「クツクツクツク。まあ、やってる事が事だし、あまり分かりにくいかも知れんがな」

あと……………コイツ、もう一人のISが使える男子、 그레이・ステインの“弟子”です

さっきまで俺がやっていたのは、“攻撃を耐えてみる”って言うモノで、“鍛錬”の一環らしい。俺は攻撃を受け続けるだけなんだが、これが肉体的にも、精神的にもかなりきつい。コイツの一撃一撃は凄く重いし、強い。それを両手で受けとめろって言うんなら、もつと耐えられるんだが……………」

「（俺のコレが、“片手持ち”用なんだしなあ……………」

俺が使っている剣は、片手で持つ事を想定されている形状で、コレが中々使いにくい。まあ、俺のISである白式が“雪羅”になって、

左腕に武器が装備されたから、片手で雪片を扱わなきゃならなかったから……ちょうどいいと言えば、良いんだけど………

まあ、だからだ。コイツの両手持ちの剣の一撃一撃を、片手持ちの剣一本で捌ききらなければならないという、意外と過酷な鍛錬である

「で、一夏………さっきの7分32秒の間に、攻撃出来るような隙はどれくらいあった？」

そして、次にはこの質問が待っている。その受ける鍛錬をしている最中に、俺がコイツを攻撃できるチャンスはどれくらい有ったでしょうか？ って聞いてくるのだ。これが、精神的に参る理由である

「えっと………27回か？」

「うゝん………残念。正解は25回でした。まあ、ニアピンだから、よしとするか」

「ほぉゝ」

良かった………もしこれが大きく外れていたら、後で重さ100キログラムの木刀（あの細くて小さい木刀の、一体どこにそんな質量が有るんだろうか？）を使つての素振りを100回。カケル、その差分。を、こなさなければならなくなってしまうから………アレは地獄だったよ

「………つと。そろそろ、お前の自称コーチ達との約束の時間じゃないのか？」

「ああ？ うわッ！！？ ヤベえ！！！」

不味い、遅刻する！！ 下にISスーツを着ておいて正解だった！！！！

「ホラ急げよ。女の子の待ち合わせに遅れる男は、馬に蹴られて殺されるぞ」」

アイツは気楽でいいなあ……………って、これじゃあマジで遅れるッ！
！！！！

「あ、そうだ。おいー夏！！」

「なんだ！？」

「チャキッ」

「癒しの光よ、在れ。“ケアル”」

「ポウ……………」

「おお」

アイツが自分の剣をこっちに向けると、体に薄い緑色の光が覆われていく。すると、体中に溜まっていた疲労が一気に取れていき、鍛錬で減っていた体力が一気に回復していった

「頑張つて来いよー」

「ああ、ありがとう！！“マスター”ッ！！」

「ダッ！！」

そんなこんなで、俺は箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラと待ち合わせしている第4アリーナへと走って行く

ああ、そうだ。言い忘れた。あと俺、“キープレード使い”です



それから、暫くして……第4アリーナ、観客席

「……………タツ、タツ、タツ、タ」

そこに、白い筈の制服を黒く染め上げ、まるでコートのように丈を伸ばした改造制服を身に纏う、“男”が現れた

「おおおお、やってるやってる」

どうも、主人公の“グレイ・スティン（偽名）”だ。“世界で二人目の、ISが使える男”ツス。あと、“神様”ツス。それと、一夏クンに“キーブレード”を与えた“キーブレード・マスター”ツス……………あ、あと“ナンパ師”ツス

「よつと」

「ドン」

「ふう……………にしても、頑張るねえ。うんうん、これも青春の一ページってか？」

さて、神様である俺がなぜこんな所にいるのか。それはまあアレだ、学園生活を満喫したいからと、青春を謳歌したいからだ！！その

為に、色々と神としての情報操作とかして、こうしてこの世界、
“IS>インフィニット・ストラトス”の世界に来たって訳だ。いやいや、毎日が楽しい日々よ？ 一夏クン弄ったり、その周りの女の子弄ったり、レベル高い生徒たちにナンパしたり……………うん、楽しい♪

そこで、“キーブレード・マスター”として、一夏に“キーブレード”という異端の力を与えてしまい、彼を弟子に取ったんだ。んで、さっきまで鍛錬をしていたと言う訳さ

え？ 何時一夏クンを“キーブレード使い”にしたんだって？ ああ、それはだな。“福音事件”の時に、ちよいと手を出しちまってる。そんな時に、な……………

ま、だからだ。俺はその責任として、彼をいっぱしの戦士に育て上げる使命を得たのだ！！ 魔改造という行為にも、興味はあったからね♪ まあ、彼を育てるのも、中々面白いから、良いけどねw

「あ、 그레이くん!!」

「んお？ おお、癒子ちゃん♪ それに相川にナギちゃんも」

この子たちは、俺と同じクラス、一年一組のクラスメイトだ。つまり、一夏クンとも、同じクラスという訳だ……………あれ？ この子達がいると言う事は

「 그레이くん!!」

やっぱりか

「ボッフ」

「うおッ!?!? って、抱きつくな“本音”ッ!~!」
「えへへへ、ごめ〜ん」

まったく、コイツは……………ああ、そうだ。コイツの説明をしなければな。こいつは“布仏本音”。原作やアニメでは、“のほほんさん”と呼ばれている奴だ……………ああ、そうだ。一つだけ言っておく。なぜか知らんが、俺はコイツに“フラグ”を立ててしまってた。それでか知らんが、やたらと俺に着き纏ってくるんだよなあ……………フラグを立てる気、無かったのに(T-T)

「……………で、お前は どうしてその改造した制服を更に改造してんだ?」
「ん〜? いやあ、ちよつとした気分転換で」

ああ、そう……………IS学園では、制服の改造が認められている。世界各国から生徒が来るので、文化や宗教の尊重の為らしい。故に、こうして俺も改造して黒いコート状にしてるんだが……………

本音も、袖が長く、ダボダボした感じに改造しているが……………それをコイツは、更に手を加え、“俺と同様に白い部分を黒くし、黒い部分を白”にしていた

「なぜ俺と同じように制服を黒色にしている」
「いやあ〜……………なんとなく〜?」
「なんとなくで、そんな色にするか? 普通」

一応、だが……………改造と言っても限度はある。俺もこれに改造した時は、色を白に戻せと、織斑先生に言われ……………今は、なんとか許可をもらって着ている。だが、コイツの場合は許可をもらったのやらか

「お嬢様に頼んで、生徒会長権限で許可してもらいました」
「ビシッ！」

おい生徒会長。そんな事していいのか？ っていうか、どこまで会長の権限ってのは強いんだよ。確かさあ、原作だとアレじゃね？
一夏クンと強制的に相部屋にしたり、一夏クンを無理やり部活動に入部させたり………はは、さすが、生徒会長………

「はあ、もういいや………」

そんなこんなで、俺は一夏クン達が訓練をしているアリーナの方を見る

「って、うわぁ………アレは酷いな」

そこでは、悲惨な光景が広がっていた

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

アリーナ内、一夏達がいる場所

……はつきり言わせてくれ。これはなんて公開処刑だ？

「どうした一夏……！ いつまで防御に徹しているつもりだ……！」

「ぐう……隙が、まったくねえ………」

「ギイイイイイインツ……！ ギイイインギイイインツ
……！」

ここにきてからすぐに、俺と“ラウラ”は、組み手を始めていた。
ただ、ラウラとだけなら、良いんだが………

「ほら、行くよ……！ 一夏……！」

「「ダダダダダダダダダダダダッ……！」」
「クッ……！」

そこに、“シャル”の援護射撃が加わるだけで、このありさまだ。
俺は、この二人から、袋叩きにされているからだ

理由は、遅刻。途中で女子達が群がって来てしまい、逃げ切れずに
拘束。そして、遅れてしまった。その罰として、俺はシャルとラウ
ラのタッグと模擬戦をやらされているのであった

「（遅れた俺が悪いのは分かってるんだが、コレは酷く無いか……！
？）」

二人のコンビネーションは、抜群だった。ラウラが腕に付けられた
レーザーブレードで接近戦を仕掛ける。そして、その時のラウラ隙
を埋めるかのように、シャルの援護射撃がそれをカバーする。反撃
なんて、出来る訳がなかった。AICを使ってきていないのは、ラ
ウラなりの優しさなのかもしれない……アレが使われたら、さす
がに死ねる

「ハアッ！！！」

「ババババババッ！！！！！」

「ドドドドドドッ！！！！！」

「うゝん……………もう少し左じゃない？」

「そ、そうだな……………むう、中々難しいモノだな」

「箒さんの“雨月”は、刀型ですから、わたくし達とは違った体制にならなければなりません……………」

「そうよね。結構狙い撃ちとか、難しいタイプなのかも」
「すまないな」

「謝る事なんてありませんわ。むしろ、第四世代の力を、こうして間近で見られるのですもの」

「なかなか興味深いのよねえ、その紅椿」

「そ、そうなのか……………よし。もう少し、突きの構えを変えてみるか」

俺が死ぬ思いをしている中、少し離れた場所では、箒とセシリア、鈴の三人が、射撃の練習をしていた。箒のIS、紅椿の“雨月”を、射撃武器として使えるのでは？ と思っただけ、二人に練習を付き合ってもらっているらしい。うんうん、向上心を持つのは、良い事だ

「よそ見をするな！！！」

「ガキイイイイイイッ！！！！！！！」

「グウウッ……………！！！！！！」

つと、いけねいけね。俺はこっちに集中しねえと、冗談抜きで殺されるッ！！！！

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

アリーナ、観客席

「おうおう。何時も見てるが、激しいねえ」

「いいなあ、専用機持ちつて。いつでもああして訓練が出来るんだから」

「持っていない私達は、訓練機を借りるのにいつも申請して、色んな書類を書かなきゃダメだし……………」

うーん……………まあ、しょうが無いよな。世界で467機、だっけ？
それだけしか無い兵器だもんねえ。だからか、あのような専用機
というのは、本当に特別な奴にしか与えられない。ソレを考えると
アイツらってやっぱ凄いいんだよなあ……………」

「（ま、俺も人の事を言えんがな）」

俺も、専用機を持っている。まあ、俺が色々弄ったモノだがな……………
…例によって、色々とチート性能を持った機体だがなwww

「私も欲しいな、専よー機……………」
……………」

別にやらんでも、ないがな……ま、考えておくか

「（ふむ……きつちりアイツのあたふたブリを堪能出来たし、鍛錬の成果も見えてきてるし、上々かな？）」

そんじゃ、気分転換に街にでも繰り出そうなあゝ、色々と買い物したいし。あ、そだ。この子達と一緒に行くつてのもアリか、クツクツクツ。さって、どうしよゝかなあゝ……………



アリーナ内

「はあ、はあ、はあ……………」

つ、疲れた……………やっぱり、一気に二人も相手にしていると、疲れるよな。でも、未だに一撃も当てられていないのは、ちょっと悔しいなあ……………ん？

「あれ？（攻撃が、来ない？）」

「……………」

「？」

どうしたんだろう？ 二人とも……………なんだか、様子がおかしい……………

……………

「……………織斑、一夏……………世界二トツテノ、異分子……………」

……………」

「スッ」「チャキッ」

「……？」

違う。この二人は、シャルとラウラ“じゃない”！！俺の直感が、そう俺に伝えてきた

「「排除スル」」

「ギュオンッ！！！」

「ッ！！！」

「ガキイイイイイイイイイイッ！！！！！！！」

「グウウウッ！！！！！？（お、重い…………）」

イグニッション・ブースト
瞬時加速を使い、一気にこちら側へと接近し、腕に装備されたビームブレードで攻撃を仕掛けてきた。さっきと比べて、段違いの力に、俺は戸惑った

「バツ！！！」

「！！！？」

「「ダダダダダダダダダダダッ！！！！！」」

そこへ、シャルのアサルトライフルによる射撃が、俺へと向かってくる

「クッ…………ウオオオオオオオオッ！！！！！！！」

「ガキンッ！！！！！」「ギュオンッ！！！！！」

その攻撃が来る前に、ラウラのレーザーブレードを退け、イグニッション・ブースト
瞬時加速を使って、上空へと逃げた

が、そこはすでに、占領されていた

「「「バツ！！！」」」

「！！！？」

「織斑、一夏……………」

「世界ニトツテノ、異分子……………」

「排除スル……………」

世界が、あるべき姿から逸脱した時、世界にとっての異分子、ありもしない異常なモノ、歪んでしまった部分。それを排除、または矯正するために動き出す、言わば世界という生命の病原菌を消す為の抗体、のようなモノだ

それが今、動き出したのだ。それも、あの五人に取り憑き、彼女達を操りだしたのだった

「（だが何故だ？ なぜ修正力が現れた？ 前回の時に、一度は消滅させたはず）」

シルバリオ・ゴスヘル

以前……銀の福音の暴走事件の際、世界の修正力は、異分子である俺を殺そうとして現れた。その時は、福音に取り憑き、生体兵器のような形状へと変貌させてきた。だが、俺はそれを何とかして撃退。そして、完全に消滅させたのであった。暫くは、修正力の再生作業に入り、動きが無いだろうと思っていたが……まさか、こうも早くに復活し、行動を再開するとは……

「（だが、何故だ？ 奴らはなぜ俺では無く、一夏を狙っている？ なぜ、この世界にとって最も重要な存在であるはずの一夏を、なぜ？）」

……ひょっとして、一夏が“キーブレード使い”となったからか？

この世界にとって、“キーブレード”なんてモノは、異物でしかない。だから、その使い手となった一夏を、消そうと……………世界にとって歪みの元凶となりうる存在となったから、その排除をしようという考えに至ったのか？

「（ったく……………そんな事をすれば、この世界が破綻しかねないぞ！！？）」

一夏はこの世界にとって重要な因子ファクターだろう？ そいつを消すと言う事は、この世界が崩壊するのと同義。この世界の意味は馬鹿か！！？ 自分の心臓を自分で壊すようなもんだぞ！！！！

……………まあ、その心臓に、変な事をした俺が言うのも、アレだな

「ああ！！ おりむーが！！！！」

「「「織斑君ッ！！！！」」」

「！！！！」

チツ、俺が思考の渦に囚われている中で、事態はヤバい事になっていた。先ほど、鳳の双天牙月の攻撃を受けて、一夏が地上にたたき落とされていた。あのままでは、ヤベえ追撃が来る！！！！

「クッ……………しゃあ無しか」

「パチンッ」

俺が指を鳴らすと、周囲が陽炎に包み込まれる。そして、地面には虹色に輝く火線の幾何学文様と、空中には虹色の火の粉が舞う、異形の空間が作られた……………

ツツツ！！！！！！！！！！！」

と、その瞬間に俺達がいた場所に、レーザーや弾丸、それと見えな
い砲撃が降り注がれた。

「ズシャアアアアアアアアアッ！！！！！」

「つと。ふう、あぶねあぶね」

「た、助かった……………」

おそらく、今の行動は、さっきの攻撃を回避するための、だったの
か……………」

っていうか、よく見たらコイツ、ISを装備してねえじゃねえか！
！！ まさか、生身でバリア壊して、それでISを展開している筈
を殴り飛ばして、白式を展開してる俺を引っ張ったのか！！！！？

「さて、と……………どうやって処理しようか、アレ……………」

「ま、まってくれ！！ 一体、何がどうなってんだよ！！！！ なん
で皆が俺を狙ってんだよ！！！！ それと、お前は一体なんなんだよ
！！！！」

俺は、どうなっているのかを、コイツマスターに聞いた。コイツなら、何か
を知っている。なぜか、そう思ったからだ

「……………後で教えてやる。だから、今は簡潔に伝える」

「あ……………お、おう」

「いいな。今アイツらは、何かの力に操られている。そして、それ
が原因で、お前の事を敵として認識し、殺そうとしている」

「な……………こ、殺そうと、している！！？」

「驚くな。でだ。今やるべきことは、アイツらを正気に戻す。ただ

それだけだ」

「……………分かった」

本当に、簡潔だった。短く、ただ短く、こいつはそう答えた。だが、それだけで充分だった。俺が理解するには、問題無いほど簡潔だった

「で、どうやって正気に戻すんだ……………するべき事を知っているってことは、戻し方も知ってるんだろ？」

「ああ、当たり前だ……………ククツ、なんだよ一夏、やけに冴えてるじゃないか」

「なぜか、ね……………」

そう。なぜか知らないけど、今の俺は妙に落ち着いている。俺の大切な仲間が、何者かに操られているって言うのに、俺の感情は落ち着いていて、思考はクリアになっていた

「まあ、そう合っていてくれた方が、俺的にはいいんだがな」

「で、そんな事はどうでもいいから、皆を正気に戻す方法を教えてくれ」

「クク……………ああ、分かった」

「スッ……………ジュキイインッ！！」

教えてくれると思ったら、コイツはその手に、自分のキーブレードマスターを取り出した。悪魔の翼に、白き天使の羽が生えたような、剣キーブレード。それが、右腕に現れた

「コイツを使う。まあ、使い方がちとばかし変わった方法だがな」

「キュインッ、バチンッ！！！！」

リ
と言いながら、グレイは自分のISを展開した。白と黒の非左右対アンシンメト

称なカラーリングをした装甲が特徴的な、その機体……………

グレイ・ステインの、専用IS、“ソレスタル”だった

「な、なんでISを？」

「フツ………… アイツらを救うには、キーブレードとISの二つがいるのさ。そして、こうやって使うんだ」

「スツ………… フワツ」

「え…………？」

まるで意思を持っているかのように、コイツのキーブレードが握られている手から離れ、それはコイツの背中に、まるで非固定部位アンロック・ユニットのように浮遊し出した

その後、劇的な変化を迎えた

「…………… 纏われ、“ウェイトウザドーン”」

「キイインツ！！！！」

コイツの声に答えるかのように、浮かぶキーブレードが光を発した

「バシュンツ！！」

「「バサアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！！！！！」」

その後、悪魔の翼に白き天使の羽が生えたようなキーブレードは、背中の右側に“装着され”、更に光輝いた直後、背面装甲から赤黒き巨大な悪魔の翼と、真白き小さな天使の翼が生え、彼の右側へと広がった

「ソレスタル、“フォール・エンジェル・スタイル”」

……………キープレードが、ISの翼へと、変化したのだった。その姿は、まるで悪魔……………“フォール・エンジェル墜ちた天使”。ISの装甲の色と相まって、当にそんなイメージが強く出ていた

「ぐ、グレイ、そ、それはなんだ？」

「ああ、これか？ さっき言っただろ？ “スタイル”って」

す、スタイル？ なんだよそれ……………

「ISにキープレードの力を付与する能力、キープレード使いである俺たちが使える、異端な力さ」

「……………」

なぜだろうか、その言葉に、何か悲壮的な感情を、感じ取った……………

……………

「お前もコレをしろ。丁度良い、実践も兼ねて好都合じゃないか」

「へ？ お、俺も、それを！…？」

ちよ、んな無茶振りだったの！！ それに、やり方が分かんねえんだけど……………

「感覚としては、キープレードをISに纏わせる感じだ」

「な、なんだよそれ……………」

「まあ要するに、念じれば出来るかもな」 お前が出来るまで、俺がアイツらを足止めしている。いいな、必ず来いよ……………」

「フワッ、ギョオンッ！！！！！！！！」

そう言つて、アイツはイケニッション・ブースト瞬間加速……………っていうか、それ以上の加速
力じゃないか？ アレ……………をやつて、操られた皆の所に向かつて
行った

「……………」

つと、見とれてる場合じゃないな。集中、集中しねえと……………まずは、俺のキープレードを出さねえと

「来い、“フレッシユブリーズ”」

「シュキイインッ！！」

俺が念じて、形にするために、声に出してキープレードを呼び出す。
黄色の持ち手に、黒い刀身、先端も黒い、鍵型の剣……………俺
の、キープレード……………

「（ISに、キープレードを纏わせる感じでやる……………か）」

強く、強く念じて、アイツがやった事と同じような事を、やってみ
る……………

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「ギュオンツッ！……！！！！」

「さあ！つて！！！！ イッチョ派手に行きますか！！！！」

一夏がいる場から、一気にそれへと飛び出し、操られている五人娘の所へと接近する

「……グレイ・ステイン。コノ世界ノ異分子………排除スル」

「……」

「「「ギュオンツッ！……！！！！」」」

そう言うや否や、篠ノ之、鳳、ボーデヴィツヒの三人が突出し、雨月と空裂、二振りの双天牙月、片腕のレーザーブレードが、俺に向けられる

「いいぜえ、来いや……… “バルディツシュ” ！！」

「バチンッ！！ チャキッ」

「サイズ・フォーム！！！！」

「バクンッ、ジュギイイイインツッ！！！！」

ソレスタルの装備である黒い斧杖、“バルディツシュ”を召喚し、握る。その後、先端の小さな斧状の刃が90°ほど回転し、先端に巨大な金色のビーム刃が展開される。黒き斧杖は、大鎌へと変形したのであった

「オラアアアアアアアアアアアアアアアアアアツッ！！！！！！！！」

「ガガガキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイインツッ！！！！！！！！！！！！！！！！」

いく。“キープレード”の力を受けている為、先端から伸びるビーム刃の密度は極めて濃くなっており、その一撃一撃は、通常のビーム刃よりも重くなっていた

「「「バツ！！！！」」」
「？」

その攻撃の最中、他の四人が俺の背後を取り、雨月、スターライトmk-？、アサルトライフル“レイン・オブ・サタデイ”、レールガンに向けていた

「っと、ごめんねえ。構ってもらえないから、妬いちゃったのかい？　クツクツクツクツク」

「ギョオンツツ！！！！！！」

そのまま、鳳の上を通り過ぎるかのように超瞬間加速ハイ・イクニッション・ブーストを使用し、五人から再び距離をとる。ある程度距離が空いた所で、背後へ…………五人の方へと振り返る

「クツハハハッ！！　ほおら、俺の愛でも受け取りなッ！！！」

「チャキッ！！」

「“アークセイバー・フィフススラッシュ”　ツツ！！！！！！」

「ブンッ！！！！」

大鎌形態の“バルディッシュ”の先端に展開された金色のビーム刃が、杖から離れていき、ブーメランのように放つ。その時に、刃は五枚に分離して、一つ一つが五人の所に向かい

「「「「ズガンツツ！！！！！！！！！！」」」」

見事、直撃した

「まだまだ愛してやるぞおツツ！！！！！！！！」

「ジャギンツ！」

「ヴァニティスマッシュ・マルチプルバースト」 ツツ！！！！！！
「！！！」

「ヴヴヴンッ……………!!!」

直撃を確認するや否や、すぐさま“レイジングハート”の先端を相手達に向け、射撃体勢へと成る。それと同時に、先端から先に円環状のエネルギーバレルが展開する。だが、それは、先ほどの“トワイライトランサー”の時よりも、遥かに大きな環である

「ファイアツツ！！！！！！」

[illegible]

その砲口から、極太のレーザー………巨大な光の柱が五本、放たれた。それは、とてつもない程の速さで五人の所へと向かって行く

「ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ンツツツ！……」

そのまま、為す術も無く、五人は飲み込まれていった

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……」

「クックックックック………と、終わったか？」

あくまで、余裕を保つ。相手の神経を逆なでさせるには、コレが丁度良い手であり、楽して勝つための方法だ。でも、こいつ等は今や操られている身。そんな姑息な手は通用しないのは分かっている。ソレを分かっている、俺は戦いの場で、軽口を叩く

それが、俺の基本スタイルだからだ。こうする事で、高ぶる心を抑え、冷静に戦いを運ばせる……俺の描いた、物語通りの戦いを……

「……って、一夏は何時までやってるつもりだ？」

そつだよ、一夏だよ！！！アイツ、いつまでもたついてんだ？お前がやんなきゃ、意味ねえだろうがよッ！！！！

しゃあねえ、発破でもかけるか！！

「おい一夏ッ！！！何時までやってんだこのバカ弟子ッ！！！！」
《そ、そう言っても、なんか、出来ねえんだよ！！》
「まさかとは思うが、俺みたいに、背中に羽が生えている、って感じにやろって、思ってたんじゃないやねえよなあ？」
《え？ そ、そつだけど………》

はあ………やつぱりか

「バカ野郎。俺と同じようにすんな………いいか？俺は俺のやり方をやったら、こんな状態になったんだ。それに、前に説明したはずだ。この剣は、自分の心の形だとな。だから、“自分なりのスタイル”でやれ。自分なりの、装着のされ方をイメージしろ。いいな、師匠と同じ事をしてても、強くはなれんぞ」

れと同時に、相手の攻撃が止んだ

「……………フッ」

—— やっと出来たか、我が弟子よ

その顔に、喜色が浮かび上がった

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

グレイが飛び立ってから、俺は自分のキープレードに向かって念じ
続けていた

「（“キープレード”を、ISに装備させるようなイメージ……………
……………」

…………… ダメだ、まったくイメージが固まらない。こんな鉄の剣
みたいなモンが、あんな感じにISにくつつくイメージなんて、全
然湧かなかった

「（どうすりゃあ良いんだよ…………… ったく、念じるだけで出来るっ
て言ったくせに、まったく、ウンともスンともいわねえし……………」

…）」

とにかく、俺は自分の持っている“キープレード”に念じてみる。
自分のIS、“白式”に装備しろと……………

「……………」

で……………出来ない

肩を落とすというアクションを本当にしてしまうほど、俺は墜ち込んでしまった。本当にあんな事が、俺にも出来るのかと、本気で心配になってきた……………

「（出来ないんじゃないのか？俺には……………）」

そう諦めかけていた時……………

《おいー夏ッ！！！！》

「！！！！？」

俺の師匠から、オープンチャンネルを通して……………怒号が送られてきた

《何時までやってんだこのバカ弟子ッ！！！！！！》

「（ば、バカ弟子い！？）」

い、いきなりそんな暴言……………ホント、俺の師匠は厳しい人だ

「そ、そう言っても、なんか、出来ねえんだよ……！」

《まさかとは思うが、俺みたいに、背中に羽が生えている、って感

じにやるうつて、思つてんじゃねえよなあ?」

「え? そ、そうだけど……………」

そりゃあ、アンタみたいに、その……………翼みたいに、ISに装備させるつてのが、なんかできないんだが……………

《バカ野郎。俺と同じようにすんな》

? 同じ、ように……………?

《いいか? 俺は俺のやり方をやったら、こんな状態になったんだ。それに、前に説明したはずだ。この剣は、自分の心の形だとな。だから、“自分なりのスタイル”でやれ。自分なりの、装着のされ方をイメージしろ》

自分なりの、スタイル……………!!

そうか、俺はアイツ見たいに、鉄の剣が、何かに変形して装着されるような事ばかりを考えてた……………つまり、

《いいな、師匠と同じ事をしてても、強くはなれんぞ》

《……………わ、分かった》

確かに、人と同じようにしていても、ソレはただのサル真似だ。だから、自分のやり方を、自分なりに見付けていく……………そう言う事すね、マスター師匠

よし……………ならもう一度、集中だ……………

「ふう……………」

「チャキッ……………」

右腕に、普段なら雪片が握られている手に、俺が新しく得た剣を握って、意識を集中させる……………」

「……………」

……………何も、何も聞こえなくなった。まるで、世界が俺一人だけになったような感覚……………そしてその感覚のまま、意識をさらに、キープレードへと注いでいく……………」

「……………ドグンッ」

鼓動……………キープレードが、何かしらの脈動を始めた。それは、まるで弾くような、パキンと、何かが外れるような感覚がした

……………キープレードはな……………心の結晶、具現化した魂、己と
言う存在の形だ……………」

今なら、アイツが前に言った意味が、理解できるような気がする……………この剣は、自分なんだと、自分が目指したい。何かを示してくれるんだと……………」

……………だったら、俺は……………今、俺がしたい事は……………
ッ……………!!

「キイイイイイイイイイイイイイイイ……ッッ！！」

「俺は！！ 皆を“この手”で、助けたいッッ！！！！！！」

「バキンッ！！」

「！！！！？（キープレードが、割れた！！？）」

「「ガチンッ！！！！」」

「！！！！！！？？」

俺は、皆をこの手で助けたいと念じた。すると、まるでそれに答えたかのように、キープレードが光輝き……まるで魚の開きのように割れ、刀身が縮み、まるでバックラーのような小型の盾となった。そして、それが白式の右腕の装甲に、“装着された”

「……………これが、スタイル……………」

確かに、アイツとは形が違い、一目で判別は出来ないだろう。だが、俺には分かる。これは、スタイルであると…………アイツが言った、ISに異端の力を与える能力なのだと

「……………いつも以上に、体が軽い」

体の奥底から、何か力が湧きあがるような感覚に見舞われた。なんだか、マンガとかでありそうだな、こう言う展開。味方のキャラ

あ、ありのまま、今起こった話を話すぜ……………

まずな、一夏が瞬間加速をした。だが、それが俺の予想を遥かに超えた加速力でな。多分、俺の超瞬間加速^{ハイ・イクニッション・ブースト}よか、遥かに性能が上の瞬間加速^{イクニッション・ブースト}だ……………は、話を元に戻すぜ。そのまま、相手の方に向かつて行き、そして、そのままの勢いでデュノアちゃんにタックル、それで、デュノアちゃんは吹き飛ばされて、アリーナ天井に展開されてるバリアに直撃して、ズドンと……………で、本人である一夏は、俺の隣で冷や汗を掻いているぜ。もし操られてるとか、そう言うのが無ければ、今頃高速切替の多用による銃弾の雨が在りそうかも

……………
っていうかなに？ あの瞬間加速^{イクニッション・ブースト}！！？ パワータイプかと思いきや、実はスピード特化タイプ！！？ こ、コレは騙されたぜ……………

「ま、まあいいや。とにかく一夏、今から作戦を伝える」

「お、おう」

「まずは、お前のその早さを生かして、アイツらを攪乱しろ。やり方は任せる」

「お、おい、任せるって「それで、隙が出来たら、俺が攻撃して一か所に集める。」人の話を聞けよ……………」

グダグダ抜かすな。まあ、本来なら、俺が攪乱してやるはずだったが……………今のコイツのスピードを見て確信した。多分、俺よりも、コイツの方が遥かに早く動ける。なら、更に効率のいい作戦ができる

「その後……………俺とお前で、止めの一撃を与えて気絶させる……………
……………そっから後の事は、また教える。つまり今は」

「皆を気絶させろ、ってことか？」

「フッ、その通りだ」

時々、コイツって鋭い時があるよな……あれか？ 乙女心に鈍いのは、コレが原因だからか？ まあ、別に良いけどな

「なんか、仲間を攻撃するってのは、抵抗があるんだが……」
「んな甘えた事を言っている、奴らは助けられんぞ。それぐらい、理解しろ」

「……………分かった」

「フッ……………そんじゃまあ、張り切って行くか。相手も、体制を立て直したみたいだしな」

いつの間にか、デユノアが他の四人と並んでいた。そして、こつちに攻撃を仕掛ける体制へと入っていた

「ッ……………ああ、分かった」

フッ。それじゃあ……………第二ラウンド、開始だッ……！

「ダッシュンッ……！！！」

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「ダシュンツ！！！！！」

マスター
師匠から作戦を聞き、相手を攪乱するために、俺は行動を開始した

「『『『『『織斑、一夏。世界ノ異分子トナツタ者、排除スル』』』』」

」

「ッ。目を覚ませ！！！！ 皆ッ！！！！」

「ギュオンツツ！！！！！！！！！！」

どうも、性能が高まつたらしい瞬間加速^{イグニッション・ブースト}を使って、俺は皆の所を“
過ぎ去る”

「『『『『ッ！！！！』』』』」

「『『『『ギュオンツツ！！！！！！！！』』』』」

すると、全員が俺の方へと向き、こっちに來た。好都合だ！！

「バチンツ！！ チャキツ」

「ヴンツ！！！！」

そして、粒子化し閉まつておいた“雪片弑型”^{コール}を召喚して握る……
…そして、雪片の刀身が展開し、光の刃が出てくる

「ッ！？ な、なんだこれ？」

呼びだした光の刃が、いつもよりも明らかに長く伸びていた。でも、
これでは消費するエネルギーも多いはずじゃ……って、あれ？

それらが来る前に、俺は反転して、右腕に付けられた、キーブレードが変形した盾を構えて、その攻撃を耐えた。やっぱり、見た目通りに盾の役割を以っていたようだった。それも、構えた瞬間に前方に薄い光の膜が張られて、それがレーザーは愚か、実弾兵器すらも通さないバリアとなっていた。しかも、エネルギーは全く消費されていない。これで、苦手だった実弾兵器も、脅威ではなくなった

防ぎきった後、左腕の“雪羅”を砲撃モードにして、大型の荷電粒子砲を放った。それも、強化されているのか、いつものそれよりも、かなり太く感じた

だが、その攻撃は当たる事無く、全員が回避し、さらに反動で動けなくなっている俺へと向かってきた

232

に、最高の高速戦闘型のスタイルだった

ならば……彼のスタイルは当に高速の剣、“スピード・レイヴ・スタイル”、だな

そして、その時に使われる瞬間加速は、イグニッション・ブースト最大瞬間加速だな……あ、決定だ。うん、それにしよう

「……………にしても、まさかとは思っていたがな」

今の、一夏が放った攻撃と、今一夏が受けている攻撃で、確信が付いた

「今回の敵は、“大バカ”だって事がな（；ー△ー）」

コレさあ、呆れるしかないわ……奴らの目的は、異分子の排除。だが、その標的は一つにしか絞れない。ようは、一人をロックオンしていると、そいつにしか攻撃をしない。つまり、狙った獲物しか狙わないってことだ

おかしいと思ったんだよねあ、俺が最初に攻撃を仕掛けてる時、なんで無防備な一夏を攻撃してこなかったのだろうか……そんなで、こうして今、一夏に攻撃を向けている時は、俺の事はノーマーク。ちなみにだが、今俺、どこにいますか？

「ここまで近づいても気付かないって、そうとうダメだと思うんだ

杖に備えてあるトリガーを引き、レーザー弾を放つ。今回の光弾は、ガトリングガンかマシンガンのように高速で連射され、それらを全員に浴びせる

「……………ッ！……！！……？」「……………」

「……………「バツ！」……………」

「……………グレイ・ステイン。コノ世界ニトツテノ異分子、排除スル……………」

ほおら、やっぱり俺の方を向いてきた。そう、さっきまで一夏に攻撃していた手を止めて、こっちの向いた……………」

「やれ！！　一夏ッ！……！！」

「ギュオンッッッ！……！！……！！……！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！……！！……！！……！！」

「……………「ザンッッッッ！……！！……！！……！！……！！……！！……！！」……………」

トップ・イグニッション・ブースト

俺の声に即座に反応し、最大瞬時加速を使用して相手に突撃……………そして、一瞬にして五人を“零落白夜”の刃で斬りつける……………やはり、瞬発的な動きも可能となっているようだ。さらに、防御面も問題なし……………あれ？　結構無敵じゃね？　彼……………まあいいや

「一夏！！　雪羅の砲撃だ！！！！」

「ッ！！　分かった！！！！」

「ジャギンッ！！」

「“ヴァニティスマッシャー”ッ！！！！」

「ジャギンッ！！」

「（……………これならば、気絶ぐらいの事はしてくれるだろうな）」

確信は、あった。そう言った手ごたえと言つモノが、確かにあったからだ。そして、その確信は、現実になる

「……………」
「……………」

「（よし、やっと気絶したか）」

あの五人は、意識を手放していた。ISのPICによって、空中に浮かんでいる……………

さて……………ここからが本番だ

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「……………」

俺達二人が放った二つの砲撃は、見事に箒達へと当たり、周囲に爆煙を撒き散らしていた

「……………!!!(皆は!!!?)」

先ほどの攻撃。あれはおそらくかなりの威力があつたはずだ。爆煙の広がり方で、その高さと言うモノが目に見えて分かる……………

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……………」

「……………あ!」

「————」

良かった。皆、気絶しているだけか……………ふう。えっと、じゃあ、まずは皆を下ろさないで」「」「ジャララララララララララララララッ!! バシッ……………!!」「」「」

「ッ……………!!?!?」

突如、何もない空中に、鎖が表れ、箒やセシリア達が、それに捕らえられた

「皆……………!!」

その異変から、鈴達を解放しようと動く

だが、それは途中で引きとめられた……………謎の声によって

I am the bone of radiant
light

我が身は、光で出来ている

「?（なんだ? これ……………）」

その直後、何か呪文のような何かが……………エコーが掛かったような
声が、俺の耳に届いた……………それは、聞き慣れた男の声だった

「……………グレイ?」

Conflagration is my body,
and darkness is my blood

血潮は炎で、心は闇黒……………

「一夏ッ!!!! まだ終わってはいないぞ!! 今からコア・ネッ
トワークを介してお前にやってもらいたい事を伝える!!!! その
通りに行動しろ!!!!」

「は、はあ? 終わってないって、どういう……………ッッ!!!!!!
!!!!!!???」

「ズキッ!!!!」

グ……………あ、頭に、何かが……………な、なんだこれ? “キー
ブレード解放陣”? それに、これは……………

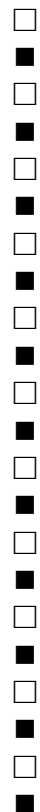
俺が全力で引っ張った鎖。その鎖の先に合ったのは、黒い瘴気のようなモノを閉じ込めた透明な球体。それが、ラウラ達の体から抜き出されたのだ。その中に有る瘴気は脈を打ち、生命のような躍動をしている……………

existence of light. But behavior makes the dark an embodiment

「よし……ッ！！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

イグニッション ブースト
俺は瞬時加速を使い、雪片を構え、その黒い球体へと近づき、零落
白夜の刃で一氣に斬り捨てる。そして、そのまま地面へと向かって行く



あの後……… 箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラの皆は気を失った
ままで、ISは解除された。そして、俺もISを解除し、皆をアリ
ーナの端の方へと運んだ

「「「「「
……………ふう」

…………… 本当に、アレで助かったのか、よくわかんねえんだけど
な……………

「つつし、終わった終わった」 そんなじゃあ、俺は戻るわ……………
………」

「さてよ」
「うお？ なんだ？」

何勝手に帰ろうとしてんだよ、コイツは…………… 聞きたい事が、山ほ
どあるってのに

「一体、何がどうして、あんなことになったんだよ…………… なんで皆
が操られたんだよ。なんで俺とアンタの事を狙ってたんだよ！！！！
それに、この周りが変になっているのは、なんでだ！！！！？」

周囲を見渡してみると、そこはいつものアリーナではない事に、今やつと気付いた。まるで、陽炎に染まった空間、ゲームなんかで良く見る魔法陣みたいなモノ。それに、それを描くのは、炎の系……周囲には、熱くない虹色の火の粉が舞っている……

この、明らかに異常な景色は、明らかに普通ではない。そして、それら全ての原因は、コイツにある。コイツなら、多分全部を知っている。それを、直感的に感じ取った

「ああ……まあ、もういいじゃん」

「な………？」

「いやさあ、過ぎた事だし？ それに教えるのもメンドクサイし」
「………ふ、ふざけんなッ！！！！ こっちは死ぬような想いを」

「ああああ、分かった分かった。さっきのは冗談だ。ちゃんと話すから、まずは落ち着け」

………ああ、分かった

「………まずは、この周りの事についてだ。まあコレは………
“キープレード・マスター” が使える、戦闘用特殊フィールド、つてところかな？」

「戦闘用、特殊フィールド？」

「ああ。いわゆる、結界って奴だ。俺達“キープレード使い”は、あまり世間一般的に知られてはならない。だから、こういった戦闘行為を隠す為に、こういった結界のようなモノを展開すんのさ」

な、なるほど………魔法みたいなモノを、使うんだからな

「コイツは、外界との関わりを完全にシャットアウトするタイプの

結界でね。耐性が無い人間は、人形ように固まり、ここで起きた事が無かったことになるのだ」

「……………つまり、この空間が解除したら、その耐性が無い人達は、この空間が展開される前の状態になる。って言う訳か？」

「そ。で、前後の記憶は良いように改竄されるって訳だ」

…………… な、なんか、良く分からないような…………… ま、まあ理解はしなくても、よさそうかも

「で、次だ…………… こいつ等を操った奴についてだ」

「あ、ああ……………」

「それは、“世界の修正力” って奴だ」

…………… ？

「は、はい？ な、なんて言ったんだ？ 今……………」

「“世界の修正力”。まあ、聞き慣れない言葉だろうとは、思うがな」

な、なんだよそれ……………

「世界があるべき姿から逸脱した時に生じる力、歴史が歪んだ時に矯正を行う為の力…………… それが、“世界の修正力”。時には、“抑止力”、なんて呼ばれる事もある」

「…………… ごめん、まったくついてこれないんだが」

「まあ、そうだよ…………… だからだよ、俺が教えるのが面倒だっていった理由は」

…………… 確かに、さっぱり理解が出来ない。聞かない方が良かったかも

「お前が理解できるレベルで言えば…………… “この世界の神様” の仕業、って事にしとけ」

「か、神様？」

ま、また突拍子もない事を言い出したぞ、コイツ…………… っていうかあれ？ こう言われても、大笑いとかしそうなはずなのに、なんで真剣に聞こうとしてんだろうか、俺……………

「魔法みたいな、在りもしない力を使う奴が大っ嫌いな神様だ。そいつが、篠ノ之達を操り、俺達を殺そうとしたんだ」

「…………… 魔法、みたいな……………」

つまりそれって、“キープレード” の事、だよな。それを嫌う奴が、箒達を操って、俺達を殺そうとしてたのか……………

…………… ！ まてよ

「ッ」

「じゃあ、つまりこういう事か？ 俺が“キープレード使い” になったから…………… 俺が、この力を持ってしまったから、箒達は「一夏」な、なんッ！？」

「グワシッ」

俺の事を呼ぶと、いきなりコイツは、俺の胸倉を掴んできた。そして、いつになく低い声で…………… そして、いつになく、冷え切った視

線で、俺の事を睨みつけた

「言うておくぞ。お前を“キープレード使い”にしたのは俺だ。だから、これは俺が引き起こした事だ。お前に責務は無いし、気負う必要も無い」

「……………」

「それに、もしそれでも納得がいなくても、こいつ等を救ったのは、お前だ。お前自身がやったんだ。俺はただ助力をしただけ。それだけは、理解しろ」

「……………で、でも」

「もし、それでも納得が出来ないのなら……………もう知らん。背負うなりなんなり、勝手にしろ」

え……………ええ！！？

「ただ言えるのは、俺の弟子になったからには、細かい事はいちいち気にするな。いいか？良い言葉を教えてやる……………“気にしたら負けだ”。今後、細かい事はグダグダ抜かすな……………分かったか？」

「……………は、はい、^{マスター}師匠」

「ふん……………それでいい」

……………ほんと、コイツってなんか、凄いよな……………

「さて、俺はもう部屋に戻るわ……………お前も、そいつらが目を覚ますまで、近くにいてやれよ」

そう言うと、^{マスター}師匠はアリーナの出口へと向かって行った……………俺は、その背中を見送る事しか、出来なかった……………

「フウウウツ……………」

すると、アイツが結界だと言っていたモノが解かれていき、陽炎の世界が消えていき……………いつもの、アリーナの姿が見えた。少し薄暗いと思ったら、もう太陽は西に傾き始めており、空がオレンジ色に染まっていた

「……………ん、うん？」

「！ 箒、大丈夫か？」

「いち、か……………？ あれ？ 私は……………？」

「うゝん……………あ、あれ？ ここは……………」

「あら？ わたくし……………？」

「……………ん、む？ な、私は、何時の間に……………」

「あれ？ 私達、訓練、してたような……………」

それと同時に、箒、シャル、セシリア、ラウラ、鈴の順番に、目を覚ました

「あ（そっか……………皆、あの事は忘れてるんだったよな）」

あの結界内で起きた事は、良いように改竄されるんだったな。だから、皆、訓練の最中に、こうなっただって事になるんだよな……………

「あ、えっと……………皆、疲れてここに座ったんだよ。それで、そのまま、寝ちゃってたんだ」

「そ、そうなの？」

「あ、ああ」

「どうして起こさなかったのよ」

「だ、だって、心地よさそうに寝てたから、起こすのもアレかなって思っ……………」

「そうか……だ、だったら、しょうが無い、な」

「そうだな。それに、なんだか良い夢を見た気もしたしな」

良い夢？　なんだよ、人が必死に戦っていたのに……

「僕も、なんだか凄く良い夢を見ていた気がする……」

「わたくしですわ……」

「私も……ちよつと、あれな感じがするけど……」

「へえ……どんな夢だったんだ？」

「……ッ……／／／／」

？　どうしたんだ？　皆、顔を赤くして……いや、この赤さは、夕暮れの光のせいだよな。きつと

「さつてと、それじゃあもう寮に帰ろうぜ。そろそろ、夕飯の時間だしな」

「……／／／／」

「？」

なぜ、だろうか……今日は皆、それからずっと顔を赤くしたまま、俯いていた……まさか、後遺症みたいなモノでも残っているんだろうか？　後で師匠マスターに聞いてみよう。そう考える、俺だった



アリーナ内、廊下

一夏と離れた後、俺はアリーナの廊下を歩いていた

「ふう……………まったく、とんだ厄介事が起きたもんだぜ」

首をコキコキと鳴らしながら、凝った体を動かしつつ、部屋へと戻っていく

「（しかし、こう何度も修正力が動き出されると、こっちとしては身が持たん……………こうなったら、IS学園にだけでも、対修正力用の拒絶結界でも張っとくか）」

コレ以上、俺の平穏で愉快的な学園生活を、邪魔されるのも嫌だしな

……………

「ま、ちよつくら憂さも晴らしたし、考えないでおくか……………クツクツクツクツク」

今頃、あの一夏ラヴァーズ、顔を真っ赤にして俯いているだろうなあ。何しろ、あの戦闘を超絶美麗に、凄まじくした映像を、夢として見ていた。と言う事にしておいたからなあ……………クツクツクツク、あの一夏がまるで白馬の王子様で、俺は悪の親玉みたいな感じに仕上げた最高傑作よ……………

「（……………あれ？　なんでだろう……………涙が出てきたぞ、おい……………）」

ま、まあ、しょうが無いモンな。アイツらは一夏の女だ。他人の女
には、触れないのが、ナンパ師の掟よ……………

「さあつて……………夏休みは始まったばかりだしなあ……………まだまだ
楽しい出来事がありそうで、ワクワクする……………クッククック」

一夏クンを鍛えたり、女の子達と遊んだり、そして……………来る学園
祭に向けて、色々準備を進めなければならないからねえ。クックク
クックク、『シンデレラ』には負けんぞ？ 覚悟しな、会長♪

「っと……………そうそう、そういえば……………」

はあ……………まったく、バレバレだったの

「何時まで隠れているつもりだ？ “本音”」

「……………ペラリ」

「あはは、やっぱりバレてたか」

やはりな。道理で変な視線を感じるなと思いきや……………まったく、ス
トーカーか？ コイツは。それに、隠れ身の術とか、古典的過ぎだろ

「はあ……………本当にお前、更識家直属の“スパイ”なのか？」

「うゝん？ そゝだよ」

……………在りえない。何故こんなのほんとした奴がスパイやつ
てんだよ。しかも、その技術をストーカー行為に使うとか……！……
……………いや、俺も似たようなモンか

「で、なんで付いて来てんだ？」

「いや、グレー君がアリーナのフィールドから出ていくのを見かけたから」

「たく、それで付いてきたって訳か。はあ、マジでストーカー乙だわ……………」

……………まで。コイツ、今何て言った？

「お前、さっきなんて言った？」

「？　グレー君が、“アリーナのフィールドから出ていくのを見かけたから”、だけど？」

「間延びした、いつもの口調で話す。だが、おかしな点があった

俺は、あの結界……………まあ、“封絶”って言うんだけどな。そいつを解いたのは、俺がアリーナのフィールドから完全に姿を消してからだ。だが、コイツがさっき言ったのは、フィールドから出ていく俺を見た、と……………」

「それにしても、グレー君ってやっぱり強いんだね。“センヨ―機持ち五人を相手にしてても、まったく苦戦とかしてなかったし”」

「――」

コイツ…………まさか、あの封絶空間内で、動いていた、のか？

「お前、あの戦いを見たのか？」

「？ うん、観客席で見てたよ。さすがに規模がなんだか桁違いっぽかったから、もう黙って見てて」

……………見られた。あの戦いを、見られてしまった

なぜだ？ なぜコイツに封絶の効果が効かなかった？ どうして、あの空間内で動く事が出来た？ 何か、特殊な力でも得たのか？ それとも、俺が前回コイツにしたアレに、誤作動でも生じたのか？ いや、それは無いはず……………なぜだ？ どうしてこうなった？

「？ どうしたの、グレー君」

「……………」

それよりも……………コイツをどうする？ 記憶を消すか？ それとも、口止めをしておくか？……………いつその事、存在を消滅させるか？

「ぐ、グレー、君……………」

本音が、俺に対し怯えた目をして見つめていた。そして、その瞳に映った俺の顔は……………まるで邪魔者を見るかのような、冷徹なモノのそれだった

「……………（仕方ない。記憶を消すのもアレだし、存在の消滅は、

さらなる歪みの原因になりかねない……………ここは、口封じをしてお
くか」

「スッ」

「? ぐ、グレーく「ドンッ!」キャッ!?!」

俺は、本音の肩を握り、壁の方へと叩きつけ、顔を近づけ……………睨む

「いいか本音。あの戦いにことは、誰にも話すな。当事者の一夏に
も、篠ノ之やオルコット、鳳、デュノアにボーデヴィツヒにもだ。
いいな? 誰にも言うな。或いは、忘れろ……………いいな」

「ッ……………ぐ、グレイ、君……………?」

声が、震えていた……………俺も、あまりの事態に優しさを忘れ、脅迫
をするような、そんな口調で、本音に言いよっていた

「返事はどうした? 本音……………」

「ッ……………は、はい……………」

「フン……………」

返答を聞くや、本音を抑えていた腕を放し、俺は踵を返して出口へ
と向かって行った……………

「……………グレイ君って、そうだった顔も、するんだ……………」

「……………ああ」

冷たく、まるでツンドラの大地の如く、冷えた声で返答した

おそらく、嫌われるだろうな……………

いや、それでいい。俺はこの世界にとって異分子。故に、この世界

に存在するモノと、結ばれてはならない。ああ、そうさ……ナン
パやってても、本気で恋をしようだなんて、思っちゃいねえ。本気
で落とそうとは、していないからな……だから、俺に本気の好意
を寄せてるコイツから嫌われるんなら、それはそれでいいんだ……
……

「ふ〜ん……えへへ〜、 그레이君の意外な一面が見れて、ちょっ
と嬉しいな〜」
「――」

……なん、つつた？ 今……

「それじゃあ〜、私は寮に帰りま〜す。グレーく〜ん、また食堂で
会おうね〜」 あ、さっきの話、ちゃんと守ります「ビシッ」で
は〜」

「タッタッタッタッタッタ……」
「……」

そついいながら、本音は敬礼をして、出口の方へと向かっていった
……その表情は、喜色に彩られ、満面の笑顔だった

「……………つ、だああああアアアアアアアアアアア
アアアアアアツツツツ！！！！！！」

「ズガンツツツツ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「！！！」

そして、ソレを見送った俺は、壁に向かって頭突きをかまし、停止していた思考を強引に作動させた。頭突きのせいで、壁が陥没してしまったが、そんな事は気にしていられなかった

「なんなんだアイツはッ！！！！ あんな事言われて………… あんな事されて！！！！ それでも嫌いにならず、逆により一層惚れこむとかッ！！！！ どんだけマイペースな奴なんだよ！！！！ アイツはッッ！！！！！！！！！！ ツ！！！！？」

珍しく、取り乱してしまった……当に、あそこまでマイペースな人間に会うのは、初めてだった……だから、俺は苛立ちを覚えた

「ッ……………はあ。　　たく、なんでこう、イライラする……………あ
あもうッ！……！」

こうなりやあ、部屋に戻って、一夏が帰って来た時には、これでもかかって言うほど弄ってやる！ いや、例の“鬼”にたいして、ストレス発散もいいかもな……………

「ッ……なんなんだよ、もう」

俺は、ムシャクシャした気分のまま、寮へと帰って行った。

.....
これは、ある神を名乗る男の、物語の断片.....

.....
これは、ある神の戯れを描く、物語の断片.....

.....
これは、ある神の悦楽を語る、物語の断片.....

..... コレは、ある神の最後の愛を見つける、物語の断片.....
.....

..... 断片故に、これは一場面でしかない。神が語る遊戯の、
ほんの一幕.....

..... 物語は、未だに紡がれている.....

..... 神が描く物語。その行く末は、崩壊か、平穏か、それと
も.....

..... 結末は未だ語られず、故に、その未来はどうなるのか、
描き手も分からない.....

..... さあ、物語を描こうか.....

〈自由〉【リイーン】『短編だからって、ネタに走ると思ったら大間違いだ！』

ええ、いかがでしたでしょうか？ 中二全開、主人公が無双過ぎる、バトル描写が子供のお遊び以下、のような内容ですが、私としては全力を出し切った内容なので、自己満足しております

今回、これに費やした文字数は32000字を超えています。今まで自分の書いた中で、最高文字数を行ってしまいました。やりたいネタを全て詰め込んだので、こうした結果になってしまいました。本当に、色々と首を絞める事になりましたが……………

これを最後まで読んで下さった皆さまに、無上の感謝を。本当に、ありがとうございます。では、失礼します

〈自由〉【天道松】『本来書きたかったものに津波が登場するから、急遽予定変

はい。言いだしっぺが

かなりぎりぎりに投稿する羽目に

最近パソコンに向き合う時間がないのも1つですが

本編、今回の投稿予定だった短編ともに

津波のシーンがあり、今回の地震のことを考え急遽変更

その作業もあり、かなりの間小説を書いていない

しかも、その間にハーレムの代案が形ができてきて……

リアルなバスケやバイトも忙しく、Gジェネワールドもすると

かなり今忙しいです……えっ？なんか変なのが混じってた？気のせいですよ？

だから今回半分はリハビリ目的、

もう半分は代案の宣伝だったりします

では本編をどうぞ

「自由」「天道松」『本来書きたかったものに津波が登場するから、急遽予定外

「こ、こんな一方的な」

「ハハハハ！。悪のイノベイター
『デカルトシャーマン様』に貴様たち劣等種が勝てる訳ないだろう
！！」

ま、まさかここまで強いとは
世界を牛耳ろうと言う悪の秘密結社「ショーカー」の最後の敵
大首領デカルトシャーマン
コイツを倒さない限り私とシャルの平和な新婚ライフが訪れない
私はまだシャルとらぶらぶな新婚ライフを送ってない！！

「うおおおおお！！」

『無駄だ！！無駄だ！！』

懷に飛び込もうとした瞬間

小型ファンングが射出され私に攻撃が開始される
それをなんとか回避しつつビームライフルで攻撃するも全て避けられてしまう

【あきらめてしまえ。

貴様の仲間は私の部下が抑えている。

貴様一人ではこの【ガデラーザ】を止めることは出来ない】

「あきらめるモノか!!」

まだシャルの裸エプロンも新婚旅行も

私の……私の闘う以外の目的を——刹那さんに言われていた自分だけの道を

ようやく見つけたんだ

それを目の前にして……あきらめられるか!!

そう思った刹那

「玄武剛弾^{げんぶこうだん}」

回転した青い拳が

デカルトに直撃し吹き飛ぶ

そして、腕はそのまま元の軌道をたどり

自分の主の場所に戻っていく

そこにいたのは見知らぬ少女と共にこちらを見つめる

ひげを生やした青いIS

「なんだか知らないが……急に攻撃しても大丈夫なのか。ミィ?」

「こう言う時は攻撃で主人公を救うのがお約束ですよ」

「主人公？」

「一夏は気にしなくていいですよ」

今あの少女は一夏と言ったか？

たしかに聞いた感じ声は一夏の声だが

まるで私を知らない人の様に話している

それに一夏は今頃、シャル達と共にイノベイドと戦っている筈だ

「あなたもしかして、この世界の一夏と知り合いですの？」

「この世界？」

「私達は並行世界の地球から迷い込んでしまいましたの」

並行世界の地球？

あいにく私はカタギリと違い細かいことはよくわからんが
一つ分かったことがある

この一夏は私の知っている人物とは別人物だと言うことだ

「少し手伝え、少年。ヤツを倒す」

「はあゝ厄介事か」

「一夏は厄介事と女性に好かれていますの」

嬉しくネエー！！

と一夏（青）が叫び、ミィと呼ばれた少女は笑う

どうやら別の世界でも一夏は厄介事に好かれ、女性を周りには囲む存在らしい

【ころすすすうううう!!】

「漫才は終わりにしろ少年。往くぞ!!」

「行きますわよ。一夏」

「あつ!?!おい……ああもう」

私の言葉と共に

ミイが鬼面が両肩についているISに換装し

その鬼面からビームを撃つ

どうやら彼女もISを操縦できるらしい

その歳にしてもうISを操縦できるとは……中々

「貫け!!」

「ヤツよりも速く!!」

私の間合いに入りこめた

先程まではヤツのファングで自分の間合いに入れないからこそ苦戦したがこの距離ならば

「切り捨て……………御免!!」

【グオオオオオオ!!? な、なめるな——!!】

「まだだ。ファイナルコード!!」

私の一撃

会心の一撃を持ってしても
ヤツを倒すことが出来なかった
だが、今の私は一人じゃない

「麒麟！真・極！！でいいやつ！！」

私の後ろから

現れた青い影……べつ世界の一夏が肘のブレードで敵を斬る
デカルトの胴体は切り裂かれ、爆散している

「はあゝはあゝはあゝ。これでどうだ」

「一夏。アレを」

ミイが指差した方向には

黒い渦の中に地球が映っているモノ
先程までこんなモノなかった筈だ

「アレに入れば元の世界に帰れますの」

「そうなのか……よし帰る——」

【まだだ。まだ、私は死んでいないぞおおお！！！】

「不死身なのかコイツは！！」

体中ボロボロ

何本もあつた腕ももう2本しかなく

胸元にあつた砲身もすでに使えないだろう
だがファングが残っている

この少年がいれば余裕でつぶせるだろうが

「行け！！少年！！……元の世界に戻るんだ」

「な、待てよ。アイツはまだ」

「アレがいつ消えるかもわからん。それに私にはまだ切り札が残っている」

コレ以上この少年を

この世界の戦いに巻き込む訳にはいかない
それにあの状態なら

「少年。君の世界への水先案内人はこのグラハム・エーカーが引き受けた。トランザム！！」

そのままススム

体にファングからビームやファング自体が突き刺さる
だが、そんなモノ関係ない

「おい！？アンタまさか死ぬつも——」

「これは死ではない！！人類が生き延びるための」

まさかこのシステムを

使う時が来るとはな。カタギリが絶対に使うなど
この機体の情報が漏れないように

予備システムとしてつけられたシステム

自爆

シャル。すまない

君との新婚旅行は行けそうにないよ

「という夢を見た」

「怖いわ!!」

うむ……

最近見た夢について

一夏二人男同士で話していたのだが

ついでに最近の一夏の夢で

一番印象に残ったのは、ハイライトが消えた目をした筈に

後ろから包丁を刺される夢らしい……現実になりそうだな

「まあ、夢は夢だ。お互い忘れようぜ」

「そうだな」

そうアレは夢だ

私達の未来はきつともと光り輝く良い未来に違いない
私は心からそう願っているよ

《自由》【天道松】『本来書きたかったものに津波が登場するから、急遽予定外

こんな感じの内容が？一杯のモノになりました
本当は

グラハム達が新入生に演劇をするもの

だったのですが……こっちに関しましては
現在大幅修正し
本編に乗せようと考えています

時間が間に合えばこちらに春の部門で載せますが……

そして急遽ゲスト出演した

O R I 斑君とミイちゃん

ミイちゃんは敢えて本名での出演を控えました

この作品も近日……

むしろ清書でき次第（早くて今日以内）投稿予定ですので
その時をお楽しみに~~~~~

では最後に代案のおまけをどうぞ

「どうかしましたの一夏？」

「あの日のことを思い出してた」

そうあの出会い

神が与えた偶然か？それとも必然だったのか

それは分からないが……あの出会いがあるから今の俺がいる

あの人のおかげで

今の俺達がここにいれる。

あの人が死んだのかそれは俺にもミィにも分からない

「まあ……今は自分の事かな？」

「そうですね。どうしますの？」

「まさか試験会場で迷子になるとは……」

アレから1年

今日は高校の入試

藍越学園の入試日である

ミィはいつも通り鬼面のペンダントに姿を変えて
俺と共にいる

「だから言いましたのに……」

「仕方がないだろ。まさか俺がトイレに行ってる間に皆いなくなる
なんて」

今回の入試

俺が短期講習として通った

塾の仲間数人と一緒に会場入りする筈だったのだが

俺がトイレに行っている間に会場入りしてしまい、仕方がなく俺一人で

会場に入って今の状態である

ミイは会場に入るまで

トイレを我慢しろと言っていた

その為いまこんな風に責められている

「お！？この部屋じゃないか。なんか扉が大きいぞ！！」

「はあゝやっとですわね」

「さて、張り切って行きますか」

俺は今を一步步歩いていく

今はまだミイや千冬姉に守られてるけど

いつかは俺が家族を守るようになるために……

〈自由〉 【縞瑪瑙】 『蒼穹のI S』前日譚（前書き）

なんだかんだで一番遅くなつた縞瑪瑙です。

これは本編が始まる少しだけ前のお話、新学期直前の一騎や真矢、
楯無、

そして一夏達のある日の姿。

若干短めですがどうぞ！

春

それは出会いの季節、そして何かと別れを告げて新しく踏み出していく季節でもある。

これはもしかしたらあったかもしれない春の物語。

チュン・・・チュン・・・

「・・・朝・・・か」

雀がさえずる声を聞きながら真壁一騎はゆっくりとベットから体を起こす。

意識は徐々にだが覚醒し、春がさらに深まり寒さもだいぶ楽になってきた。なので

閉じたままの目でも、春が近づいてきていることがはっきりと見えるようだ。

「・・・今日は街で買い物だけ？ 楯無さんと遠見と剣児、

後は咲良だったな・・・」

そう呟くと、一騎は目が閉ざされたままにもかかわらず、すいすいとベットの上を片づけ始める。

IS学園近くのマンションの一室を借りて暮らし始めて二週間余りがたっていた。

国連特別代表候補生の審査の結果を待っているため、まだIS学園には転入していなかった。

もし合格すればそれなりの手続きを踏まなければならない、不必要に目立ってしまうのは

何かと不便になるため、こうして暮らしている。

ちなみに真矢は隣の部屋に暮らしているが、料理が全くできないためほぼ毎日

一騎の料理の相伴にあずかっている。

（今日は楯無さんがウチで夕食食べるって言っていたな・・・食材多めに

用意しないと）

そんな事を考えているうちに、一騎はベットメイキングを終え、キッチンへと

素足の感覚を頼りに歩き出す。最初は家具や壁にぶつかっていたのだが、もはや

目が見えなくても困らないレベルまで記憶していた。

「?・・・これって・・・」

ところが一騎の足が、記憶にない家具に触れる。というかやたらと柔らかく

思わず手で触っていたくなる感触の何かだ。当然一騎はあまり余計な家具は部屋に

置いていないし、昨日は荷物や家具は動かしていない。

「なんだコレ・・・?」

フニユ、フニユ・・・

手を伸ばして、より細かく物体の形を知ろうとする。

指先で物体の外側のラインをなぞり、該当するものを頭の中で一斉に検索する。

（うん、やっぱり柔らかくて触り心地が良い……でも形は変に歪んでいる。

　　つてことはクッションじゃないし、遠見が持ち込んでいた人形でもないだろうから

　　枕かな？でもこんなに温かくて、大きい奴はなかったはず……（……？）

より詳しく探ろうと、指に力を入れたときだった。その声がしたのは。

「うっうん……一騎君……これ以上いじめないで……」

「！！！！&#x\$¥！！！！」

「えゝおねだりしろ？……意外とS……だなんて……私、きいてな……」

（よし落ち着け……今のは幻聴に違いない。だって楯無さんが朝から

こんなところでR指定がつきそうな寝言を言っているわけがない。

そもそも前回楯無さんが侵入して来てから、鍵とか玄関のロックシステムは

全部変えたのに……故にあり得ない！！！！）

そう、一騎は現実逃避をしているが、リビングに、何処からともなく一騎の布団を

持ってきて寝言を呟きながら寝ているのは、IS学園生徒会長にして暗部『楯無』の

当主、そして自由国籍を持ちロシアの代表を若干17歳で務める更識楯無、

その人であった。

「あれ……一騎君おはよう……」

まだまだ眠いのか、楯無は半分しかあいていない目で一騎を見つめた後、ぱたりと

起こしていた頭を元に戻す。

「楯無さん……一体どうやって中に入ってきたんですか？

鍵とかはもう変えてあったのに……というより勝手に布団を持ってかないで

くださいよ」

「うゝん、それは無理ね。一騎君の体温が移っていないと、私は寝れないの。」

だから鍵は針金とノートパソコンでちょよつといじってきたのよ。

まあ古風な言い方をすれば朝駆けしてみただけよ。おねーさん、一騎君に

惚れているから」

「もう病気のレベルですね……はあ……」

もう何を言っても無駄だと判断して、一騎はそのままリビングに向かう。

こういうときはもう諦めて、帰ってくれるのを待つしかない。知り合って数週間だが、

こういう性格なのだと一騎は割り切っていた。否、割り切らなかつたら一騎といえど

振り回されていただろう。

「じゃあ、朝食食べたら一緒に買い物行きましょ。転入も近いんだから、

おねーさんがいろいろ見つくるってあげるわよ。

あつ、後朝食は私が作っておいたから、おいしく食べてね。わたしごと」

最後の言葉を完全に聞き流して一騎はにおいを嗅ぐ。

すると確かにおいしそうなにおいが台所から漂ってきて、一騎の鼻

孔を満たした。

「ありがとうございます、楯無さん」

一応一騎は礼を言う。竜宮島で暮らしていた時は、料理がてんでめな父史彦に代わって

毎日三食料理を作っていた。ために他の人が自分の食事を作ってくれるのはとても

ありがたいことである。

「やん。楯無じゃなくて、二人っきりのときはそう呼ばないでよ。

一騎君だけなんだから、私の本名を教えたのは……」

そう言うなり、一騎にゆつくりと密着する楯無。軽い言葉とは裏腹に、何処となく

真剣味を持った声。その指すところを察した一騎は、そのまま楯無に柔らかに

抱きしめられてしまう。

「ほらほら……早く名前……呼んでよ……一騎・

……」

「……う……」

プロポーシオンがとても素晴らしい楯無に抱きつかれ、一騎はほほを赤らめる。

しかしそれでも楯無から体温とともに伝わってくる、熱い気持ちも同時に感じている。

それは彼女が『生徒会長』や『ロシア代表』、『更識家当主』といった仮面を

自らはずし、一人の女性^{オンナ}としての姿をさらしているためだ。

その色気に、盲目だが健全な男子の一騎は酔ってしまいそうになる。

(もう……一押し……ね……)

むろん楯無とて羞恥心は持ち合わせている。しかし今はそんなものなど、意識の外に
追いやられていた。

「それじゃ……」

ゆっくりと耳に届く自身の本名を、まるで音楽の余韻を楽しむように、目を閉じて

聞く楯無。徐々にその頬は赤く染まり、たまった熱い息が口からもれ出す。

徐々に開かれた瞳はわずかにうるんでいた。

「これで……いいか……？」

「うん……いいわよ……及第点ね……」

「まだまだ足りないんですか？」

「当たり前……敬語が混じった……マイナス十点」

「……」

そう言いつつゆっくりと身を一騎から離すと、楯無は一騎の手をとり引つ張る。

「じゃあさっそく朝ごはんね！一日の元気は朝食から！実践朝ごはん！」

ガチャ……

その時玄関のドアが開く音が聞こえた。続いて靴を脱ぎそれをそろえる音も。

そしてその足音の主は、一直線にこっちに向かって近づいてくる。

（この歩き方は……まさか……！）

とっさに腕を振りほどこうとするが、楯無はその手を離さず逆に自分の体を

後ろから抱き締めるように回す。結果的に一騎が楯無を後ろから抱いているようになる。

（楯無……ここでなんで誤解を招くような行動を！？）

（あら、もう既成事実ができそうじゃない。そもそも私の本名が分かった時点で

婿入り決定のようなものよ」

（なんだそりゃ・・・）

そんなやり取りをしているうちに、足音はついにリビングのドアの外まで迫った。

「おはよー一騎く・・・ん・・・」

その声を聞いた瞬間、一騎は短い人生が終わりを告げたように感じた。

遠見真矢。一騎と同じ国連特別代表候補生にして、一騎に思いを寄せる女性。

しかしその心は、やはり花も恥じらう十代乙女。その純情もかなり過激なものだ。

「なにを・・・しているの一騎君・・・？ウフフフフ・・・」

瞳孔のハイライトが消え、のどの奥から不気味な笑いをもらしながら、

真矢は一騎へと迫ってくる。何処からともなく七十五口径スナイパーライフル

ドラゴントウースを取り出し、マガジンをセットしながら真矢は尋ねる。

（終わった・・・総士・・・俺はお前のいる必ず島に帰る・・・）

待っていてくれ。頼む・・・）

（あきらめるな一騎！おい、一騎イーーーーー！）

チュドーン！！

近隣住民が何かの爆発音で一気に目が覚めたのは余談である。

十数分後、一騎と真矢、楯無は朝食の席についていた。

しかし、一騎は先ほどの攻防戦から脱した後にほっとする間もなく陥ってしまった

この状況をどう打開するか悩んでいた。

（想像以上に・・・キツイ・・・これはさすがに）

現在、一騎は朝食が所狭しと並んだテーブルについている。ただし右側に真矢、

左側に楯無が座っており、一騎を挟んでのにらみ合いがずっと続いている。

（いくらなんでも朝食の時から俺をとり合わなくてもいいのに・・・）

無論一騎はなかなかの敏感であり、二人の好意にはとくに気が付いているのだが、

だからこそ今の状況に苦しんでいる。

（まあ、それを言ったところで如何にもならないしな・・・うまく二人の

バランスをとるしかない。今のところは・・・それしか

そう言えば楯無の妹さんの簪さん・・・何となく嫌な予感がある。

うまく言えないけど何か持って行かれそうな気が・・・注意しよう）

そこで一騎は考えを中断して箸を手取る。

料理を盛った皿は一騎が取りやすいように、円形に並べられている。また煮物や炒め物

の皿の配置も決まっているので、食べたいものをとることができる。しかしこの二人がいる時点で、その配置は全く意味をなさない。というよりも

一騎は箸を動かす回数自体が少なく済むのだ。

「はい一騎君。目玉焼き、あ〜ん」

「あ、あ〜ん」

パクリ、真矢から出された一口大に切った目玉焼きをおいしくいただく。

「一騎君、次はハムだよ。ホラ早く早く」

「はいはい」

「ハイは一回。元気に言って？おねーさんの愛情がこもっているんだから」

「・・・はい」

こういうわけだ。一騎としては二人が朝食を食べていないことが気がかりだったが、

そこを尋ねるほど鈍感ではない。

（はぁ・・・腹をくくろう・・・逃げられない）

ちょうどその時、机に置かれていた一騎の携帯が鳴った。

『飛び散ったカケラバラバラになる〜魂はまるで大気にとけこ〜むように』

「おっと、電話・・・」

一騎は音を頼りに手を伸ばし、机の隅に置いてあった携帯を手に取り

る。それを開くと

指でボタンの配列を探ると迷うことなく通話ボタンを押して耳に当てる。

「もしもし？」

『もしもし？一騎か？俺だ』

「剣児か？おはよう」

電話の相手はファフナーパイロットの一人であり、竜宮島に新たにできた高校の

生徒会長を努めている近藤剣児だった。

彼はファフナーマークアハトのパイロットとして、咲良と衛とペアを組んで島の防衛に

あたっていた。しかし一時期、咲良の同化現象や衛の戦死でショックを受けて

搭乗を拒否していた時もあった。

それでも蒼穹作戦には、咲良を救うために再びファフナーに乗り、見事作戦を

生き抜いた歴戦の勇士だ。

現在は症状が回復した咲良の介護をしつつ、IS学園に出向いている小楯保に代わって

島唯一の銭湯『竜宮城』を管理している。

ちなみに島には高校がそれまではなかったが、子供たちの強い希望により

中学校の校舎の一部を区切って高校としている。実際にはほとんど両者に違いはなく、

カノンの里親の羽佐間容子が『校長』を務めている。ちなみに史彦

は教頭だ。

子供が自分の意思で学校に通い生活すること。それは偽りの平和を知って、

より今の平和を大切に思うようになり、『卒業』してアルヴィスの一員として

働くことを選ばなかった子供が多い事を指している。

今の平和を噛みしめていたいから……

「どうしたんだ？こんな朝早く」

『じつはよ、咲良が今朝体調崩しちまって、買い物に行くのがちよつと

できなくなつたんだわ。

本人は行くつて言い張つてるけど、一応今日一日は治療に専念することになった』

電話の向こうで、剣児がやれやれという具合にため息をつくのが聞こえる。

咲良の性格をよく知る二人だけあつて互いに苦笑いする。

「そうか……でもいつ戦いになるかわからないから、早い方がいいよな」

『そういうわけなんだわ……あとちよつと真矢に代わつてくんねえか？

束さんが伝えたいことがあるつてさ』

「遠見に？解つた」

いったん耳から携帯を離すと真矢の方を向いて差し出す。

「遠見、電話だ」

「私に？つてことは束さんかな？」

いったん楯無とのにらみ合いをやめ一騎から携帯を受け取る真矢。

「もしもし？真矢です」

『やあー真矢ちゃん、そっちでの生活は順調かな?』

「はい、とつても順調です!あ、でも審査の結果つてまだ来てないから結構不安です」

『まあ審査のことはどうでもいいや。ところで真矢ちゃんこの後すぐにIS学園の

ブルグに来てくれないかな?』

「えっ・・・これからですか・・・まあ大丈夫ですけど・・・」
ちらりと一騎と楯無のほうに視線を送り考え込む真矢。

『マークジーベンの調節をもう一回しておきたいんだ。

もうこれ以上Cコード酔いをしてほしくないし、完璧十全を求める束さんとして

見逃せないの。おわかり?』

「・・・解りました・・・ちよつと残念だけどこれから向かいます」

『りょくかい!じゃ待つてるよ!』

はあ、とため息をついて真矢は携帯を一騎の手に渡す。

「誰からだつたんだ遠見?」

「束さんから。マークジーベンの調節やるから来てくれって・・・」

もう一度ため息をついた後、真矢はトーストにジャムを塗ってそれを口に運ぶ。

いつもは楽しめるサクサク感が感じられず、おいしく感じられない。

「Cコード酔いがまだまだひどいから・・・だつて。

あれってなんでどんどんひどくなつていくの」

そしてそのまま机に突っ伏してしまう。器用にトーストを持った手だけを上に持ち上げ、

縫ったジャムがこぼれないようにしている。

そしてしばらくした後、真矢は身支度を整えて出かけて行ってしま

う。
「・・・・・・・・・・」

「二人っきりでデートになるわね」
必然的にこうなった。

二人はIS学園近くのショッピングモールへと遊びに来ていた。

当然のように楯無が一騎の腕をとり、半分仕方なく、半分ひかれることを楽しみつつ

一騎はあるいていた。

楯無はIS学園の制服を着ていた。本人いわくおしゃれをしたかったが、学園にどうしても

よらなくてはならなかったらしい。

一騎は島でよく着ていた服を着ている（イメージとしてはファフナーのオーブニングで

一騎が来ていた服）。

「さあ、何処からいく？」

「そうだな……島から服とかは持ってきたから、日用品とか文房具、

後は観賞用のCDを買っておきたい」

「じゃあ、おねーさんがいろいろ選んであげるわよ。荷物とかも持ってあげるから

遠慮なく買いましょう！」

ちなみに国家代表の楯無、すでに日本の代表候補生扱いとなっていて一騎はそれぞれ

給付金が下りている。その額は世間一般では到底お目にかかれない額だ。

そういうわけで軍資金はたくさんあるのだが、実際に一騎が買うものは少なく、

また買っても使うことができる物はこれもまた少ない。

最初に訪れたのは商店街だった。後に何度も訪れることになるとは

一騎は知らなかった。

一騎はCDショップでクラシック音楽のアルバムを買った。これは最初から聞いていた

わけではなく、ファフナーの訓練の一環で心理テストを受けたときにクラシック音楽や

有名な絵画、過去の有名な小説や作品を読んだ影響だ。

もちろん最近の流行曲やロックやポップミュージックも聞いたが、一騎は静かな

曲や場所が好きなので結果的にクラシックに収まっている。

メテイション

「確か瞑想・テストだっけ？深層心理を確立してファフナーとの一体化に必要なイメージを練るための、自分の心のありようを知るアレ」

「ああ。確か俺のカテゴリは外交的、さまよえるオランダ人タイプ……だった気がする」

する。あんまり覚えていないけど」

境界線と呼ばれる現実と精神の狭間が現れる心象。それを

互いに理解することで、クロッシング・システムという機能を扱い、心を読まれず、

混乱することなく戦うことができる。

それがどのようなものかを、ボーダーラインカテゴリーと呼ばれる、過去の作家が残した

ありとあらゆる芸術作品を鑑賞した。

一人の女性がただ微笑んでいる絵、収穫が終わった畑で落ちている麦を拾う女性達、

何か円盤のようなものを投げようとしている男性の像。

細かくは覚えていないがそんなものをたくさん見たのは確かだ。

続いて文房具の専門店にはいると、手で触った時に気付きやすい出っ張りがある

シャーペンや消しゴム、その他鉛筆や定規を購入する。

IS学園において一騎は、筆記はほとんどせずもっぱら小型の録音機に録音して

後から勉強するつもりだった。また自分に配られるテキストも全て点字で訳された

ものを使うつもりなのであまり必要ではないが、最低限は持つて行きたかった。

「あっそうだ、ちょっと寄りたいところがあるからついてきて」

途中楯無はそういうと、一騎を引つ張って何やら明るい光がたくさん感じられる

店へと入っていく。

「?ここは・・・」

一騎は閉じたままの瞼を通じて、なんとかどんな店か確認しようとした。ついでに

鼻や耳、そして靴を通じて伝わってくる断片的な手がかりをつかもうとする。

わずかに匂う香水の香り、響く足音から女性ばかりが店内にいることが分かる。

ハイヒールの音が耳にひっきりなしに届くからだ。そして組んでいる腕を通じて

楯無の体温がちょっと上がったというか、何か期待するようにこわばるのが感じられた。

「このお店、何を売っているかわかる?」

「ええっと・・・」

自分に向けられてくる女性特有の抗議の視線が体に当たり、ジワリと汗が出てくる。

そして場の空気を感じられる『男は出て行け（意識）』といった感じのメッセージ。

（まさか・・・!）

とつさにISの機能の一部を使い、自分の立てた仮説が正しかったことを悟る。

「楯無・・・!」

「ゴメーン、でもやっぱり一騎君に選んでほしいものなの。だっていろいろ

関係あるでしょ。時間的には夜」

「ツ~~~~~!」

そこは女性ものの衣類を扱う店だった。女性優位の世界になって女性向けの店や

サービスはすさまじい速度で発達した。その中でも女性らしいところを強調する類の品

——たとえば香水、アクセサリ、貴金属、マニキュアなど——を

取り扱う店が増えたのは自然なことだった。おそらくこの店もそうなのだろう、

ほとんどの客が女性で、おまけに一騎の視界の隅にはハイパーセンサー越しに

楯無が自分に選ばせようとしているであろうものがしっかりと写っていた。

（下着……いろいろなまずくないか？色とりどりの……おまけに

フリフリがべらぼうについてるアレを？）

「正気か？」

「正気よ。なにを聞いているのよ、私と一騎君の仲じゃない」

「いやだから……」

そんな風に話していると、女性店員が制服警官を連れて現れた。露骨に不信の表情が

浮かんでいる。そしてこんな場違いな場所に現れた男性に対する、憎悪にも似た感情を

隠すことなくさらけ出している。もちろん顔は営業スマイルだが。

「すいませんがちょっとよろしいですか？沿ってのお連れの方も一緒に」

「ホラ……」

「やつちゃった」

「仕方ないけど……」

「そうね」

二人は連行されそうになったので、それぞれ身分証を提示した。

一騎は日本代表相当の肩書と国連代表候補審査待ちの書かれた身分

証、一方の楯無は

ロシア代表である証の身分証を出す。

「これって……」

「国家代表……ISの……ウソ……!」

「ちよつと見てよこれ!この人男子なのに使えるんだって、ISを!」

見る間に騒ぎだすやじ馬達を前に一騎はため息をついて、声を上げる。

「すいません、俺がISを使えることまだ世間に公表されていないんです。」

「お願いですから黙っていてくれませんか?」

「私としても騒がれるとロシアが黙っていないから気をつけてね」

一見穏やかなことを言っているが、やじ馬は二人が放つ得体のしれない何かに呑み込まれそうになっていた。

それは闘気、あるいは殺気と言った方が良いでしょう。ともかくその『何か』

は確実にその場の人々に恐怖を与えた。そして絶対にこのことをもらすまいと

固く誓うのだった。

「じゃあ、もういいわね。彼、私が連れて来て問題ないと判断したの」

「はっ?」

いまだ疑問符を浮かべる店員に近づくと、その耳元で何事か二言三言囁く。

それを聞いた直後いきなり顔を赤くして楯無と一騎を交互に見つめる店員。ややあつて

店員は納得したようにうなずくとすごすごと引っ込んだ。

「買い物が続けたいので・・・いいでしょうか？」

「え、あ、はい。お時間をとらせました」

そしてそのまま二人は姿を消した。後を追いかけていた者はカメラ片手に首をかしげて

戻ってきてこう言った。

「通りを曲がったらいきなり姿が消えていた。何処にもいなかったんだ、

まるで煙か霧みたいに・・・」

「おい弾、何処行つてたんだよ」

「いやいや、ついさっきそこでISの国家代表がいるって聞いたから、

見に行っていたんだ」

汗だくで戻ってきた赤髪の少年に対して、もう一人の少年が文句を言っている。

どうやらさっきの騒ぎを一目見ようと買い物途中で離れていたようだ。

「で、どうだった？」

「いや、それがいつの間にか消えちゃってよ。全く見れなかった」
がつくりと肩を落とす少年に、織斑一夏はその肩を叩いて慰める。

「まあ気を落とすな。IS学園の写真送ってやるから、な？」

それを聞いて再び五反田弾の瞳に生気が取り戻される。

「お、マジでか！？よっしゃああ！今から楽しみだぜええ！」

そんな親友を見ながらも一夏は買い物を続けて行く。

「彼が・・・織斑一夏・・・ごく普通のやつなんだ・・・」

「そうね、鍛え上げれば強くなりそうな感じがするわ。成長が楽しみね」

そんな様子を物陰から眺めているのは一騎と楯無だった。二人ともISのハイパー

センサーを通じて先ほどから眺めていたのだ。

「俺みたいに襲っちゃダメだから・・・気をつけてくれよ」

「はいはい、未来の旦那様！」

「やれやれ・・・」

いつかIS学園で会うことになる少年を見つめた二人は、買い物袋を提げて帰路に就いた。

彼をめぐる戦いが来ることを予想しながら。

いかがでしたでしょうか？

この話は本当は楯無と結婚前提で付き合うことになった一騎のある日を書くつもりでしたが、なんとなくまとまらなかったので新学期直前の挿話にしました。

これといってこったりはしませんでしたが、本編を書いているうちになんとなく書きたくなったネタを盛り込みました。

一騎は日本代表に匹敵する地位を持っている……という後付設定を

してしまいました。

少しでも楽しんでいただいたらうれしいです。それでは。

〈自由〉【天道】『自由部門閉会式』（前書き）

天道松さんの依頼により、私が書くことになりました。

これより、自由部門の閉会式を行います。

《自由》【天道】『自由部門閉会式』

遊星「よし、行くぞ。一夏、始めてくれ」

一夏「ああ。それでは、『IS短編コンテスト グラハム杯（仮）』の自由部門、閉会式を開幕行います！」

遊星「アニメ、IS インフィニット・ストラトスのスタートで書き始めた多くの小説家達の交流と筆力の向上を目的としたグラハム杯もこうして無事に終わることができました」

一夏「グラハム杯の多くの参加者と読者の皆さま、ありがとうございました！」

遊星「これにて、『IS短編コンテスト グラハム杯（仮）』の自由部門、閉会式を閉幕します」

〈春〉【岸边 翔】『春部門閉会式』（前書き）

天道さんの依頼により、僭越ながら私が春部門の閉会式を書かせていただきました。

アニメの2期、決定するといいですねえ。

〈春〉【岸边 翔】『春部門閉会式』

一夏 「ん、何処だここ」

セシリア 「閉会式……のようすわね」

ラウラ 「閉会式？ …………… ああ、そういえばそんな任務があったな」

シャルロット 「先生たちいないけどいいのかな？」

鈴音 「いいんじゃない？ 別に勝手なことだし」

箒 「では一夏、頼む」

一夏 「あいよ。えー、これにてグラハム杯（仮）の閉会式を開催します」

ラウラ 「様々な作者の作品が集まる中、どれも見所のある短編を書いてくれた」

鈴音 「なにがどうグラハムなのかわかんないけどね」

箒 「余計な事を言うな」

シャルロット 「ま、まあまあ」

セシリア 「こほんっ。ともかく、地震もあつた中無事に終わらせることができたわけすわ」

一夏 「だな。では、これで閉会式を終わります」

全員 「2期も期待だ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3453r/>

IS 短編コンテスト グラハム杯（仮）

2011年10月8日20時04分発行